佐賀県文化財調査報告書第172集

県立吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書

吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区・枝町遺跡

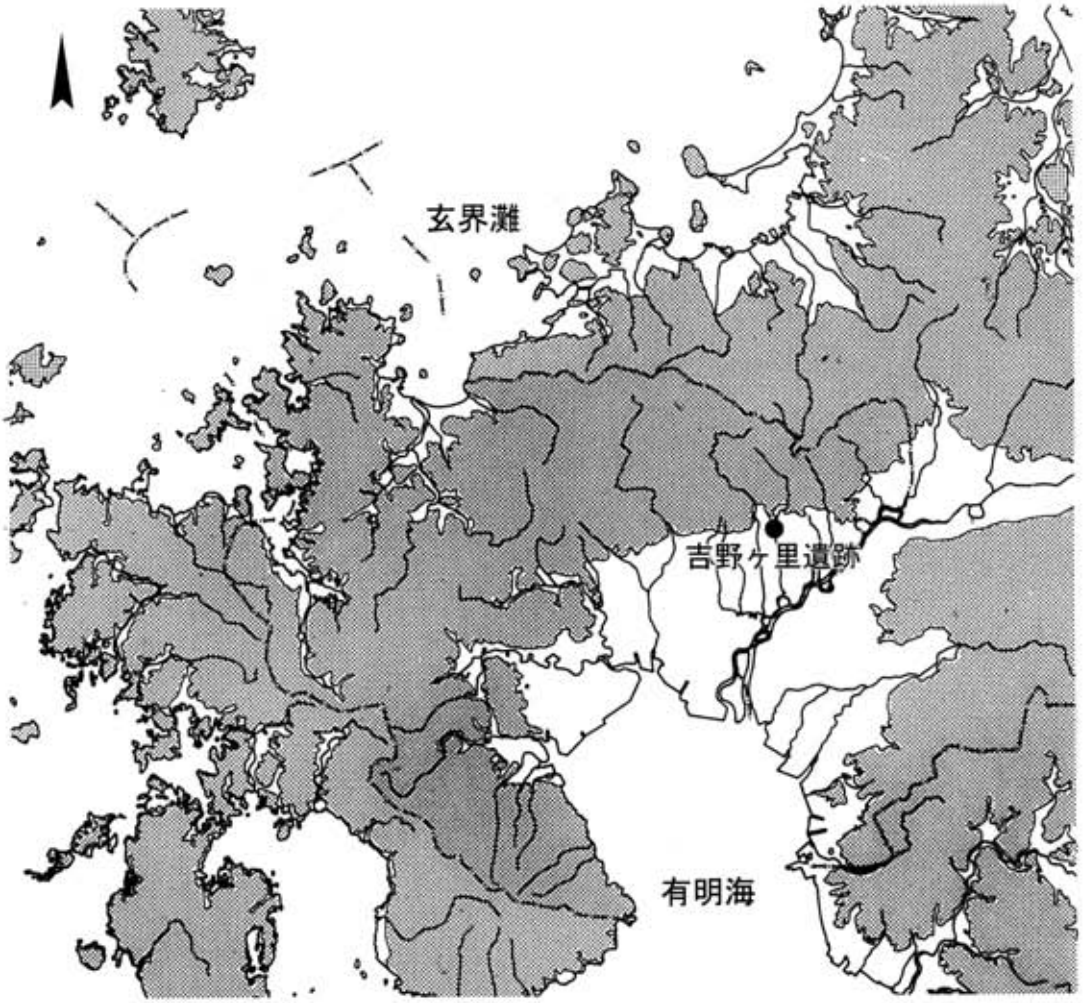
平成19（2007）年３月

佐 賀 県 教 育 委 員 会

佐賀県文化財調査報告書第172集

県立吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書

吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区・枝町遺跡



平成19（2007）年３月

佐 賀 県 教 育 委 員 会

序

本調査報告書は、佐賀県教育委員会が県土づくり本部まちづくり推進課・神埼土木事務所の依頼を受けて実施した県立吉野ヶ里歴史公園整備に伴う神埼市・郡所在の吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区、枝町遺跡に係る埋蔵文化財調査報告書です。

吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区では、九州初となる銅鐸の出土や奈良時代の寺院跡である辛上廃寺の調査が行なわれ、吉野ヶ里遺跡の調査に新たな知見をもたらしました。枝町遺跡の調査では、低平地に営まれた古墳時代前期の方形周溝墓の存在が明らかになるなど、神埼市・郡の歴史解明に大きな手がかりとなりました。

本書の内容が本県の学術文化の向上に寄与するとともに、神埼市民のみならず県民の皆様に郷土の歴史を理解する上でその一助になれば幸いに存じます。

なお、刊行にあたり、発掘作業に従事していただいた地元の皆様をはじめとする関係者に対し心から厚く御礼申し上げます。

平成19年３月

佐賀県教育委員会
教育長　吉野健二

例　　言

1　本書は、県立吉野ヶ里歴史公園整備に伴い平成10～15年度に発掘調査を実施した佐賀県神埼郡吉野ヶ里町吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区、神埼市枝町遺跡に係る文化財調査報告書である。

2　発掘調査は、県土づくり本部（旧土木部）まちづくり推進課・神埼土木事務所の依頼を受け、佐賀県教育委員会が主体となり三田川町（現吉野ヶ里町）教育委員会の協力を得て実施した。

3　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区の発掘調査には、七田忠昭、山口良弥、細川金也、鷲見昌尚、渋谷格があたり、枝町遺跡の発掘調査には、渋谷格、鷲見昌尚、七田忠昭、細川金也があたった。

4　調査記録の整理と報告書作成作業は、佐賀県文化課、佐賀県文化財調査研究資料室、吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所で実施した。

報告書製作に従事された方は下記のとおりである。

遺物整理・実測・製図等：渋谷格、細川金也、奥知恵子、村里育子、江副朋子、皆越弘子、馬場里美、秋吉京子、伊東直子、緒方恭子、野口孝子、原口晴美、御厨瑞枝、山崎常美、横枕栄子、吉江博子、井節子、江口啓子、大柿珠美、坂口サチ子、佐藤春子、竹下浩子、羽田すま子、平石明子、戸塚洋輔

5　本書の編集・執筆は、七田・廣瀬雄一・長崎浩の協力を得て、細川が行なった。

凡　　例

1．吉野ヶ里遺跡大曲一の坪遺跡の略号はOIT、枝町遺跡の略号はEDMである。

2．遺構の種別記号は、次のとおりである。

SH：竪穴住居、SB：掘立柱建物、SK：土坑、SD：溝･環濠、ST：方形周溝墓、SX：不明遺構（塔基壇跡を含む。）

3．各遺構番号は、連番とし、発掘調査時の遺構番号をそのまま用いた。また、一部遺構種別を変更した遺構番号もあるが、本書内に変更を記している。

4．本書に用いた方位は、国土座標第II系の座標北である。

5．遺構・遺物写真、遺構・遺物実測図は、佐賀県文化財調査研究資料室および吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所（平成19年３月30日現在）にて保管している。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1

1　調査に至る経過…… 1

第２章　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区の調査概要 …… 3

1　遺跡の概要…… 3

2　各調査区の概要…… 5

(1)　311・342区…… 5

(2)　348区 …… 10

(3)　349区 …… 10

(4)　353区 …… 13

(5)　352区 …… 13

(6)　366区 …… 18

3　大曲一の坪地区出土遺物…… 22

第３章　枝町遺跡の調査概要…… 28

1　調査に至る経過…… 28

2　遺跡の概要…… 28

3　調査の内容…… 31

(1)　弥生時代の遺構…… 31

(2)　古墳時代前期の遺構…… 34

(3)　奈良時代～中世の土坑・井戸跡…… 40

4　枝町遺跡出土遺物…… 40

第４章　まとめ …… 50

1　辛上廃寺の伽藍配置とその時期…… 50

2　辛上廃寺周辺の状況…… 52

3　枝町遺跡の状況…… 54

挿　図　目　次

第１図　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区・枝町遺跡位置図（1/10,000）…… 2
第２図　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区遺構配置図（1/1,000）…… 4
第３図　大曲一の坪地区311区遺構配置図（1/300）…… 6
第４図　大曲一の坪地区342・352・353区遺構配置図（1/300）…… 7
第５図　大曲一の坪地区349区遺構配置図（1/300）…… 9
第６図　大曲一の坪地区366区遺構配置図（1/300）…… 11
第７図　大曲一の坪地区348区遺構配置図（1/250）・SD066溝跡土層図（1/30）…… 12
第８図　SB058・011掘立柱建物跡（1/80）…… 14
第９図　SB061掘立柱建物跡（1/120）…… 15
第10図　SX049塔基壇跡平面図（1/160）・断面図（1/80）SD009・010溝跡土層図（1/30）…… 16
第11図　SD036・009溝跡土層図（1/30）SK014・017・018・025土坑（1/40）…… 17
第12図　SB095・096掘立柱建物跡（1/100）…… 19
第13図　SB097掘立柱建物跡（1/200）…… 20
第14図　SB120掘立柱建物跡（1/100）…… 21
第15図　大曲一の坪地区遺構出土土器①（1/4）…… 23
第16図　大曲一の坪地区遺構出土土器②（1/4）…… 24
第17図　大曲一の坪地区遺構出土土器③（1/4）…… 25
第18図　大曲一の坪地区出土軒丸・軒平瓦（1/6）・平瓦①（1/8）…… 26
第19図　大曲一の坪地区出土平瓦②（1/8）…… 27
第20図　枝町遺跡１区西側遺構配置図（1/250）…… 29
第21図　枝町遺跡１区中央部・２区遺構配置図（1/300）…… 30
第22図　枝町遺跡２区遺構配置図（1/100）…… 32
第23図　枝町遺跡SJ001・002・003甕棺墓（1/30）…… 33
第24図　枝町遺跡SJ004・032・031甕棺墓（1/30）…… 35
第25図　枝町遺跡SJ040・038甕棺墓・SK053土坑（1/30）…… 36
第26図　ST011・012溝跡（1/80）・土層図（1/40）・ST015・014溝跡（1/80）・ST015土層図（1/40）…… 38
第27図　ST018・020溝跡・ST050・051溝跡（1/80）・土層図（1/40）・ST016溝跡（1/80）…… 39
第28図　SK005・006・007・023土坑・SE026井戸跡（1/40）…… 41
第29図　枝町遺跡出土甕棺①（1/12）…… 43
第30図　枝町遺跡出土甕棺②（1/12）…… 44
第31図　SK053土坑出土土器（1/4）…… 46
第32図　SD025溝跡出土土器（1/4）…… 47
第33図　SD011・050・051溝跡出土土器（1/4）…… 48
第34図　SK006・007土坑・SE027井戸跡出土土器（1/4）・SK007土坑出土金属器（1/2）…… 49
第35図　辛上廃寺伽藍配置模式図（1/600）…… 51
第36図　吉野ヶ里遺跡周辺奈良時代官衙関連遺跡位置図（1/5,000）…… 53
第37図　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区遺構配置図（1/500）…… 59・60
第38図　枝町遺跡遺構配置図（1/500）…… 61・62

表　目　次

第１表　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区における調査内容……　3
第２表　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区・枝町遺跡遺物観察表……　56

写真図版目次

PL. 1 大曲一の坪地区全景（南上空から）／大曲一の坪地区全景（東上空から）
PL. 2 大曲一の坪地区366区全景（上空から）／366区　SB095・096・097掘立柱建物跡全景（上空から）
PL. 3 大曲一の坪地区348区全景（上空から）／SX049塔基壇跡全景（上空から）／大曲一の坪地区349区全景（上空から）／SB058掘立柱建物跡全景（上空から）／SB061掘立柱建物跡全景（北上空から）／SB011掘立柱建物跡全景（上空から）
PL. 4 SB011掘立柱建物跡P－１半裁状況（東から）／SX049塔基壇跡南側土層断面（東から）／SD007溝跡瓦出土状況（南から）／SD036・009溝跡土層断面（北西から）／SD062溝跡瓦出土状況（南から）／SK013土坑瓦出土状況（南から）／SK004土坑検出状況（南から）／SK014土坑半裁状況（南から）
PL. 5 SK017土坑半裁状況（南から）／SK020土坑半裁状況（南から）／SK025土坑土器出土状況（東から）／SK031土坑半裁状況（南から）／大曲一の坪地区348区全景（南から）／SD066溝跡全景（南から）／SD066溝跡遺物出土状況（南東から）／SD066溝跡土層断面（北から）
PL. 6 大曲一の坪地区352区全景（南から）／大曲一の坪地区353区全景（南から）／SH085竪穴住居跡・SD086溝跡検出状況（北から）／SH084竪穴住居跡検出状況（東から）／SD105溝跡土器出土状況（東から）／SK098土坑土器出土状況／SK099土坑土器出土状況（南から）／SK102土坑検出状況（西から）
PL. 7 枝町遺跡全景（東から）／枝町遺跡１区東側全景（上空から）
PL. 8 枝町遺跡全景（上空から）／枝町遺跡１区中央部全景（上空から）／枝町遺跡１区西側全景（上空から）
PL. 9 SJ001甕棺出土状況（北から）／SJ002甕棺出土状況（北西から）／SJ003・031甕棺出土状況（北から）／SJ004甕棺出土状況（南から）／SJ032甕棺出土状況（北から）／SK006土坑半裁状況（南から）／SK007土坑土器出土状況（東から）／SE027井戸跡検出状況（北から）
PL.10 SD025溝跡土器出土状況（西から）／ST011・012方形周溝墓全景（西から）／SD019溝跡検出状況（南から）／ST018方形周溝墓（SD020溝跡）検出状況（南から）／ST016方形周溝墓検出状況（南西から）／ST014方形周溝墓検出状況（西から）
PL.11 ST050方形周溝墓全景（南から）／ST050方形周溝墓全景（東から）／SK053土坑土器出土状況（北から）

第１章　はじめに

１　調査に至る経過

昭和61年、佐賀県文化課では、神埼工業団地の造成前に神埼郡神埼市（旧神埼町）・吉野ヶ里町（三田川町）にまたがる吉野ヶ里遺跡の調査に着手した。この調査では、奈良時代の官衙関連遺構や弥生時代の甕棺墓列、弥生時代後期の環壕集落跡のほか、ゴホウラ貝やイモ貝などでつくられた貝製腕輪、青銅製の細形銅剣、弥生時代初出土となった巴形銅器の鋳型等、多種多様で膨大な数にのぼる旧石器時代から中世にかけての出土品がみつかり、その遺跡の重要性が注目された。

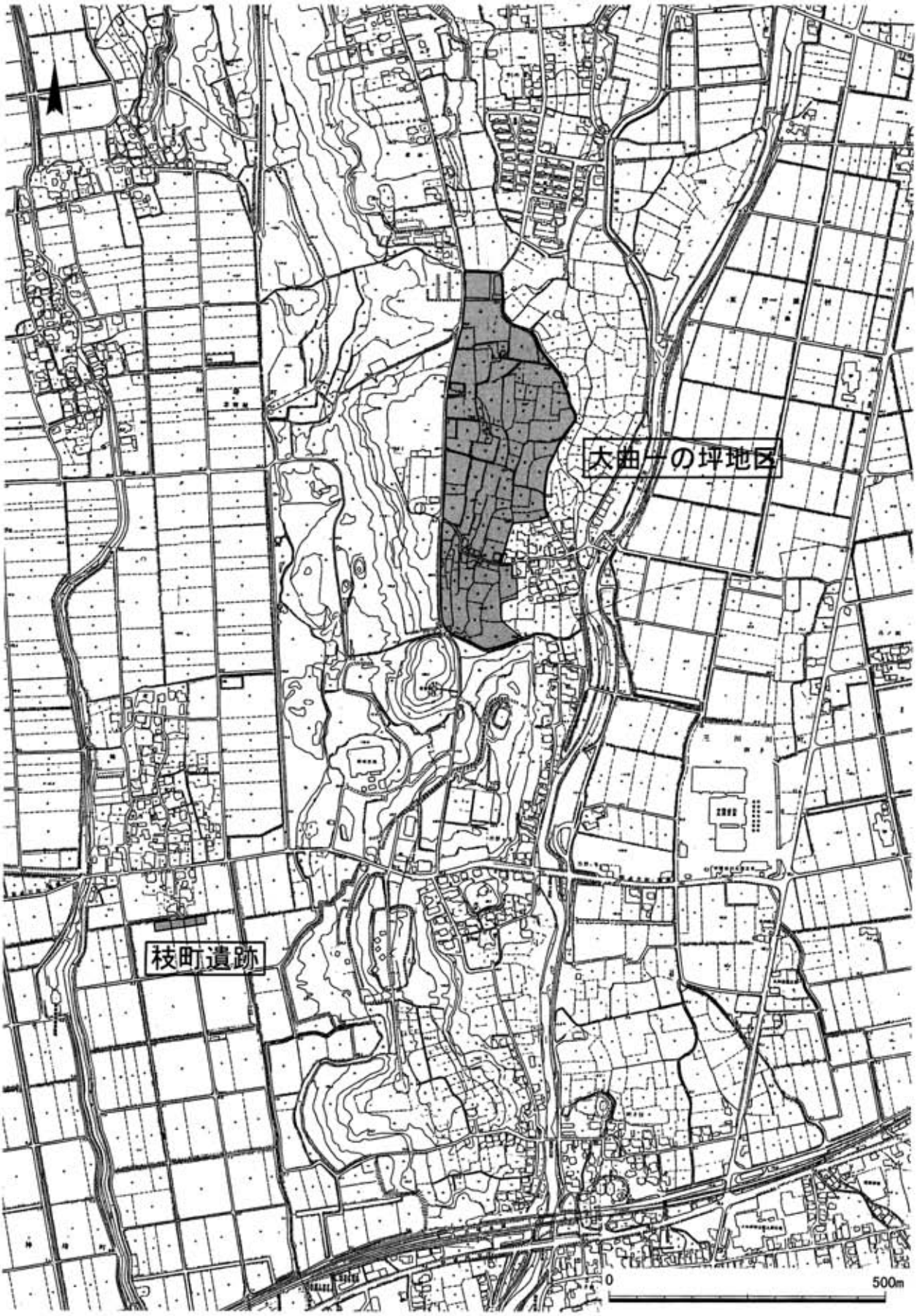
平成元年２月、遺跡の内容が新聞やテレビで報道されると、瞬く間に多くの見学者が遺跡を訪れ、「吉野ヶ里騒動」を巻き起こした。同年３月、墳丘墓の調査で青銅製把頭飾付細形銅剣とガラス製管玉79点を副葬した甕棺が発見されると、遺跡保存の運動は高まりを迎えた。同年４月、吉野ヶ里遺跡の保存が決定された。

吉野ヶ里遺跡の保存決定後、平成２年に国の史跡に、平成３年には特別史跡に指定された。平成４年10月、特別史跡部分22haを含む54haが「国営吉野ヶ里歴史公園」として閣議決定され、国営公園として整備されることになった。また、平成５年には、国営公園の周囲63haを県立公園として整備することになり、国・県合わせ117haを「国営吉野ヶ里歴史公園」として一体整備することになった。国営区域の整備は建設省（現国土交通省）が行い、県立区域の整備は佐賀県が実施することとなった。この吉野ヶ里歴史公園は平成13年４月に開園し、多くの入園者に弥生時代の雰囲気を楽しむことのできる公園として利用されている。

佐賀県が整備を行なう県立区域は、主に吉野ヶ里公園の南西部（神埼市神埼町大字鶴）と北東部（吉野ヶ里町大曲）である。南西部は馬郡集落の南側にあたる場所で、整備前は一面水田であった。馬郡集落付近に枝町遺跡が存在するが、公園区域の大半は、遺跡の存在しない未周知地区である。公園北東部は、現在の辛上集落の北側付近で、大曲一の坪遺跡が存在する。また、この地区は奈良時代の辛上廃寺が存在していた場所として知られていた。

県立公園区域内の文化財調査は、遺跡の保存を前提に確認調査を実施し、工事が地下の遺構面に及ぶようであれば、盛土により遺構の保存を図ることや計画位置をずらすなどの変更を求めた。ただし、これまで調査が実施されていない地点については、吉野ヶ里遺跡周辺の情報を得る目的で、遺構にトレンチを入れることも行なった。

なお、県立区域である歴史公園南西部には、「古代の原ゾーン」として平成７年度から整備が開始され、平成13年の第１期開園区域として共用されている。北東部の大曲一の坪地区は、「古代の森ゾーン」整備が進行中であり、大曲一の坪地区は、辛上廃寺の調査成果を踏まえて、遺跡の整備・保存に着手される予定である。



第１図　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区・枝町遺跡位置図（1/10,000）

第２章　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区の調査概要

１　遺跡の概要

吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区は、佐賀県神埼郡吉野ヶ里町大字大曲に所在する。吉野ヶ里遺跡の北部、志波屋・吉野ヶ里丘陵の頂部を南北に走る農道の東側に位置し、道を挟んだ西側には、吉野ヶ里遺跡志波屋四の坪地区があり、南東隅には、辛上集落がある。大曲一の坪地区は、西側部分が中位段丘の丘陵部で、その東側は低位段丘になる。辛上廃寺はこの低位段丘部分につくられる。辛上廃寺が載る低位段丘部分の東側は、さらに一段低くなり、田手川によって運ばれた砂礫が堆積する沖積地層になる。

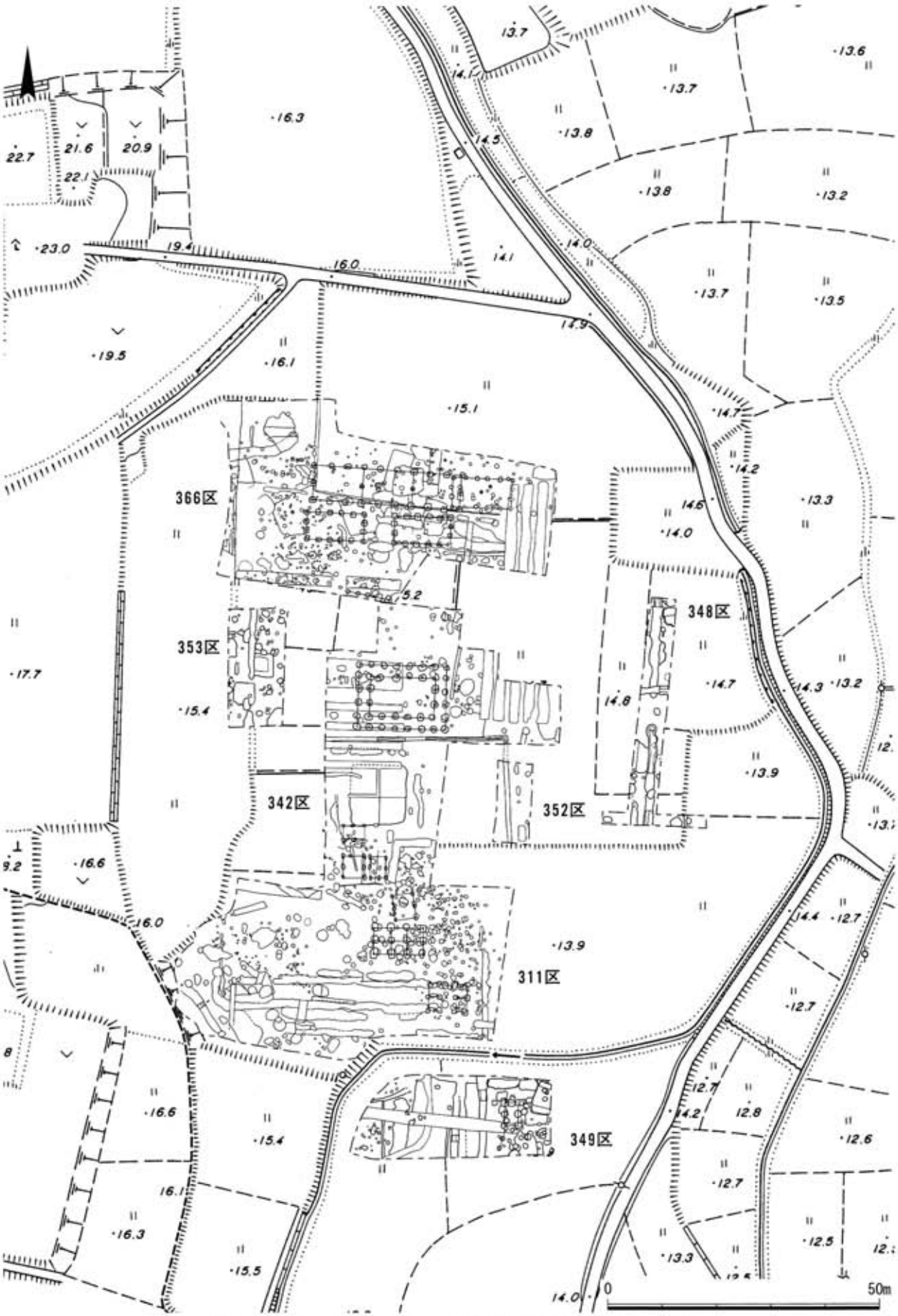
遺跡の現況は、丘陵部分は斜面を一部カット、盛土し、段々畑のような農地を形成する。丘陵東裾部分から沖積地の一段高い部分は、畑地として利用し、低い部分については、水田として利用されていた。水田として利用している土地の中にも、区画を整理した際、切り下げられた場所が何ヶ所か確認できる。特に、311区として調査した地点は、北側の地点よりも0.7ｍ程度切り下げられ、遺構の残りが悪い。

調査は、県立吉野ヶ里歴史公園の整備に伴い実施した。この地区は、丘陵の一部について、確認調査を実施したことがあったが、本格的な調査は実施されなかった。このため、公園整備に着手する前に、遺跡の有無及び性格を知るための試掘調査を平成10年11月から開始した。

試掘調査では、№26トレンチから九州初となる銅鐸が出土し、注目を集めた。また、奈良時代の瓦や遺構の一部が見つかり、これまで未確認であった辛上廃寺に関連する遺構・遺物の存在が確認された。確認調査の結果、大曲一の坪地区は、弥生時代から中世後期の遺構・遺物が良好に遺存していることが判明し、遺跡の重要性から４次に分け、確認調査を実施した。

第１表　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区における調査内容

	期　間	調 査 区	内　容
第１次試掘調査	1993.3.30		吉野ヶ里遺跡確認調査　№180～184
第２次試掘調査	1998.11.08～1998.12.27		大曲一の坪地区北部を対象に37ヶ所のトレンチ調査を実施。№26トレンチから九州初出土の銅鐸出土。
第３次試掘調査	1999.05.10～1999.06.11		大曲一の坪地区南部を対象に28ヶ所のトレンチ調査を実施。№44,53,54トレンチで官道から辛上廃寺に延びる道路側溝状の溝を検出。
確認調査（第１次）	2000.05.17～2000.12.13	311	南門とみられる掘立柱建物とそれに付属し、東西方向に延びる溝跡等を検出。
確認調査（第２次）	2001.11.19～2002.02.20	342	塔の基壇とみられる掘込地業や金堂と推定される４面庇付掘立柱建物等を検出。
確認調査（第３次）	2002.05.20～2002.09.02 2002.11.10～2003.02.07	348,349,352,353	寺域の東西を区画する南北方向の溝跡や硬く締った道路状の遺構を検出。
確認調査（第４次）	2003.12.09～2004.03.09	366	東西方向に主軸を持つ奈良時代の掘立柱建物４棟等を検出。



第２図　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区遺構配置図（1/1,000）

調査の結果、弥生時代中期から後期にかけての甕棺墓や竪穴住居跡、掘立柱建物跡、埋没谷、古墳時代後期の竪穴住居跡、奈良時代の塔基壇跡、門跡や金堂跡、僧坊と推定される掘立柱建物跡、寺域を区画する溝等の寺院関連遺構、鎌倉・室町時代の土坑や溝跡、掘立柱建物跡等を検出した。特に、奈良時代の寺院である辛上廃寺は、寺域が判明し、佐賀県内で伽藍配置が確認された数少ない寺院として重要である。

なお、311・342区については銅鐸の保存・修復事業にあわせて、すでに一部報告を刊行しており、銅鐸についてはそちらで詳述している。(152集)

今回は、その他の地区も含め主要遺構について改めて概要を報告する。

2　各調査区の概要

(1)　311・342区（第3・4図）

金堂や塔基壇等、辛上廃寺の主要な建物や溝が位置する地点である。弥生時代の埋没谷1条、銅鐸埋納坑1基、土坑3基、奈良時代の掘立柱建物跡3棟、溝跡6条、土坑4基、中世の掘立柱建物跡4棟、溝跡6条、土坑23基等を検出している。

調査区南西部分に、北西から南東方向に延びる埋没谷がある。もともと、丘陵縁辺の傾斜変換点とその西側にある低位段丘との境に形成されていたとみられる。埋没谷の幅約24～26m、確認できた深さは、0.2～0.5m。この谷は、349調査区を通り、田手川方向に流れる。埋土は黒色粘質土で、弥生時代中期から後期終末頃の土器を多量に含み、弥生終末頃に埋没したとみられる。

調査区の南西隅は、その南側より、約1m程度低くなっているほか、耕作土直下は、黄白色ロームが露出しており、周囲の地形状況から、丘陵の縁辺を掘削したとみられる。この拡張部には、辛上廃寺の区画溝が延びており、寺院造営の際に地山を掘削したと推定される。

SB058掘立柱建物跡（第8図）

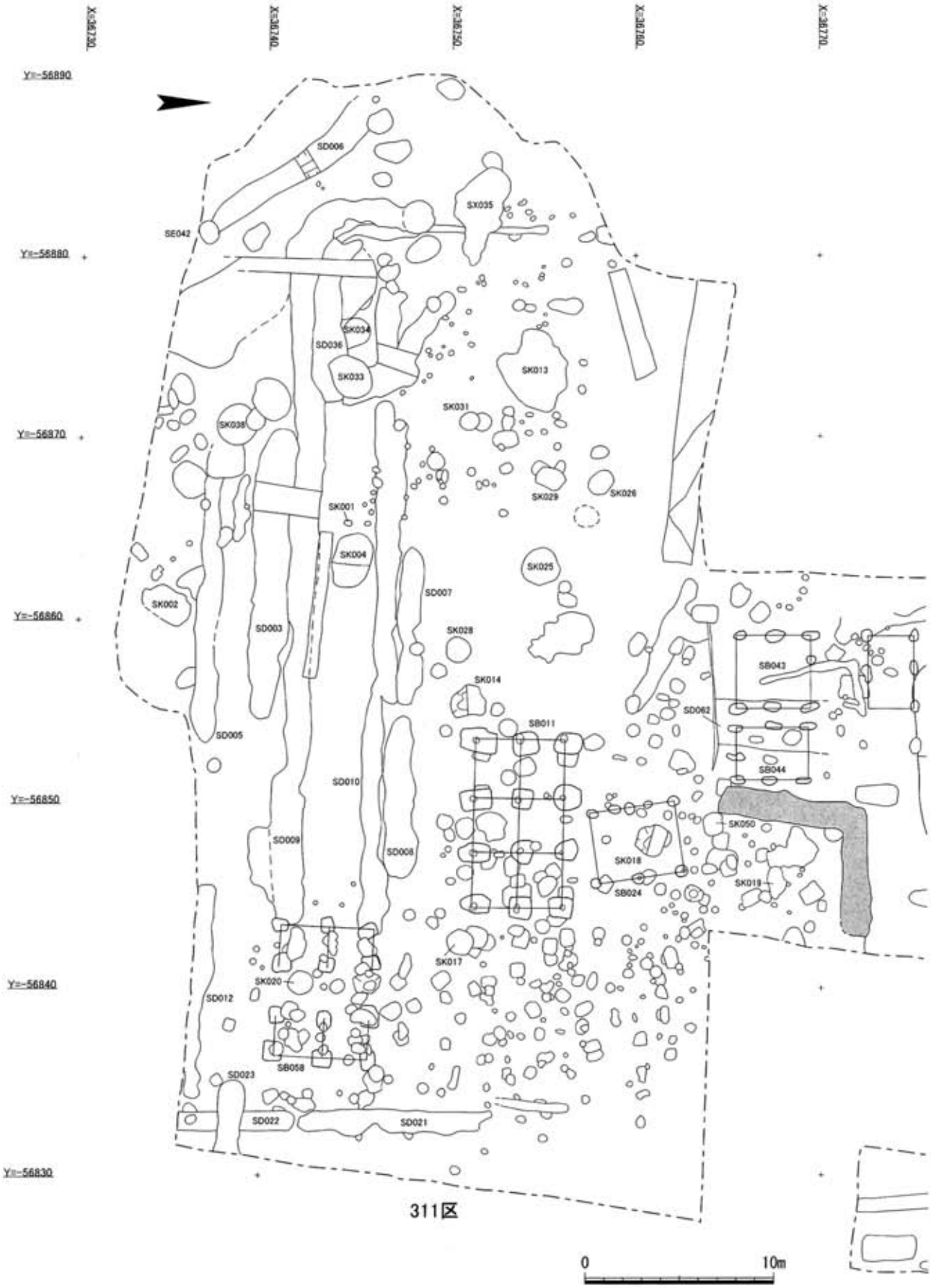
311調査区の南東部に位置する。門跡と推定される梁行2間（5m）、桁行3間（7m）の掘立柱建物跡である。主軸は、N－5°－Eであり、真北よりわずかに東へ傾く。柱穴は、平面方形を基調とし、その規模は一辺が0.7～1.0mである。中央の柱の間隔が広く開き、いくつかの柱には、抜き取り痕が認められる。建物西側の柱穴には、SD009溝跡とSD010溝跡がそれぞれ取り付く。

SB011掘立柱建物跡（第8図）

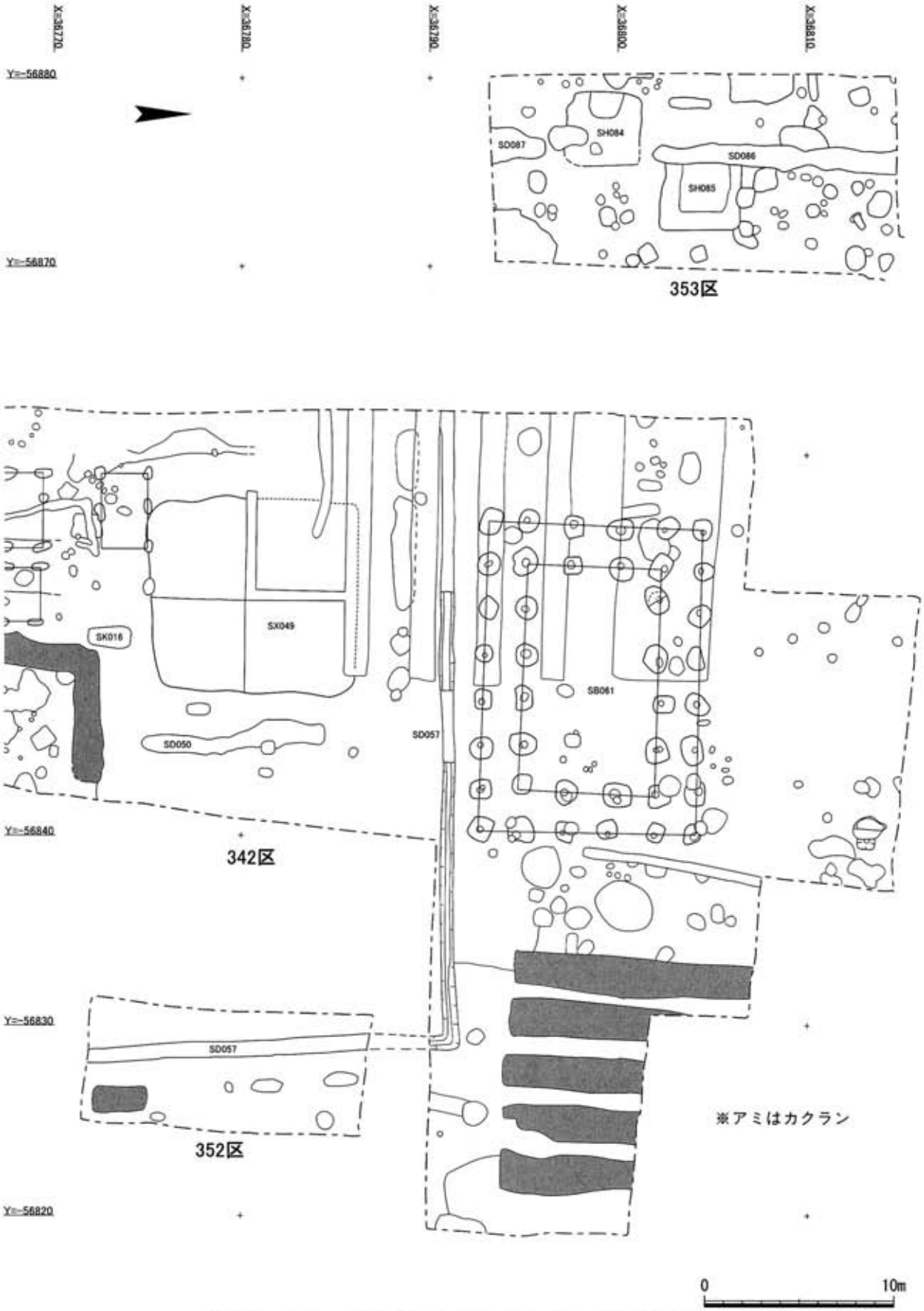
311調査区東部に位置する。梁行2間（4.8m）、桁行3間（9.1m）の掘立柱建物跡である。主軸は、N－2°－Eである。真北よりわずかに東へ傾く。南側の柱の掘方は、平面長方形を基調としているが、中央及び北側の柱は、平面方形及び隅丸方形と位置により形が異なる。いずれの柱にも柱痕が残る。半裁した南西隅の柱は、検出面からの深さが約0.2mしかなく、311調査区付近が後世にかなり削平を受けていることが判明した。また、柱の底には、根固め石が残っていた。建物の性格は不明だが、門の可能性を考えておきたい。

SB061掘立柱建物跡（第9図）

342調査区の北側に位置する。梁行3間（7.2m）、桁行5間（11.7m）の大型掘立柱建物跡である。建物の周囲には、庇が取り付く。主軸はN－5°－EでSB058掘立柱建物と同様の傾きである。柱の掘方は、平面円形を基調とするが、一部隅丸方形のものもある。明確な柱の抜き取りは見られない。掘方の埋土は、黒色粘質土で砂礫も混じる。四面に庇を持つ大型の掘立柱建物であることから金堂と推定する。



第３図　大曲一の坪地区311区遺構配置図（1/300）



第４図　大曲一の坪地区342・352・353区遺構配置図（1/300）

SX049塔基壇跡（第10図）

311・342両調査区の中間、SB061掘立柱建物跡の南側に位置する。一辺が約10ｍの方形をしており、検出面からの深さ0.1～0.5ｍである。基壇を４分割し、南東部を掘り下げ、それと直交するようにL字トレンチを入れた。掘り方底面には、幅約1.2ｍのテラス状（ベット状）の高まりが、基壇東壁に沿って存在する。そのテラス状の高まりから基壇中央に向けてさらに掘り込まれる。ただし、このテラス状の高まりは、西壁北壁では、認められない。南東隅には、土坑や浅い掘り込みが見られるが、これが、基壇に付属する施設かどうかは不明。土層には、砂交じりの黒色粘質土と黒色砂質土を交互につき固める掘込地業が認められる。この基壇跡の東西両側に南北方向の溝が走り、雨落ち溝とみられる。

溝跡は、奈良時代の溝跡８条、中世の溝跡６条を検出した。主なものについて、触れる。

SD009・010溝跡（第10図）は、SB058掘立柱建物跡の西側に取り付く東西方向に延びる溝である。SD009溝跡は、東西方向で約38ｍ、南北方向で7.5ｍ。幅は、1.4～1.9ｍ。検出面からの深さは30～35㎝と浅い。西側で北へ方向を変える。SD010溝跡は約35ｍ。一部で途切れる場所もある。両者の間隔は、2.6～3.2ｍ。出土した遺物は、弥生土器、古墳時代の須恵器、土師器、奈良時代の瓦等である。奈良時代の須恵器や土師器の出土は僅かである。

SD007・008溝跡は、SD010溝跡の北側に接するように位置する東西方向の溝跡。SD007溝跡の長さ約8.5ｍ、幅0.8～1.4ｍ。この溝からは、多量の瓦が出土している。SD008溝跡の長さ９ｍ、幅1.5～1.8ｍ。

SD003・005溝跡は、SD009溝跡の南側に位置する東西方向の溝跡。両者とも非常に浅く、西側で溝の延長が途切れる。両者の間隔は、1.6～1.7ｍ。埋土からは古墳・奈良時代の須恵器・土師器、瓦が出土している。SD003溝跡とSD009溝跡との新旧関係はSD009溝跡が古く、SD003溝跡が新しい。

SD036溝跡は、311調査区の南西に位置し、SD009溝跡と接する。逆L字の溝で、東西と南北方向に延びる。長さは、東西方向が約８ｍ、南北方向が約４ｍ。幅１～1.7ｍ。トレンチで確認した深さは、0.7ｍ。SD009溝跡との新旧関係は、SD036溝跡が古く、SD009溝跡が新しい。トレンチの下部からやや大きめの格子タタキを持つ平瓦が出土している。

SD062溝跡は、SX049塔基壇跡の南側を南北に走る。幅2.5～2.9ｍ。SB043・044掘立柱建物跡に切られるため、検出に留る。溝の南側の段落ちで、溝の延長が確認できない為、比較的浅い溝跡とみられる。溝の検出面で多量の瓦が出土した。

SD021・022溝跡は、311調査区の南東隅を南北方向に走る中世の溝跡、一部途切れるが、同一の溝跡である。349区のSD070溝跡へ続く。SD023溝跡に切られるように図示しているが、切り合いが反対の可能性もある。

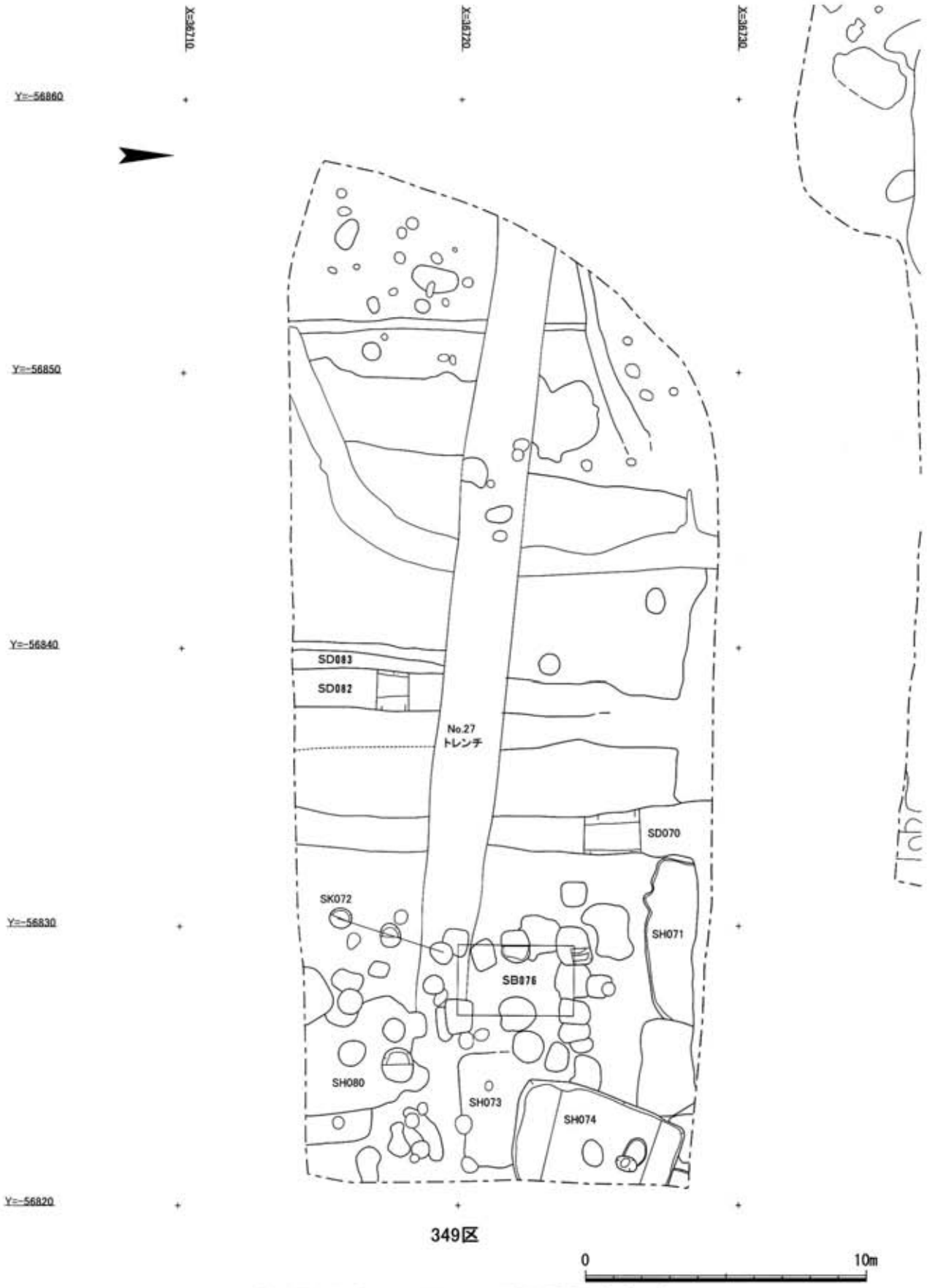
SD012溝跡は、311調査区南東隅を東西方向に走る溝跡。長さ11.5ｍ、幅0.6～1.0ｍ。SD005溝跡の東端約８ｍ離れた場所に位置するため、対になる可能性も考えられる。

SD006溝跡は、311調査区南西隅に位置する。検出した長さ約10ｍ、幅1.1～1.8ｍ。南側でSE042に接する。

SD057溝跡は、SX049塔基壇跡の北側に位置する。SX049塔基壇跡の北側では、東西方向に走るが、東で南側に折れ、352区に続く。検出できた東西方向の長さ33ｍ。西側ではさらに延びる。弥生時代や古墳時代の遺物が少量出土しているが、おそらく混入品で、中世段階の溝跡と推定される。

土坑は、弥生時代の土坑４基、奈良時代の土坑４基、中世の土坑20基がある。土坑の中には、遺物の出土がみられないものや検出に留めたものがあり、中世としている土坑の中には、奈良時代以前のものが含まれる可能性がある。

SK001土坑は、銅鐸埋納坑で、SK004土坑の西側に位置する。この土坑と銅鐸については、すでに報告（佐賀県



第５図　大曲一の坪地区349区遺構配置図（1/300）

教育委員会編『吉野ヶ里銅鐸』佐賀県文化財調査報告書第152集2002）をしているので、そちらを参照されたい。

SK004土坑は、311調査区の南部SD009溝跡とSD010溝跡の間に位置する。平面形が楕円形の土坑である。長軸約2.4m、短軸1.4m。埋土から奈良時代の須恵器蓋杯や瓦が出土し、奈良時代の遺構と考えていたが、遺物の摩滅と細片化が進んでおり、奈良時代以降と判断した。時期は異なるが、免田式土器の胴部と思われる土器片が出土している。

SK014土坑は、SB011掘立柱建物跡の西側に位置する。平面形が不整形の土坑である。南北1.9m、東西1.7m、深さ0.52m。鍋が出土しており、中世の土坑と推定される。

SK017土坑は、SB011掘立柱建物跡の東側に位置する。平面形が円形の土坑で、径約1.5m、深さ0.68m。断面が2段掘りになっている。埋土から宝珠摘みを持つ須恵器蓋が出土しており、奈良時代頃と考えられる。

SK018土坑は、311調査区の中央部東側、SB024掘立柱建物跡の内部に位置する。平面形が楕円に近い方形をしている。南北約1.5m、東西約1.7m、深さ0.35m。弥生土器の小片が出土している。

SK025土坑は、SB011掘立柱建物跡の西側に位置する。平面形はほぼ、円形で、径約2.1m。かなり深いため完掘はしていないが、その規模から井戸と見られる。埋土から土師質の皿や土鍋、茶釜が出土している。このSK025土坑を調査する際、壁際をやや大きく掘り下げたところ、瓶2点が出土している。谷を整地した際に紛れ込んだ遺物とみられる。

(2) 348区（第7図）

348区は、311･342区の東側に設定した調査区である。南北に長いトレンチとその南端に東西方向のトレンチを入れ、その形状は、南北に長い「凸」状をした調査区である。この調査区からは、弥生時代の甕棺墓9基、弥生時代後期の竪穴住居跡1棟、古墳時代後期の土坑1基、奈良時代の溝跡4条、土坑1基、時期不明の溝跡1条等を検出した。

甕棺は、成人棺3基と小児棺6基。SJ053甕棺は立岩期、SJ056甕棺は桜馬場期の甕棺である。SH069竪穴住居跡は、弥生時代後期か。

SD052溝跡とSD064溝跡は、南北方向に延びる溝跡である。途中で切れるが、同一の溝跡である。SD052溝跡は、長さ5.8m、幅1.2～1.8m。SD064溝跡は、長さ12.7m、幅1.3～1.9m。SX065土坑と切り合う。奈良時代の須恵器や土師器、瓦が出土した。SD066溝跡は、調査区の北側に位置し、南北方向に延びる溝跡である。長さ18.5m、幅0.9～2.0m。北側での検出面からの深さ0.74～0.79m。SD066溝跡の南端を東西方向にSD067溝跡が切る。埋土上層から奈良時代の須恵器・土師器が多量に出土した。SD064とSD066溝跡の間隔は、4.7m。この空間の西側には、SB061掘立柱建物跡が存在することから、東側の出入り口とみられる。

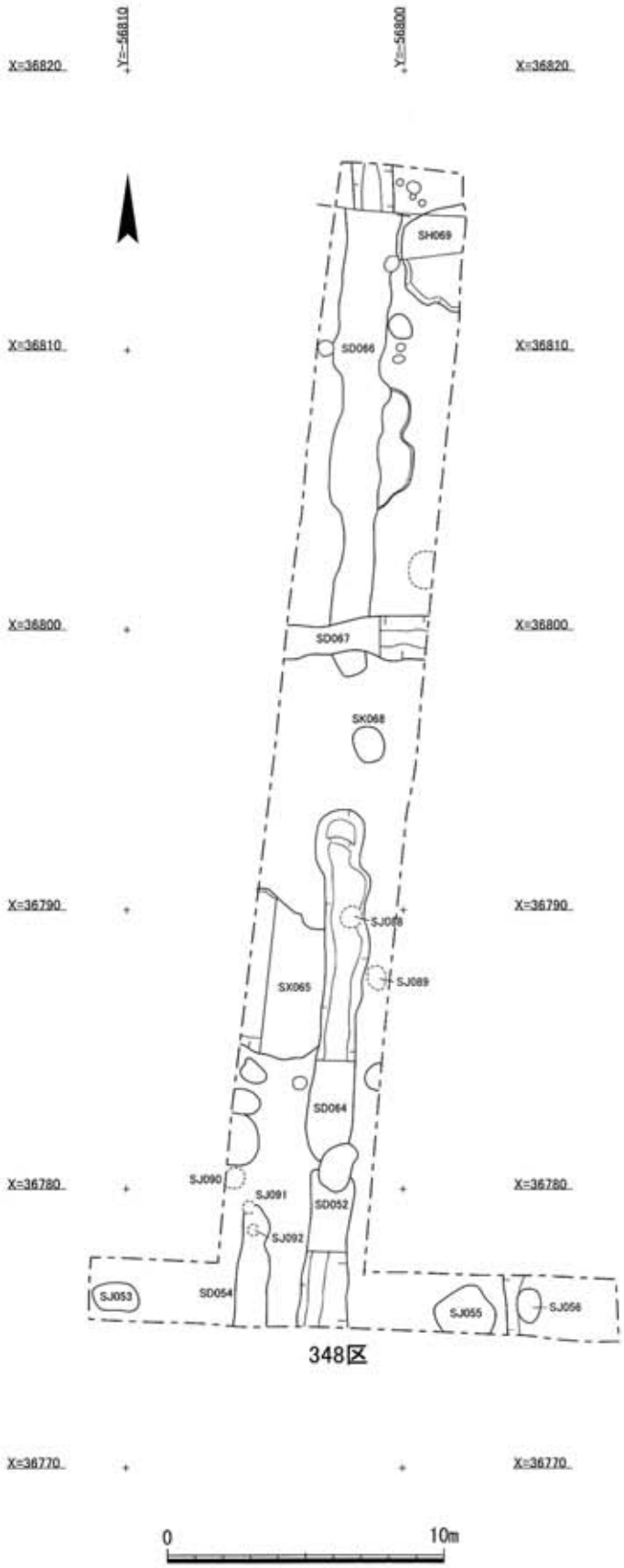
SX065土坑は、不整形の土坑で、西側は調査区外に出る。SD064溝跡と切り合うが、前後関係は不明。奈良時代の須恵器を出土する。

時期不明のSD054溝跡は、SD052溝跡の西側を並行して走る。奈良時代の遺構とみられるが、非常に浅く、遺物は出土していない。SJ091・092甕棺を切る。

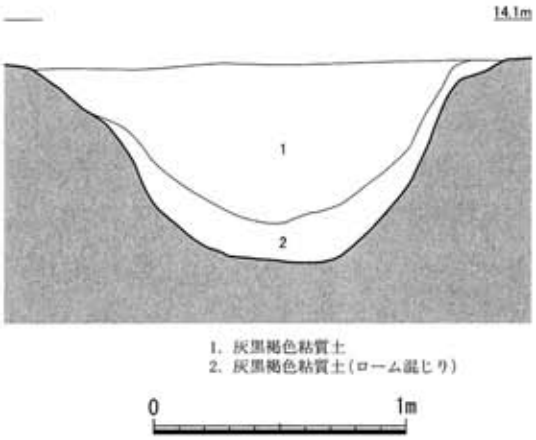
(3) 349区（第5図）

349区は、311調査区の南側の水田部に設置した調査区である。調査区の中央部を確認調査時の№27トレンチが東西方向に走る。また、311区から続く弥生時代の埋没谷がこの調査区の中央部付近を北西から南東方向にかけて

第６図　大曲一の坪地区366区遺構配置図（1/300）



348区
SD066土層図



第７図　大曲一の坪地区348区遺構配置図（1/250）・SD066溝跡土層図（1/30）

抜ける。この調査区からは、弥生時代中期の竪穴住居跡１棟、弥生時代後期の竪穴住居跡１棟、弥生時代の掘立柱建物跡１棟、古墳時代後期の竪穴住居跡１棟、中世の溝跡２条、時期不明の竪穴住居跡２棟等を検出した。

SH073竪穴住居跡は、調査区東側に位置し、SH074竪穴住居跡に切られる。平面形は、隅丸方形で、壁の一辺が約4.0ｍである。埋土から須玖II式期と推定される甕が出土している。SH074竪穴住居跡は、南北方向に主軸をとる平面形が隅丸長方形の竪穴住居跡で、南及び北側の壁に沿ってベッド状遺構を付設する。中央には炉跡があり、柱は２本柱と思われるが、北側の柱穴のみしか検出できなかった。一部調査区外にでるが、推定される規模は、5.5ｍ×4.0ｍ。

SB076掘立柱建物跡は、SH073竪穴住居跡の西側に位置し、南北に主軸を取る梁行１間(2.5ｍ)、桁行２間(4.2ｍ）の規模を有する掘立柱建物跡である。西側の柱２本のみ半裁し、残りは検出に留めている。当初、この掘立柱建物跡の柱穴２本を弥生時代の土坑（SK075･076）と推定し掘り下げたが、土坑の配置状況から掘立柱建物跡とした。図示はしていないが、柱穴埋土から弥生時代後期の鉢が出土している。

SH080竪穴住居跡は、調査区の南東に位置する平面形が不整形の竪穴住居跡。埋土から古墳時代後期の須恵器杯を出土している。

SK072土坑は、平面形が円形の土坑。この土坑の北側に同規模の土坑２基が並ぶことから、掘立柱建物跡の柱穴である可能性が高い。遺物は出土していないため、時期は不明。

SD070溝跡は、調査区中央を南北方向に延びる溝跡。311調査区のSD021・022溝跡と同一の遺構である。このSD070溝跡の西側は、非常に固く締まっており、道路側溝の可能性がある。SD070溝跡の西側に位置するSD082溝跡は、南北方向に延びる溝跡と推定される。その位置もSB058掘立柱建物跡の東側柱に通じるところから、SB058掘立柱建物存続時の道路側溝跡と考えていたが、№27トレンチの北側で溝が明瞭でなく、溝に入れたトレンチの土層観察では、溝状の掘り込みとなっていなかった。このため、このSD082溝跡は、側溝ではなく、地面の色調の違いを溝と誤認した可能性が強い。SD082溝跡の西側に位置する幅約0.5ｍの細長いSD083溝跡が側溝である可能性が高い。

(4) 353区（第４図）

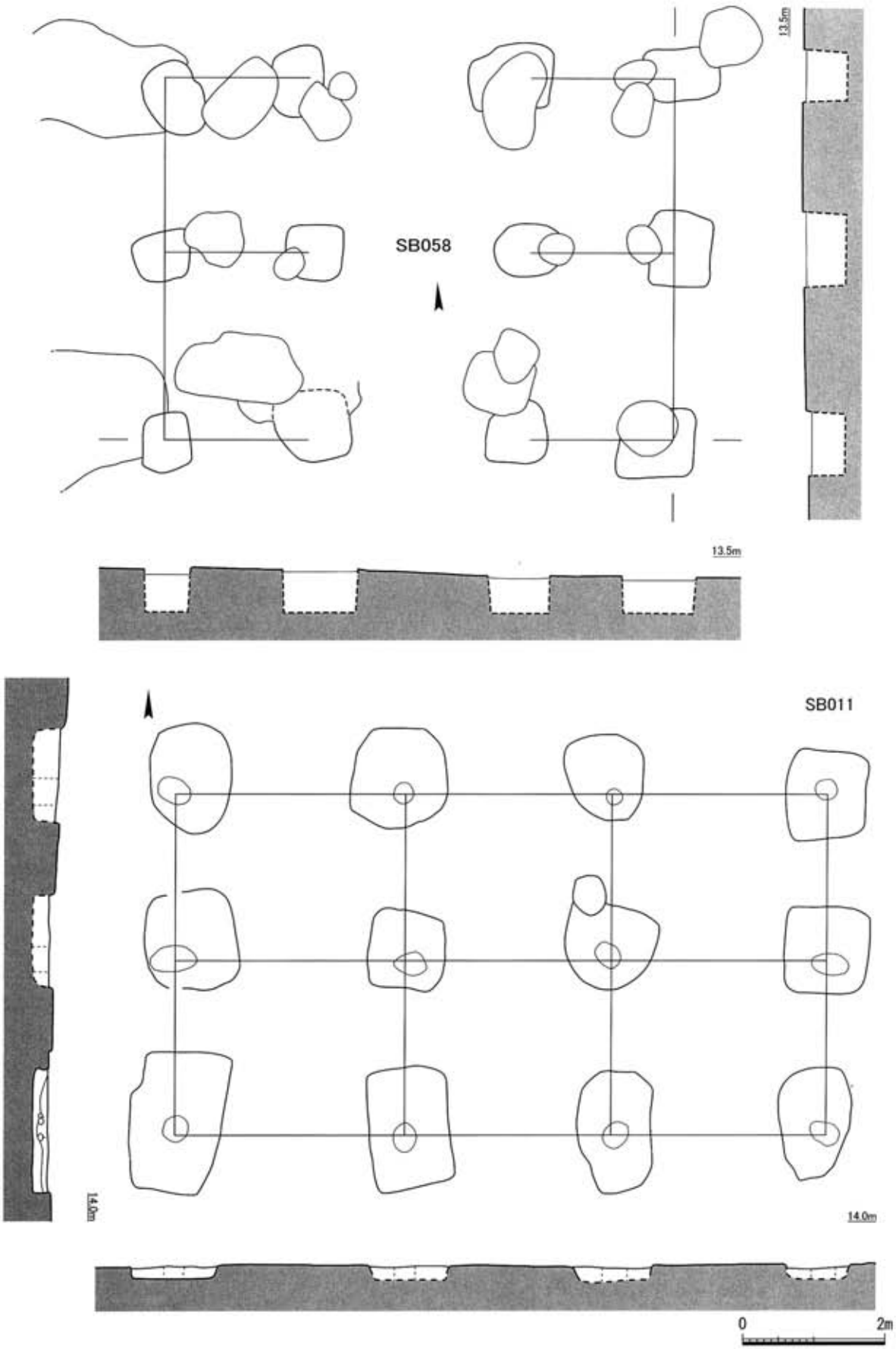
353調査区は、342調査区の西側に設定した南北方向に長い調査区である。この調査区の西側は、丘陵斜面部になる。表土剥ぎの結果、遺構の残りが良好であったため、調査では、遺構の検出に留め、掘削は行なわなかった。調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡２棟、古墳時代後期の竪穴住居跡１棟、奈良時代の溝跡２条、奈良時代と推定される土坑７基、小穴多数を検出した。

SH085竪穴住居跡は、調査区のほぼ中央に位置し、西側の壁をSD086溝跡に切られる。この竪穴住居跡は、平面形が方形で、一辺の長さが約4.3ｍ。北、東、南の３方にベッドを付設する。SH084竪穴住居跡は、西側にカマドを持つ竪穴住居跡。平面が方形で、一辺の長さが3.7～4.0ｍ。古墳時代後期と推定される。

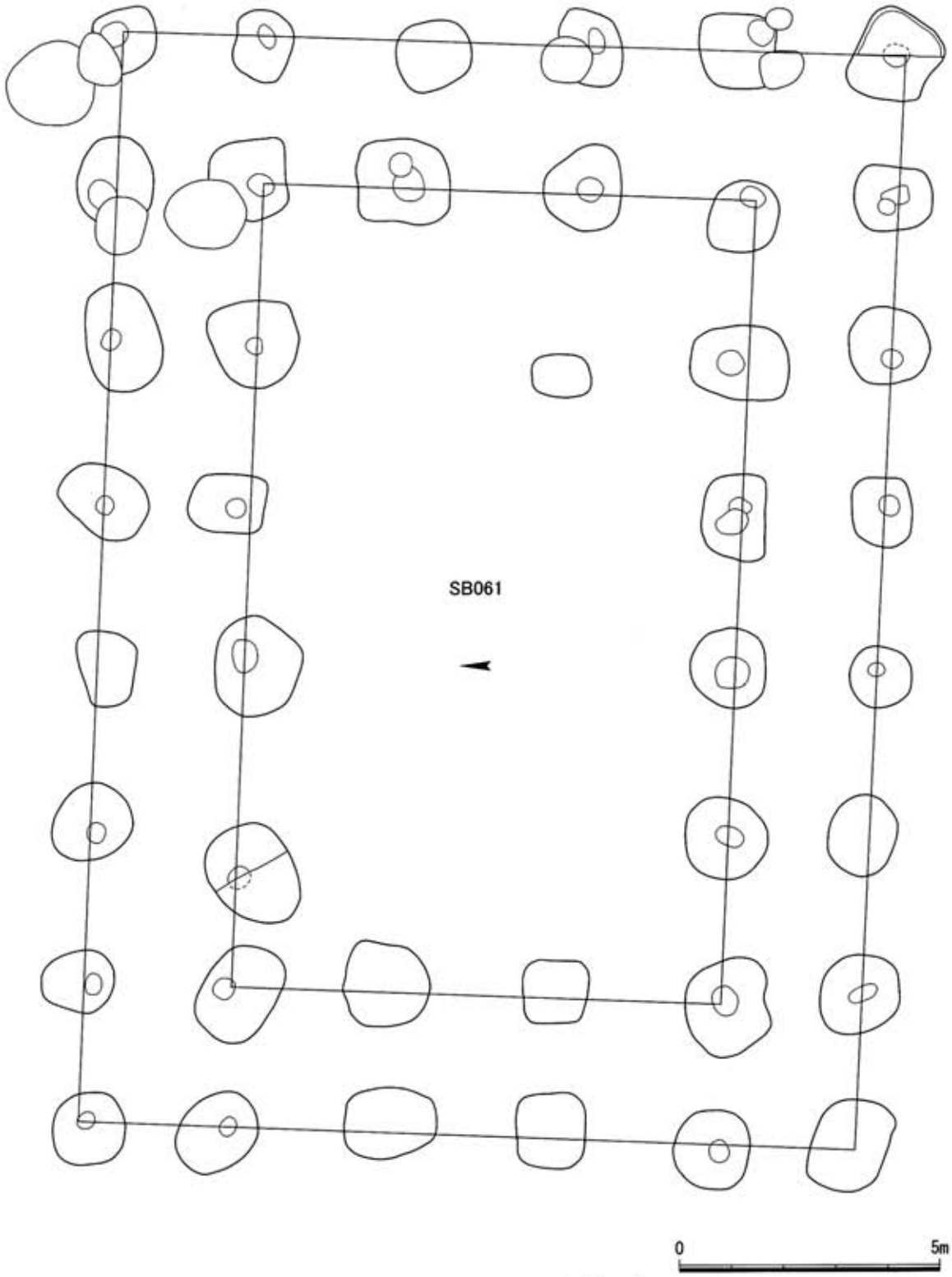
SD086溝跡は、調査区の中央を南北方向に延びる溝跡。検出された溝の長さ13.0ｍ、幅0.7～1.3ｍ。SD087溝跡は、SD086溝跡の南側に位置する。この両者の間隔は約5.6ｍである。この空間は、348区のSD064溝跡とSD066溝跡との空間と同位置にあり、西側の出入り口と見られる。

(5) 352区（第４図）

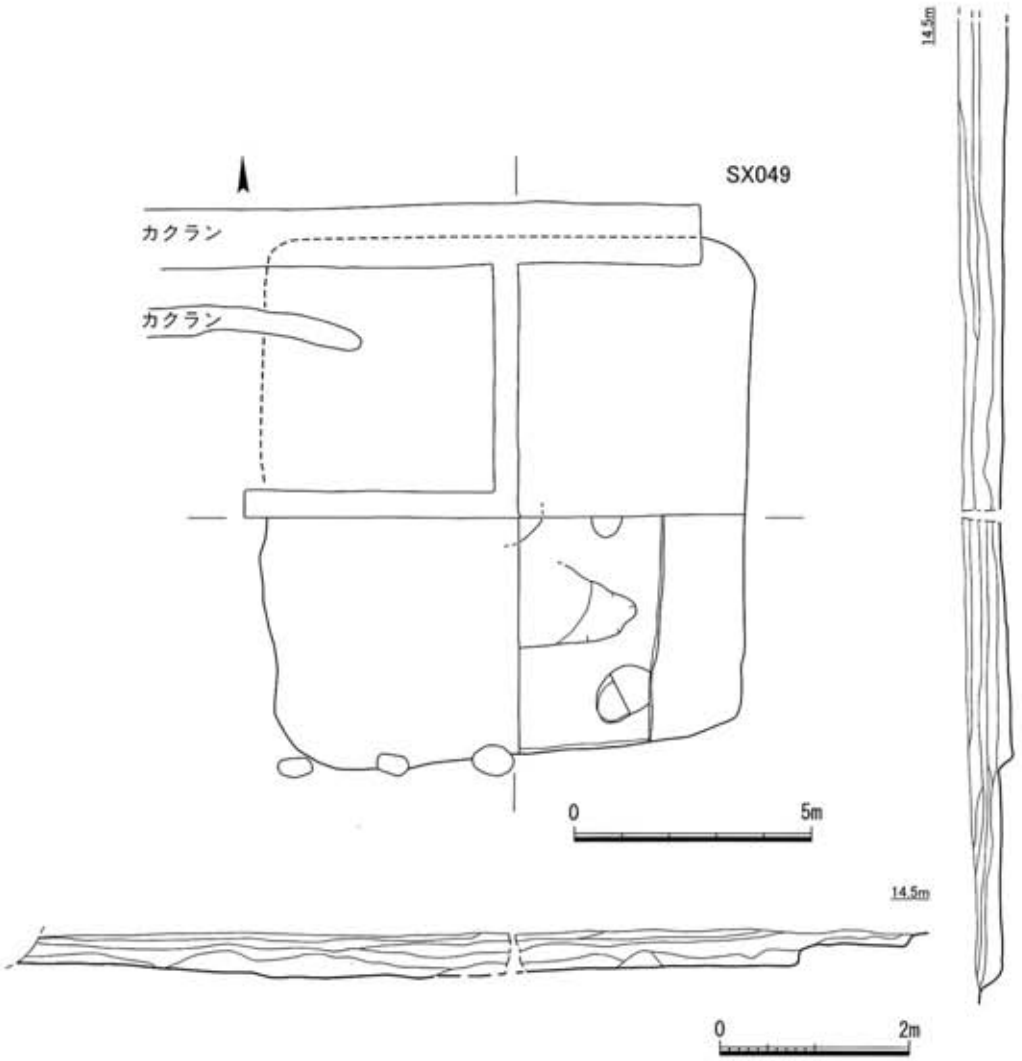
342区の東側に設定した南北に長い調査区である。中世の溝跡１条、土坑３基を検出した。この溝跡は、342区

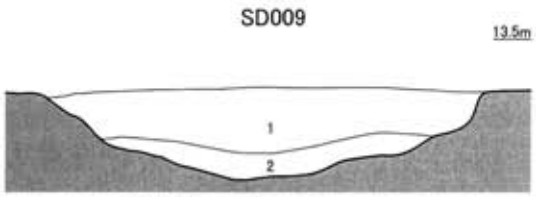


第８図　SB058・011掘立柱建物跡（1/80）

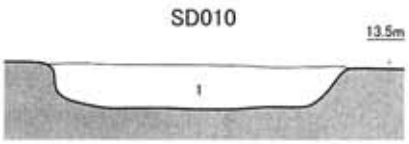


第９図　SB061掘立柱建物跡（1/120）





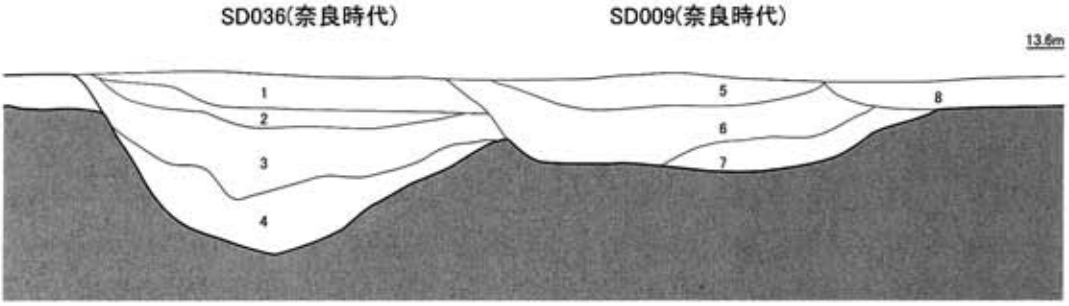
1.暗茶褐色砂質土
2.　〃
※埋土は2層に分層できるが、ほりの違いのみ。



1.暗茶褐色砂質土

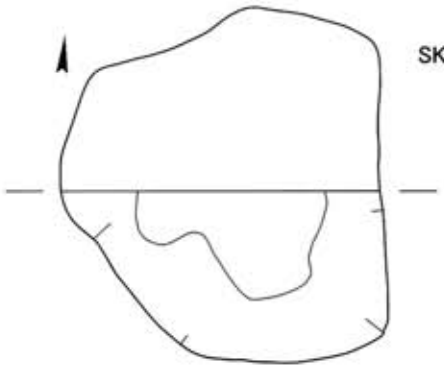
0　1m

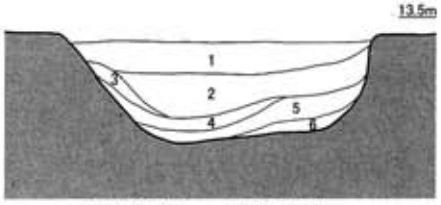
第10図　SX049塔基壇跡平面図（1/160）・断面図（1/80）SD009・010溝跡土層図（1/30）



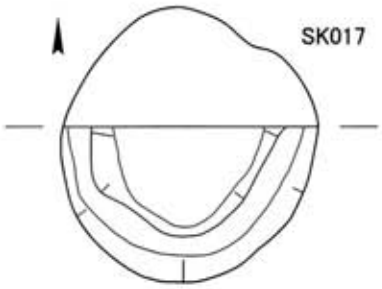
1.黒褐色粘質土　2.黒褐色粘質土　3.暗黄褐色粘質土　4.黒色粘質土　5.黒褐色粘質土　6.黒褐色粘質土　7.黒色粘質土　8.暗茶褐色粘質土(他遺構埋土)

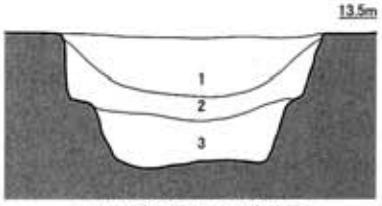
0　1m



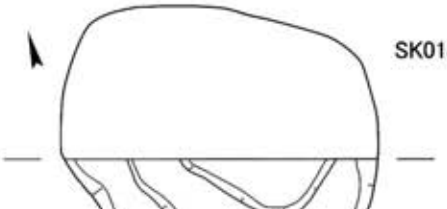


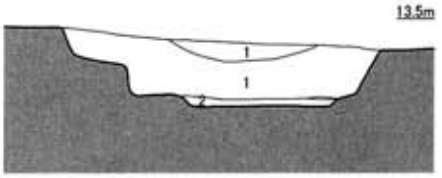
1.茶褐色粘質土　4.灰色粘質土
2.暗茶褐色粘質土　5.暗茶褐色粘質土
3.暗褐色粘質土　6.灰色粘質土



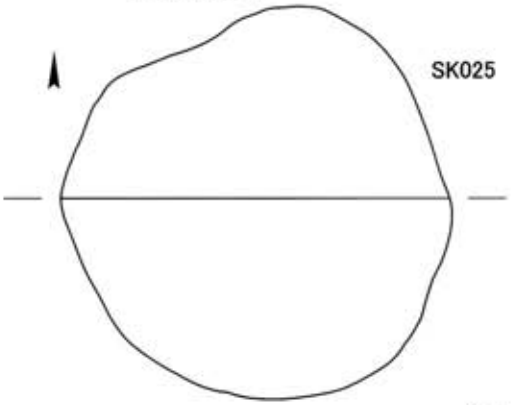


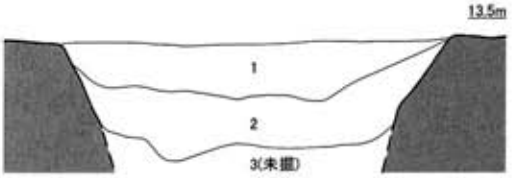
1.暗茶褐色粘質土　3.黒色粘質土
2.暗茶褐色粘質土





1.暗茶褐色粘質土
2.黒褐色粘質土





1.茶褐色砂質土
2.茶褐色粘質土
3.黒褐色粘質土

0　1m

第11図　SD036・009溝跡土層図（1/30）SK014・017・018・025土坑（1/40）

から続き、この調査区では南北方向に延びる。342区のSX049塔基壇跡の北側を境界として巡る中世段階の区画溝と推定される。

⑹ 366区（第６図）

342区の北側に設定した東西方向に長い調査区である。調査区北側の一部分が、地下げにより、「L」字状に一段低くなっている。本調査区では、弥生時代から中世にかけての遺構を多数検出した。主要な遺構について述べる。

SB095掘立柱建物跡（第12図）

366調査区の中央東側、SB096掘立柱建物跡の東側に位置する。梁行３間（5.0m）、桁行５間（10.4m）の掘立柱建物跡である。主軸はN－5°－Eでやや東に傾く。南東隅の柱をSD112溝跡に切られる。柱の掘り方は平面方形を基調とするが、崩れて丸みを持つものもある。柱穴の規模は、１辺が0.8～1.1m。深さ0.3～0.8m。柱痕は明瞭で、抜き痕は認められない。

SB096掘立柱建物跡（第12図）

366調査区の中央、SB095掘立柱建物跡の西側に位置する。梁行３間（5.0m）、桁行５間（10.7m）の掘立柱建物跡である。主軸はN－5°－Eでやや東に傾く。柱の掘り方は平面方形を基調として、その規模は、１辺が0.8～1.1m。深さ0.5～0.7m。柱痕は明瞭で、抜き痕は認められない。SB095掘立柱建物跡と主軸や棟を揃え、建物の規模も同一規模である。

SB097掘立柱建物跡（第13図）

366調査区中央北側に位置する梁行２間（5.2m）、桁行９間（21.6m）の大型の掘立柱建物跡である。主軸は真北に取る。棟持柱２本が柱４本毎に配置される。柱の掘方は、平面方形を基調としているが、隅丸方形や円形に近い柱もある。棟持ち柱は円形である。この掘立柱建物跡に沿って、地下げがされており、一部の掘立柱建物跡の柱は半裁された状況で検出されている。建物の位置がその後の地籍に反映されていたことを示す。

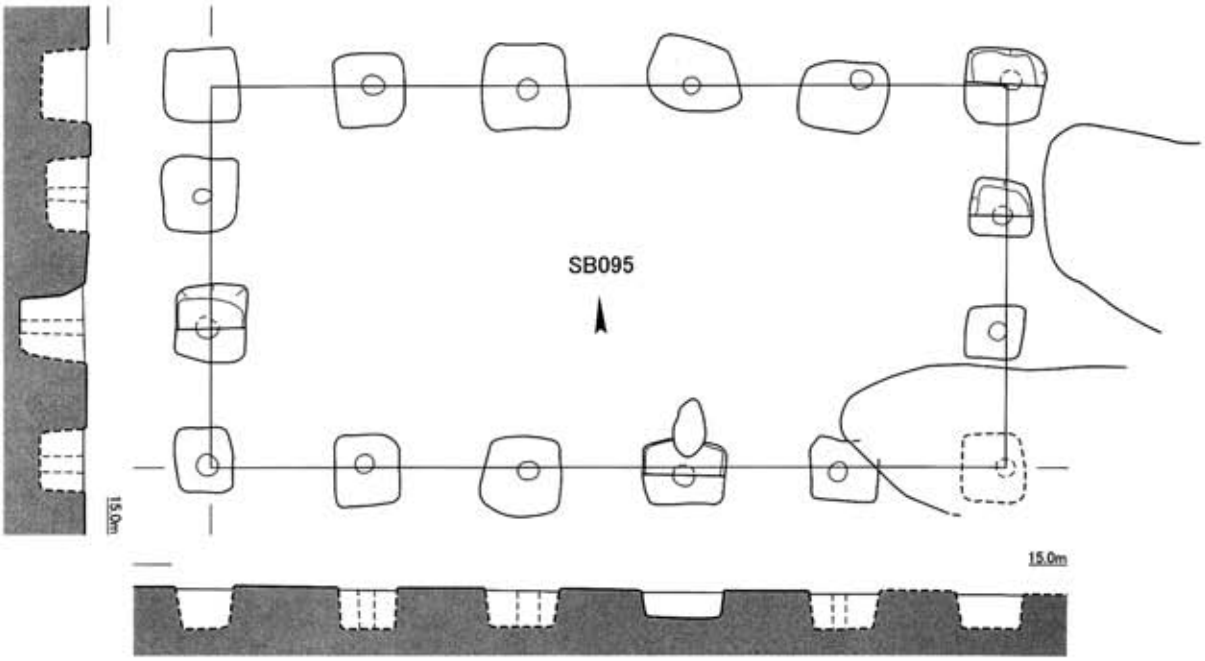
SB120掘立柱建物跡（第14図）

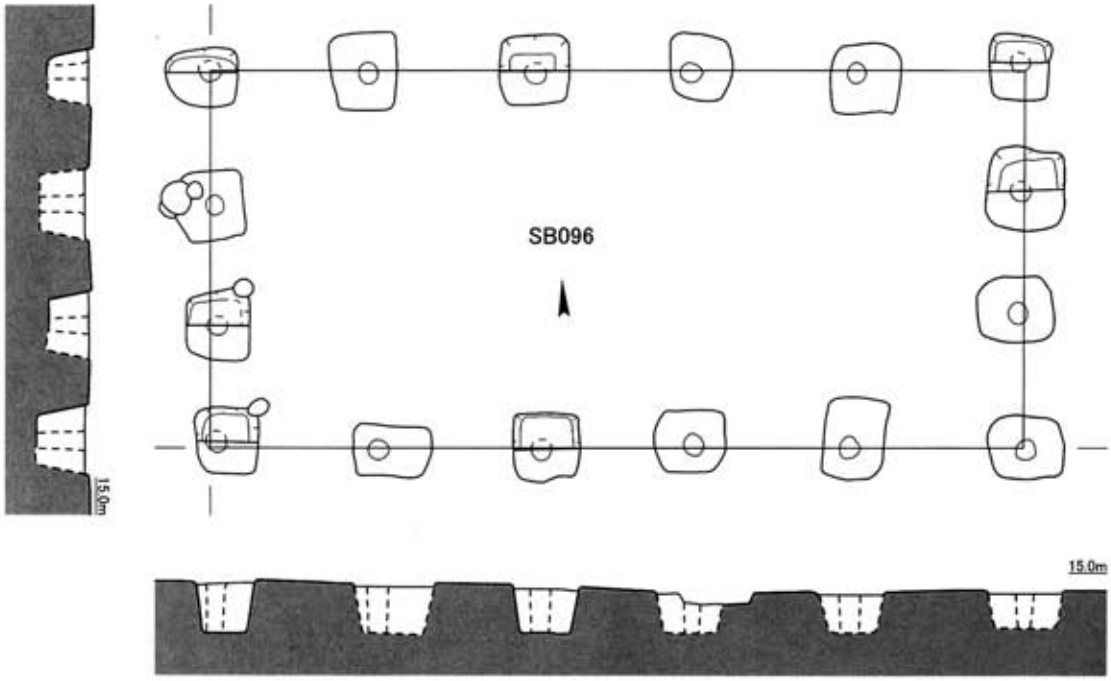
366調査区の東側に位置する。梁行３間（5.2m）、桁行５間（11.2m）の掘立柱建物跡である。SB097掘立柱建物跡と切り合い関係にあり、本掘立柱建物跡が古い。主軸はN－5°－Eでやや東に傾く。当初、柵列と考えていたが、図上での検討により掘立柱建物跡と認定した。東側の柱列は、北東隅の柱以外カクランにより不明。柱穴の平面形は方形を基調としている。また、SB120掘立柱建物跡は、地面を切り下げた地点に位置するため、柱穴の遺存状況は悪い。検出面からの深さ0.18～0.3m。このSB120掘立柱建物跡の西側柱列と南に位置するSB095掘立柱建物跡の東側柱列とは筋を揃えている。

SH107竪穴住居跡は、調査区の西側に位置し、SB096・097掘立柱建物跡に切られる。竪穴住居跡の平面形は、長方形であるが、検出に留めているため、東側の一部が不明瞭である。検出面から弥生時代終末期の壺や鉢、甕等が出土している。SH114竪穴住居跡は、調査区の西端に位置する。竪穴住居跡の平面形は長方形または方形で、壁周溝と推定される場所から鉢や壺が出土した。弥生時代後期終末期頃と推定される。

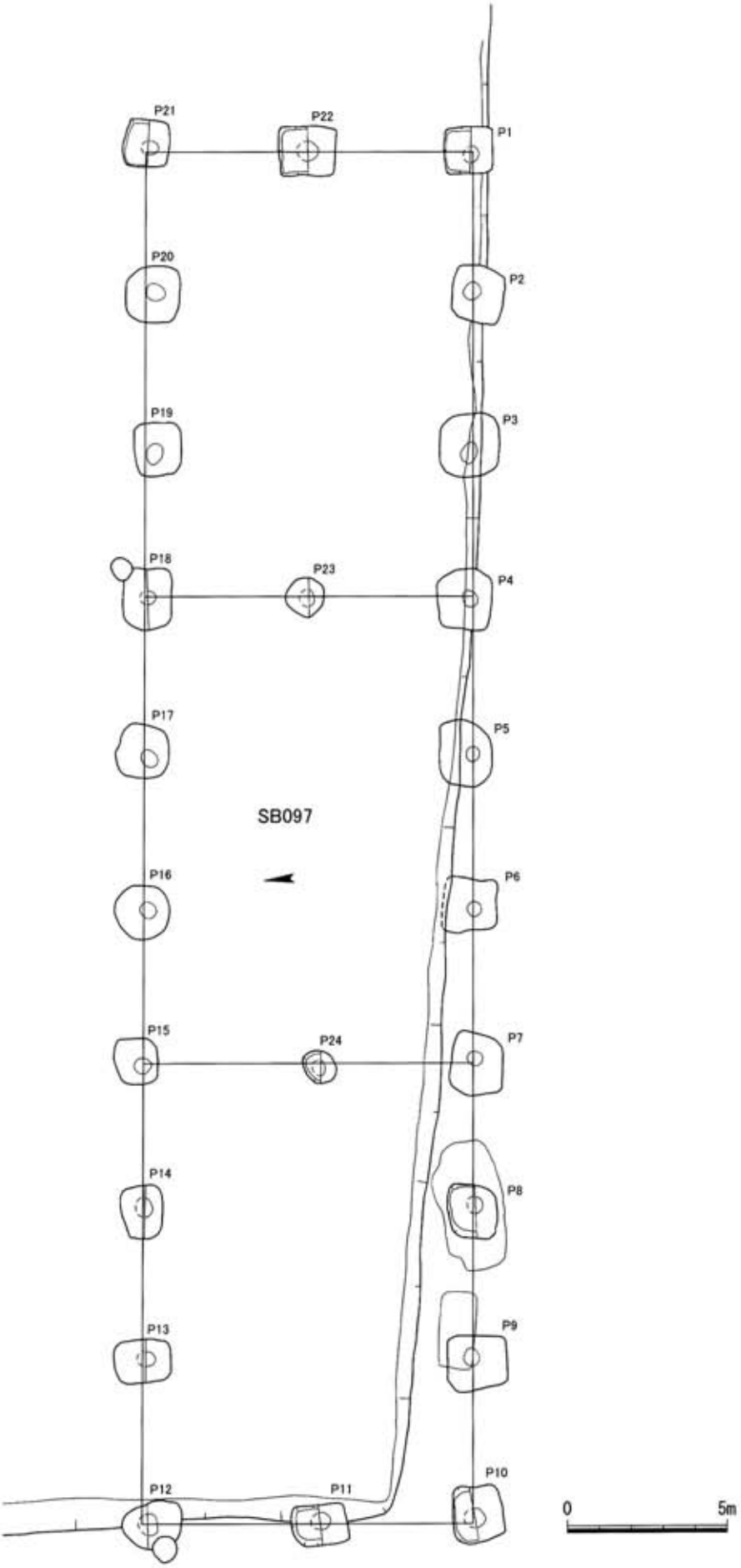
SH108・110竪穴住居跡は、いずれも北側にカマドを持つ古墳時代後期の竪穴住居跡。SK098土坑は、不整形をした土坑で、土師器杯、高台付椀が重なった状態で出土した。SK102土坑は、平面形が方形基調の廃棄土坑。南側を溝状遺構に切られる。出土した遺物から奈良時代頃と推定される。

SD105溝跡は、SB095掘立柱建物跡の東側に位置する溝状遺構。東側で、SD112と重なる。検出の段階で、底部に板状圧痕を残す土師器杯が大量に出土した。SD112溝跡は、SD105溝跡の南側に位置する。溝の先端がSB095掘

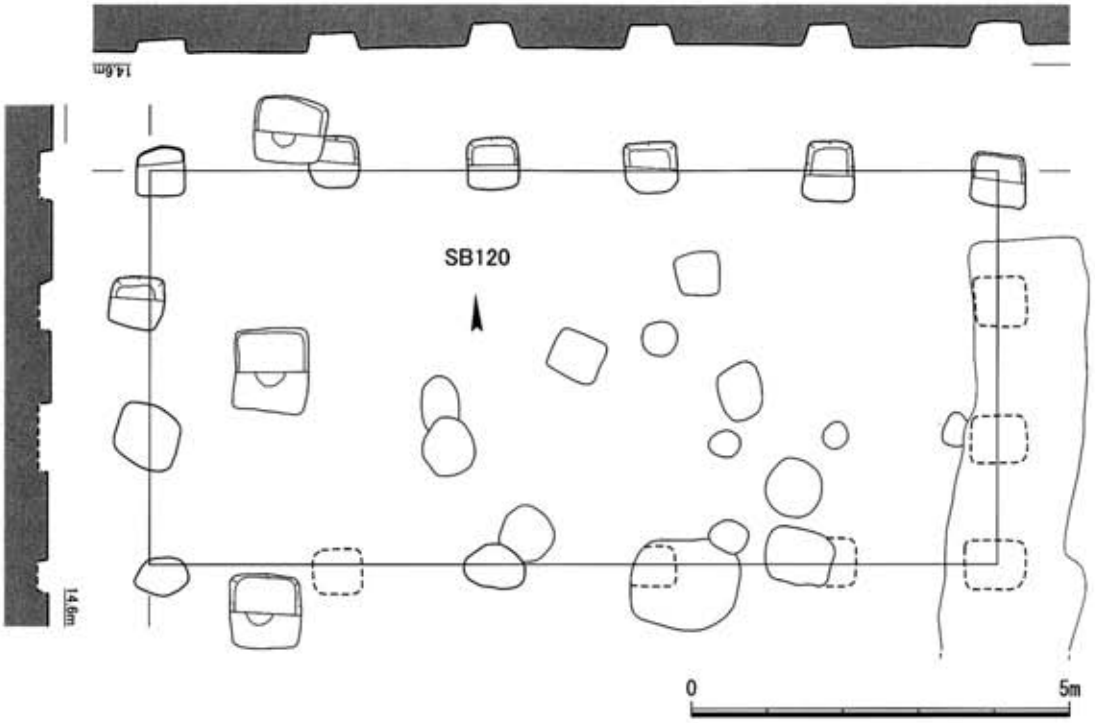




第12図　SB095・096掘立柱建物跡（1/100）



第13図　SB097掘立柱建物跡（1/200）



第14図　SB120掘立柱建物跡（1/100）

立柱建物跡の柱穴の一部を壊す。性格は不明。

3　大曲一の坪地区出土遺物（第15～19図）

遺構から出土した遺物を中心にして、主なものについて述べる。

1は、SK004土坑出土の免田式土器の体部の破片。櫛描文の両側に重弧文が描かれる。2は宝珠摘みを持つ須恵蓋。3～5はSD009溝跡出土の奈良時代須恵器。7は、土師器の杯。底部に板状圧痕あり。混入か。12～17はSK025土坑出土。12は小型の土師杯。13・14は、土坑壁際から出土した甕。6世紀後半段階のものか。15・16は土師質の羽釜。16は体部上半に葉状の印刻を施す。17は土鍋。口縁を折り返す。須恵器以外は室町時代のものか。18～21はSX049塔基壇跡出土品。須恵器蓋は、口縁内部に短い返りを有する。21は横瓶。いずれも7世紀代の所産と推定。

23～30は348区SD066溝跡出土。25は土師質の高台杯椀。体部は直線的に延びる。口径9.0cm、器高3.9cm。27は、口径23.5cmの大型の高台杯皿。焼け歪んでいる。28～30は鉄鉢形の鉢。いずれも不安定な底部に、内側に折れ曲がる口縁を持つ。胴部下半は回転ヘラ削り。31～35は、SD066溝跡を切るSD067溝跡の出土。

36～39は、349区SH080竪穴住居跡出土の6世紀後半代の須恵器。40～42はSB097掘立柱建物跡の柱掘方出土。本建物跡の上限を示す。43・44はSH110竪穴住居跡出土。須恵器からみて6世紀後半代か。45～47は、349区SH073竪穴住居跡出土の甕。須玖II式併行期と推定される。48～50はSB096掘立柱建物跡の柱掘方出土。

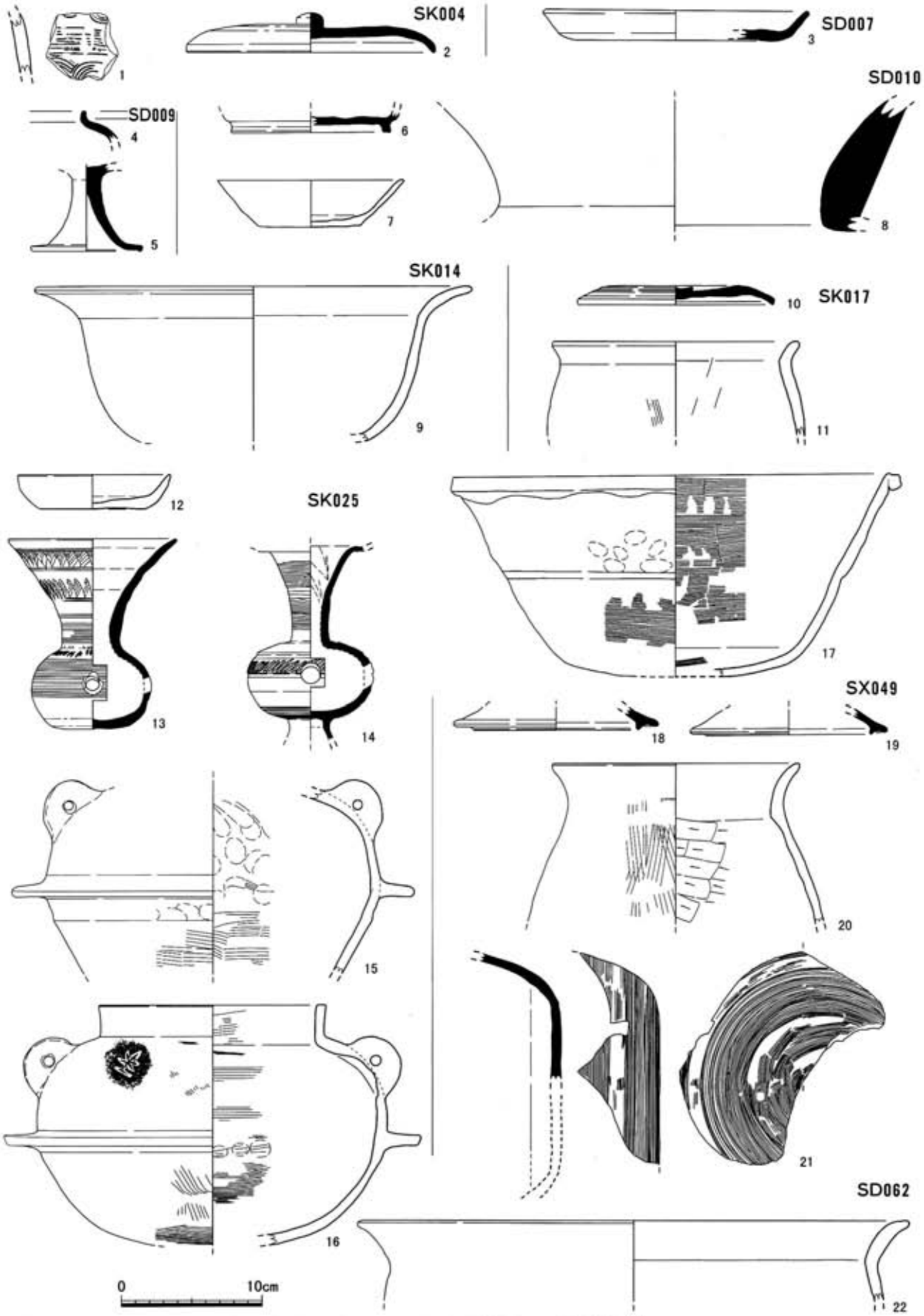
51～55はSK098土坑出土。土師器杯3点と高台杯椀1点、黒色土器1点が重ねられた状態で出土。56～59はSK102土坑出土。56の杯底部には板状圧痕あり。60～75はSD105溝跡出土の土師器の杯。表面の風化が著しいが、底部の調整が明瞭な杯には、板状圧痕が残る。76は、SH108竪穴住居跡検出面出土の小型壺。焼きが甘く、表面は灰褐色を呈する。77～79はSH107竪穴住居跡出土。79の壺は、底部が尖り気味で胴部中央で最大径を持つ。弥生時代終末期と推定。80・81のSH114竪穴住居跡出土の土器も同様に弥生時代終末期。82は奈良時代の把手付壺。

83～88はいずれも同笵の複弁八弁蓮華文軒丸瓦。中央の中房に蓮子が1＋8個配置され、蓮弁間には、先端が二つに分かれる子葉状の間弁がみられる。間弁に挟まれた8つの蓮弁のうち、ひとつは単弁となる。外区には、珠文18個が配される。瓦当面には凹凸がみられず、平面的な印象を受ける。83は348区SD052溝跡出土。84・86は311区SD007溝跡出土。85はSD008溝跡出土。87・88は検出面出土。

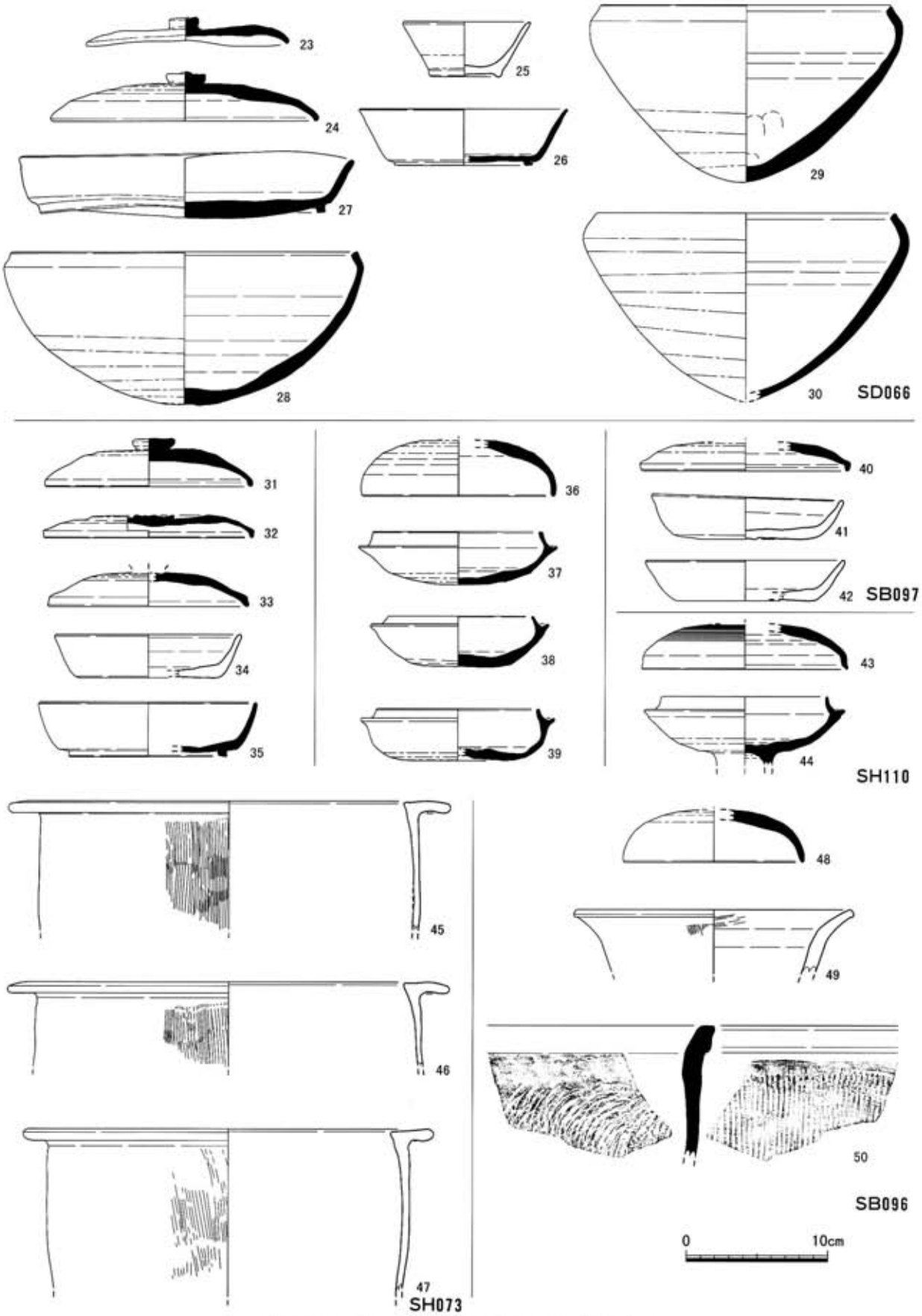
89は、311区検出面採集の均整唐草文の軒平瓦。右側半分を欠失。中央に「小」の装飾を内側に巻き込む均等な唐草文が描かれ、その脇には、やや巻きの弱い唐草文が互いに方向を変えながら4つ施される。上縁に杏仁状の珠文が、下縁には上向きの陽起鋸歯文が施される。なお、この上向きの陽起鋸歯文は、通常の瓦とは反対の方向を向く。軒丸瓦同様、表面の凹凸が浅い。

90・91はSD007溝跡出土の平瓦。90は、瓦の長軸に沿って縦方向の縄目が施される。現存長36.1cm、幅28.8cm。91は、外面に格子叩きを持つ。92～94は、SD036溝跡出土の平瓦。いずれも大きな斜格子の叩きが施される。

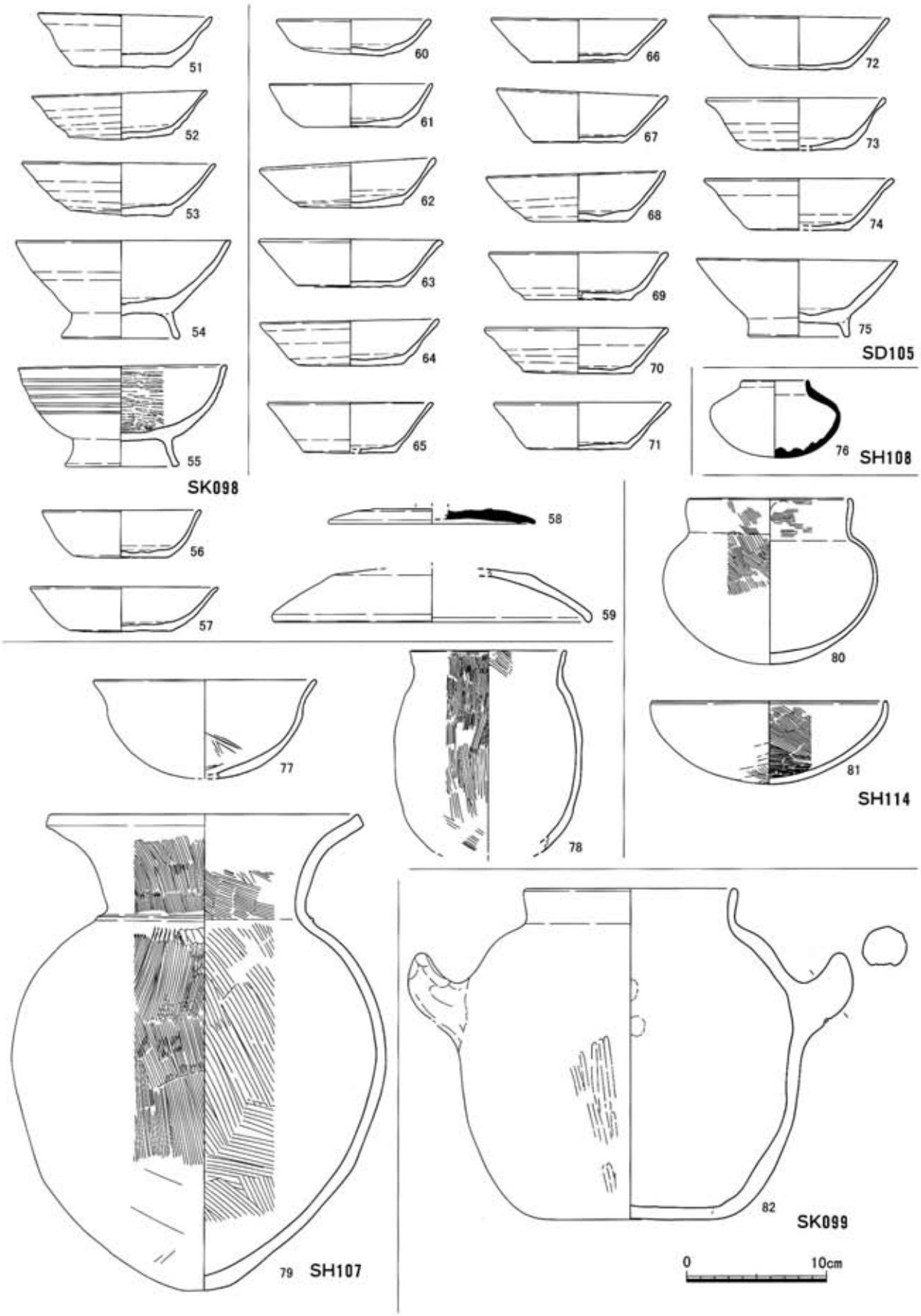
95・96は細かな斜格子叩きを持つ平瓦。SX049塔基壇跡の南側に位置する溝から出土。



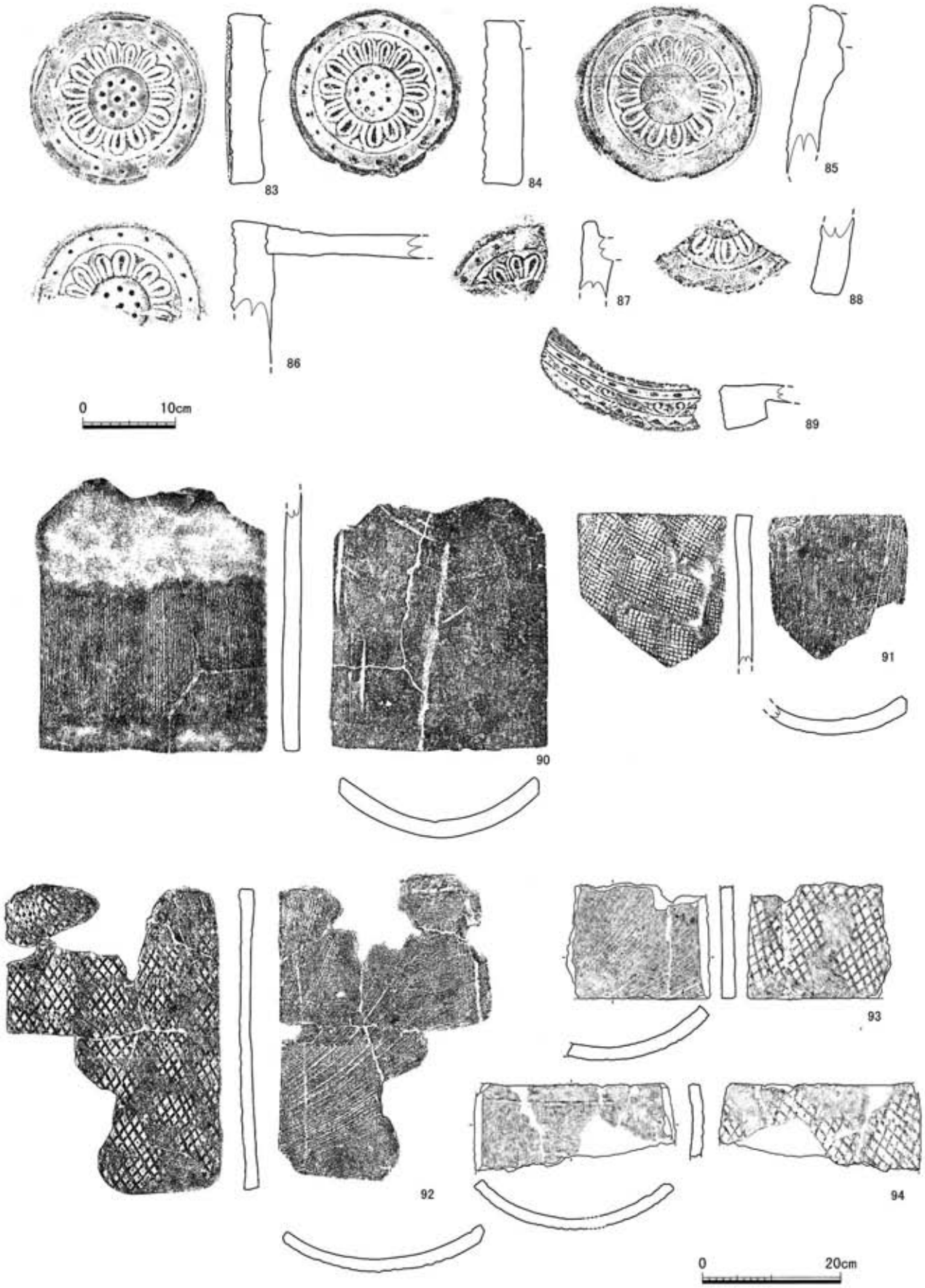
第15図　大曲一の坪地区遺構出土土器①（1/4）



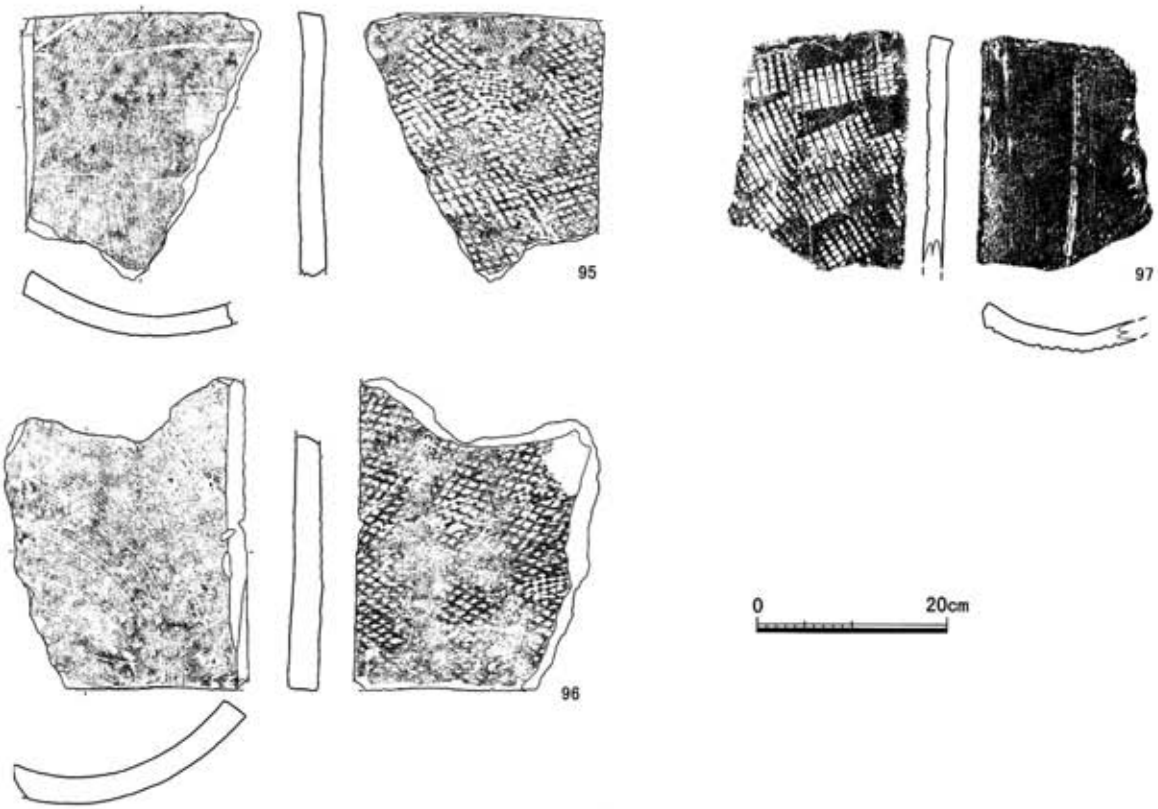
第16図　大曲一の坪地区遺構出土土器②（1/4）



第17図　大曲一の坪地区遺構出土土器③（1/4）



第18図　大曲一の坪地区出土軒丸・軒平瓦（1/6）・平瓦①（1/8）



第19図　大曲一の坪地区出土平瓦②（1/8）

第３章　枝町遺跡の調査概要

１　調査に至る経過

枝町遺跡の発掘調査は、県立吉野ヶ里歴史公園の整備事業に伴い平成９～10年度に実施した。国営吉野ヶ里公園の西側に大きく広がる区域を県立公園として整備することになり、公園の周囲を巡る周回道路及び県立公園区域内に設置されるトイレ等の付属施設の整備に先立ち調査を行なった。

道路工事が実施される場所は、神埼町教育委員会が昭和55年に実施した馬郡遺跡の５～10ｍ南側に当たり、遺跡の存在が予想された地点である。工事の主体者である神埼土木事務所と協議を持ち、道路掘削面及び盛土高を勘案しながら、工事が遺構に影響しないことを確認した。ただし、吉野ヶ里遺跡の隣接地であり、周辺遺跡の性格を知る必要もあったため、面的な確認調査を行なうことで合意し、調査に着手した。なお、遺跡の西側で確認された甕棺については、盛土後にも影響があることを考慮し、調査後取り上げることにした。

１次調査の周回道路部分の調査は、平成11年２月１日から実施した。道路幅に沿って東西方向に長い調査区を設定した。対象となった面積は850㎡である。

枝町遺跡の２次調査は、平成11年10月から着手した。この地点は、県立公園区域内にあり、周辺の公園整備工事は、遺構の存在する高さに及ばないことを前提に実施されていた。その後、当該地点に屋外トイレの設置が計画され、神埼土木事務所から協議が申し込まれた。トイレの配水管等の地下構造物が遺構の存在する高さに及ぶことが懸念されたため、遺跡を壊さない工法を採用することを前提に確認調査を実施した。調査の結果、方形周溝墓の陸橋部分にあたる場所が確認され、１次調査で確認された方形周溝墓群との関連も考えられることから、面的な調査を実施した。調査期間は、平成11年10月27日から11月24日。調査では、方形周溝墓１基、土壙３基等を検出している。

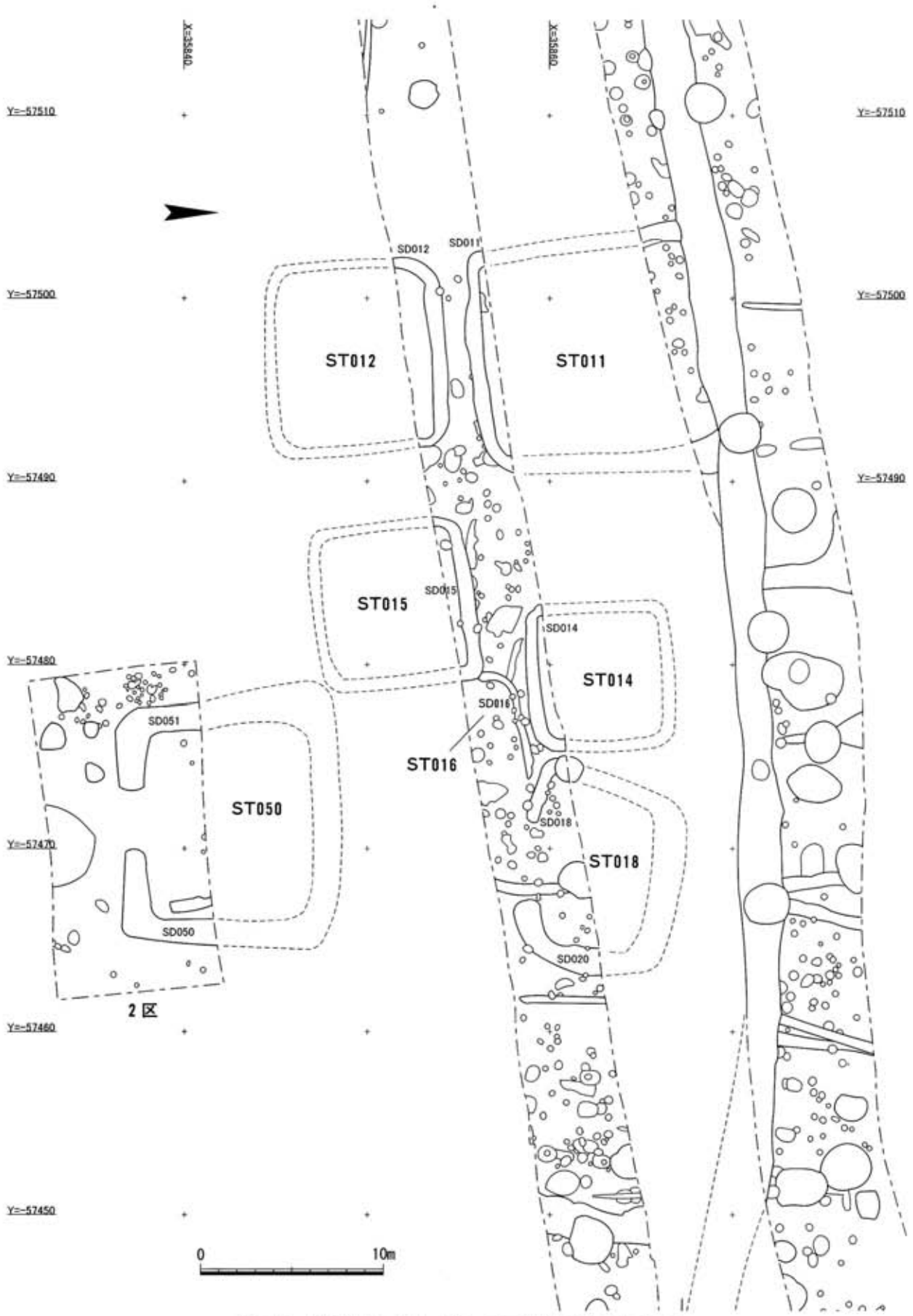
２　遺跡の概要

枝町遺跡は、神埼市神埼町大字鶴に所在し、吉野ヶ里遺跡が載る吉野ヶ里・志波屋段丘西側の南北に長い低位段丘上に位置する。この低位段丘と吉野ヶ里丘陵との境には、貝川が流れる。なお、これまでの確認調査の結果からは、吉野ヶ里遺跡と枝町遺跡の境には、泥炭層が広がっており、遺跡の繋がりはみられない。

枝町遺跡が載る低位段丘上には、馬郡集落が立地し、集落の南側を東西方向に県道吉田・鶴線が走る。この県道を境に、北側を中園遺跡、南側を枝町遺跡として呼称しているが、両者は同一の遺跡である。

この枝町遺跡付近では、過去に神埼町教育委員会により数次の調査が実施されている。昭和55年度には、農業基盤整備事業に伴い、今回の調査区の北側に隣接して、水路で掘削される部分の発掘調査が実施されている。この調査地点は、現在の枝町遺跡の範囲に含まれるが、調査を実施した際には、地区名である馬郡遺跡と呼称し、報告している。この調査では、弥生時代から中世にかけての甕棺墓56基、土坑墓４基、石棺墓１基、祭祀遺構１基、竪穴住居跡２基、掘立柱建物跡２棟、土坑39基、井戸跡10基、溝跡27条等が検出されている。SK2159土坑は、弥生時代前期後半～末にかけての土器を多数包含する大型土坑で、長さが６ｍを超える。ただし、性格は不明である。墓地は、弥生中期の甕棺墓を主体とし、一部土坑墓を含む。石棺墓は弥生時代終末期頃のものか。古墳時代初頭のSD2109溝跡は、東西方向に直線的に延びる溝跡で100ｍ分検出している。今回の枝町遺跡の調査で35ｍを確認しており、確認された溝の長さは150ｍを超える。この溝跡からは、外来系を主体とした土器群が多数出土し、

第20図　枝町遺跡Ⅰ区西側遺構配置図（1/250）



第21図　枝町遺跡Ⅰ区中央部・2区遺構配置図（1/300）

古墳時代初頭前後の吉野ヶ里遺跡との係りを含め注目される。12世紀頃と推定されるSE2147井戸跡の井戸枠には、竹が用いられる特異なものである。

なお、今回の調査地点と神埼町教委が実施した「馬郡遺跡」は、本来同一の遺跡であるため、両者を合せた遺構配置図を作成した（第20・21・38図）。

3　調査の内容

枝町遺跡の発掘調査は、１次調査が周回道路部分、２次調査が公園内の屋外トイレ敷地部分と分かれる。ただし、隣接しているため、合わせて報告する。

２次にわたる枝町遺跡の調査で確認された遺構は、弥生時代の甕棺墓９基、土坑２基、古墳時代初頭から前期の方形周溝墓７基、溝跡１条、奈良～平安時代の土坑・井戸跡14基、溝跡２条、中世の井戸跡１基、溝跡２条、時期不明の土坑４基、溝跡３条、竪穴住居跡１棟等である。

(1)　弥生時代の遺構

弥生時代の遺構として、SJ039甕棺墓を除く甕棺墓８基と土坑１基を取り上げる。甕棺墓は、１次調査区の西側に分布する。検出の段階で、大半の甕棺が身の上半部を削平された状態か、上半部が残るものでも内部に落ち込んだ状態であったことから、後世の開発により大きく破壊されたものと推定される。いずれの甕棺からも人骨や副葬品は出土しなかった。土坑は、２次調査で検出した。埋土から弥生時代後期前半の土器を多量に出土した。

SJ001甕棺（第23・29図）

１次調査区西側、SJ002甕棺の北側に位置する成人用複式甕棺である。削平が著しく、１次墓壙は失われ、棺体も上甕は口縁部と身の一部のみ残し、下甕は身の半分のみ残る。残存する２次墓壙の規模は、全長2.0ｍ、幅0.9ｍ、検出面から墓壙基底面の深さ0.26ｍである。甕棺の主軸方位はＮ－50°－Ｅで、埋置角度は、ほぼ、水平。甕は南西方向から挿入される。

SJ002甕棺（第23・29図）

１次調査区西側、SJ001甕棺の南側に位置する成人用複式甕棺である。１次墓壙を残すものの、上甕の底部が削平により失われている。１次墓壙の平面形は隅丸方形で、南西側の壁を掘り込み、２次墓壙を作出する。推定される一次墓壙の規模は、全長約1.3ｍ、幅1.2ｍ。２次墓壙を含めた全長は2.7ｍ。１次墓壙と２次墓壙の基底面の深さはあまり変わらない。甕棺の主軸方位はＮ－45°－Ｅで、埋置角度は＋4°。甕棺は北東方向から挿入される。

SJ003甕棺（第23・29図）

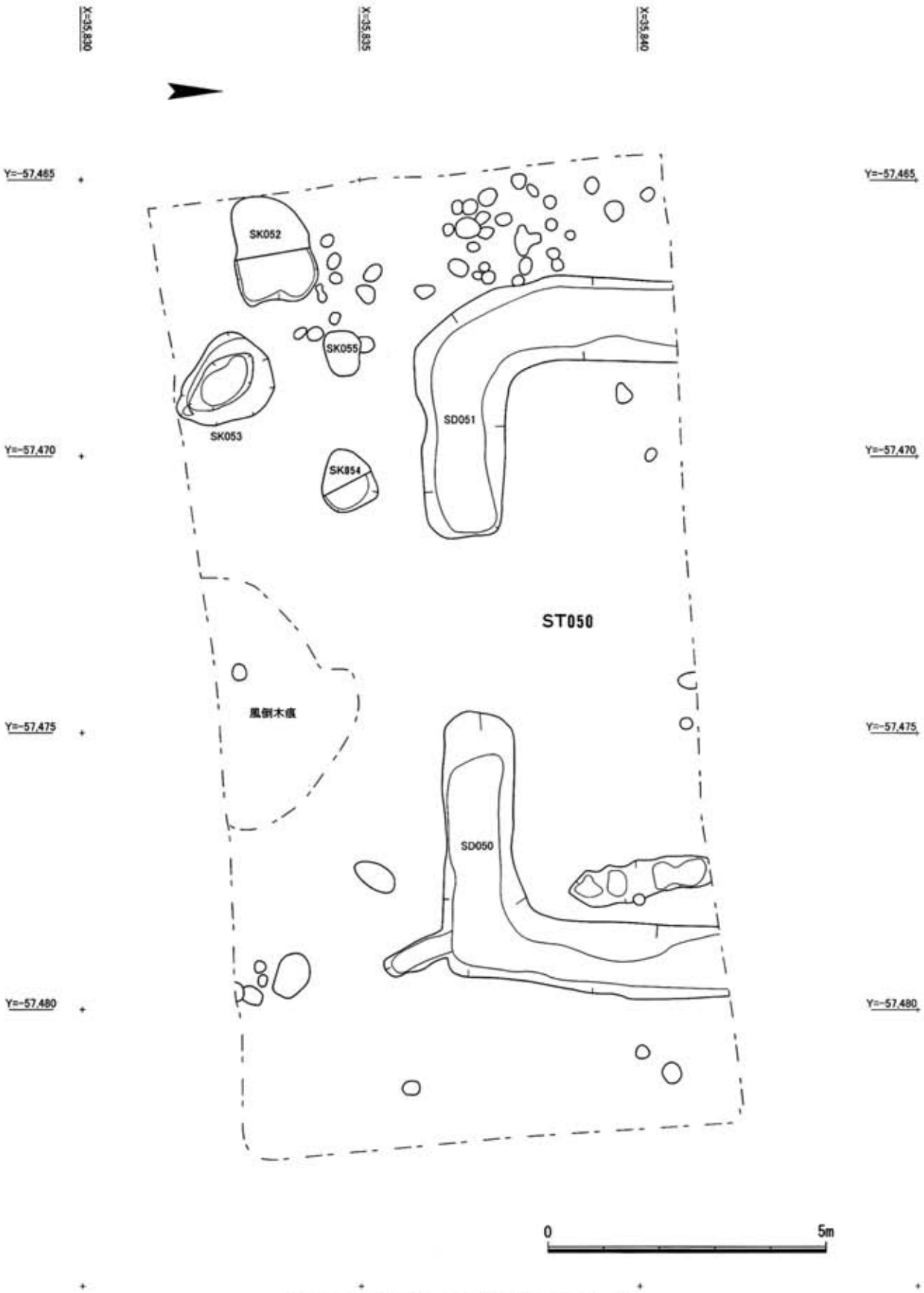
１次調査区の西側、SJ031甕棺の南側に接して位置する成人用甕棺である。削平により下甕下半部しか残らないため、単棺か複式棺かは不明。残存する墓壙の平面形は隅丸長方形で、残存長2.5ｍ、幅1.1ｍ。検出面から２次墓壙基底面までの深さ0.44ｍ。甕棺の主軸方位はＮ－67°－Ｅで、甕棺は北東方向から挿入される。

SJ004甕棺（第24図・30図）

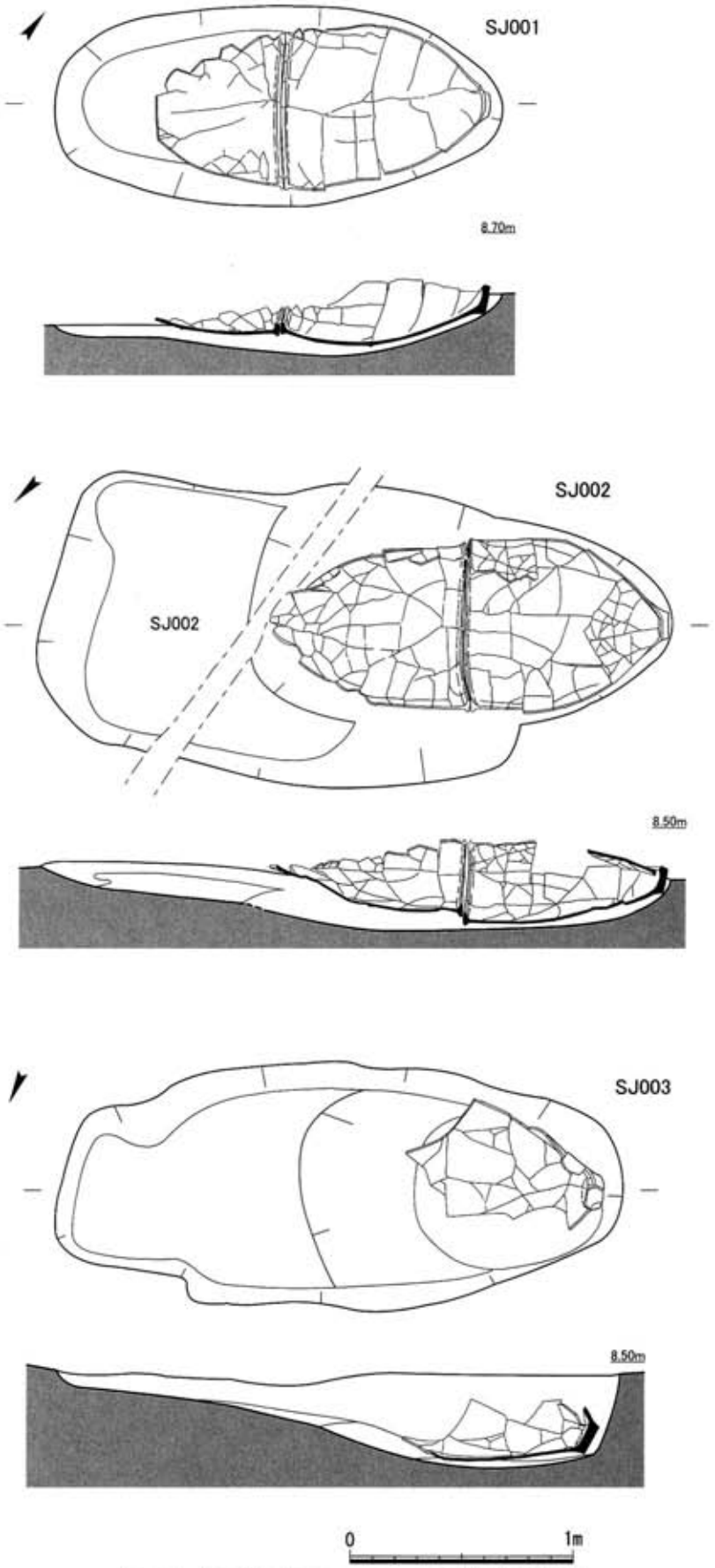
１次調査区の西側、SJ003甕棺の東側に位置する成人用複式甕棺である。１次墓壙の南側を奈良時代のSK005土坑に切られる。残存する１次墓壙の平面形は隅丸方形と推定され、１次墓壙の中間から、北東側の壁を掘り込み、２次墓壙を作出する。甕棺の主軸方位はＮ－54°－Ｅ で、埋置角度は－4°。甕棺は南西方向から挿入される。

SJ032甕棺（第24図・30図）

SJ004甕棺の東側に位置する成人用甕棺である。下甕の一部しか残らないため、単棺か複式棺かは不明である



第22図　枝町遺跡２区遺構配置図（1/100）



第23図　枝町遺跡SJ001・002・003甕棺墓（1/30）

が、埋置角度から複式棺の可能性が強い。残存する１次墓壙の平面形は隅丸方形で推定される規模は、全長1.3ｍ、幅1.2ｍ。検出面から１次墓壙基底面までの深さ0.14ｍ。１次墓壙と２次墓壙の墓壙基底面の深さはほぼ、同レベルである。残存する下甕と墓壙の形より推定される甕棺の主軸方位はＮ－87°－Ｅで、埋置角度はほぼ、水平である。甕棺は東から挿入される。

SJ031甕棺（第24図・30図）

１次調査区の西側SJ003甕棺の北側に位置する成人用甕棺である。１次墓壙と２次墓壙の一部の大半が削平されているため、単棺か複式棺かは不明。残存する墓壙の平面形は円形。甕棺の主軸方位は、Ｎ－77°－Ｅ で、埋置角度は＋34°。甕は東から挿入される。

SJ038甕棺（第25図・30図）

１次拡張区の出土である。周囲は、神埼町教育委員会が甕棺を調査した地点に当たる。SJ001甕棺の西約15ｍに位置する。本甕棺は、成人用複式甕棺である。削平により１次墓壙と上甕の大部分が失われている。残存する２次墓壙の平面形は円形である。上甕に口縁部の破片が見られないことから、打ち欠きの甕棺を被せたものと推定される。甕棺の主軸方位はＮ－60°－Ｅで、埋置角度は＋34°。甕棺は東側から挿入されている。

SJ040甕棺（第25図・30図）

SJ038甕棺の東側に位置する成人用複式棺である。合わせ口部分には粘土で目張りがされている。１次墓壙の平面形は、隅丸長方形で、推定される規模は、全長2.0ｍ、幅1.2ｍ、１次墓壙と２次墓壙の基底面はゆるやかに繋がる。甕棺の主軸方向はＮ－47°－Ｅで、埋置角度はほぼ、水平。甕棺は、北東方向から挿入されている。

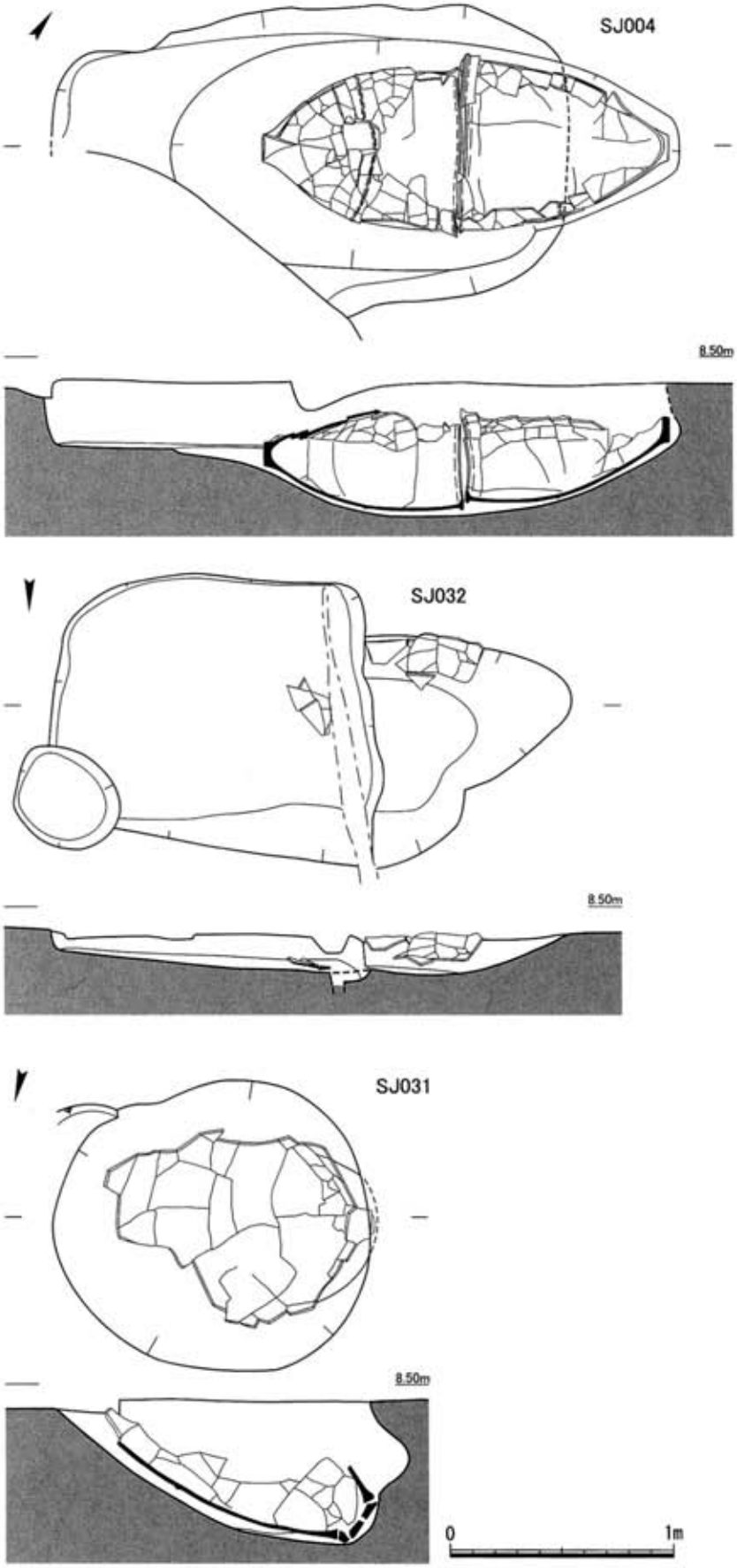
SK053土坑（第25図）

SK053土坑は、２次調査地点の南西隅、SD051溝跡の南側に位置する。平面形が不整形の土坑で、長軸方向1.9ｍ、短軸方向1.64ｍ、検出面からの深さ約1.0ｍである。土坑中央付近が大きく抉れており、その下部には平坦部を持つ。常時、水が湧いている状態であったため、井戸の可能性がある。埋土からは、弥生時代後期前半を主体とした土器群が多量に出土した。

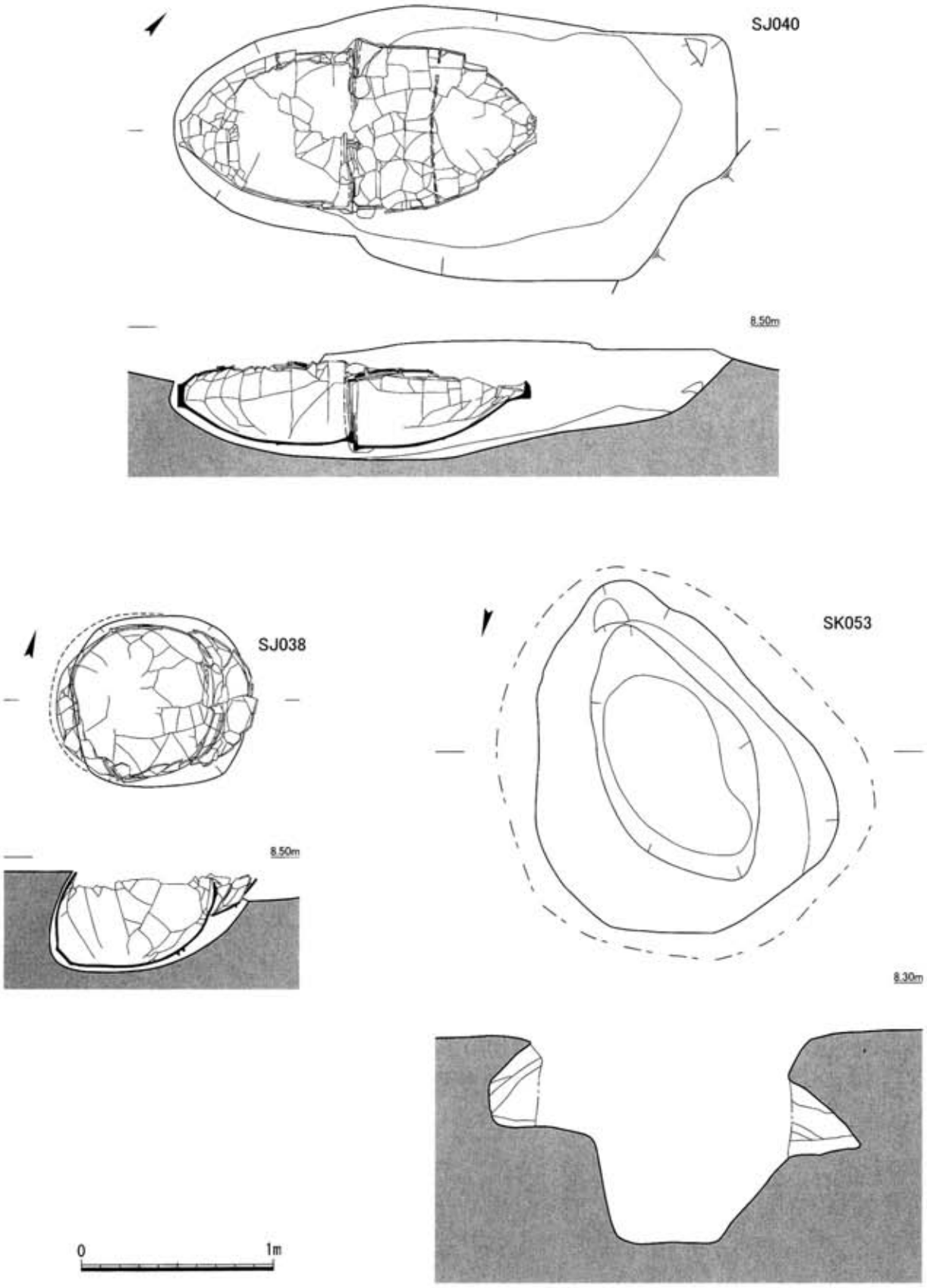
(2) 古墳時代前期の遺構

古墳時代前期の遺構には、方形周溝墓と推定される溝９条と馬郡遺跡から続く延長150ｍにも及ぶ直線的な溝１条（SD025溝跡）を検出している。方形周溝墓は調査範囲が狭いため、周溝の一部の検出にとどまっているが、その配置状況等により、方形プランを呈し、溝が全周するもの（SD011・012・014・015・016）と南側に陸橋部をもつもの（SD018・020、SD050・051）に分かれる。調査時は、溝跡として調査したため、SDの番号を付しているが、他の溝と区別するため、ここでは、STの略号を付す。なお、陸橋部を持つ方形周溝墓２基については、先頭の番号を利用し、ST018方形周溝墓（旧SD018・020溝跡）とST050方形周溝墓（旧SD050・051溝跡）とする。SD025溝跡は、１次調査区東側を斜め方向に横切る溝跡で、神埼町教育委員会の調査分の東側延長の35ｍ区間を調査した。前回の調査と同じく、外来系の土器を中心に出土している。

この溝跡からは、大量の外来系土器が出土しているが、外来系土器の形態や叩き等の調整技法は、非常に稚拙で、他地域からの搬入品というよりも、在地の工人が模倣し製作したものであるかのようにみえる。ただし、在地の土器の出土は少量で、古墳時代初頭前後の吉野ヶ里遺跡周辺の遺跡のあり方にも係る重要な遺跡であることも想定できる。



第24図　枝町遺跡SJ004・032・031甕棺墓（1/30）



第25図　枝町遺跡SJ040・038甕棺墓・SK053土坑（1/30）

ST011方形周溝墓（第21・26図・旧SD011）

1次調査区の中央部、ST012方形周溝墓の北側に位置する。方形プランを呈すると推定される方形周溝墓の一部である。今回検出した溝跡は、南側のほぼ、一辺に当たる。その規模は、溝の内側での長さ10.6mである。溝の断面は逆台形で、幅0.52～0.96m。埋土は自然埋没を示すレンズ状堆積である。遺物は、外面にタタキ調整を持つ土師器甕が出土している。

この方形周溝墓の北側の神埼町教育委員会調査部分で南北方向に延びる溝2条が検出され、SD2109溝跡と接している。この2本の溝跡の間隔は約11mで、位置的にもST011方形周溝墓の周溝の延長ラインと一致することから、ST011方形周溝墓の周溝は、SD2109溝跡まで延び、北側をこの溝跡と共有することが想定できる。

ST012方形周溝墓（第21・26図・旧SD012）

1次調査区の中央部、ST011方形周溝墓の南側に位置する。方形プランを呈すると推定される方形周溝墓の一部である。今回検出した溝跡は、北側の一辺部分に当たる。その規模は、溝の内側で長さ8.0～9.2mである。

方形周溝墓の東側のコーナーは、比較的方形に曲がるが、西側はやや緩やかである。溝の削平が著しく、非常に浅いが、断面形は、逆台形をしている。

ST015方形周溝墓（第21・26図・旧SD015）

1次調査区の中央部、SD012方形周溝墓の東側に位置する。方形プランを呈すると推定される方形周溝墓の周溝の一部である。ST015方形周溝墓の北側の周溝は、ST012方形周溝墓の北側の周溝とほぼ、平行に走る。周溝墓の規模は、周溝の内側での長さ7.8mである。周溝の断面は逆台形で、検出面からの深さ0.46～0.5m。周溝の埋土は、自然埋没を示すレンズ状堆積である。

ST014方形周溝墓（第21・26図・旧SD014）

1次調査区の中央部、ST015方形周溝墓の北側、ST018方形周溝墓の西側に位置する。方形プランを呈すると推定される方形周溝墓の周溝の一部である。周溝墓の規模は、周溝の内側で長さ6.4mである。周溝の断面は逆台形である。

ST018方形周溝墓（第21・27図・旧SD018・020）

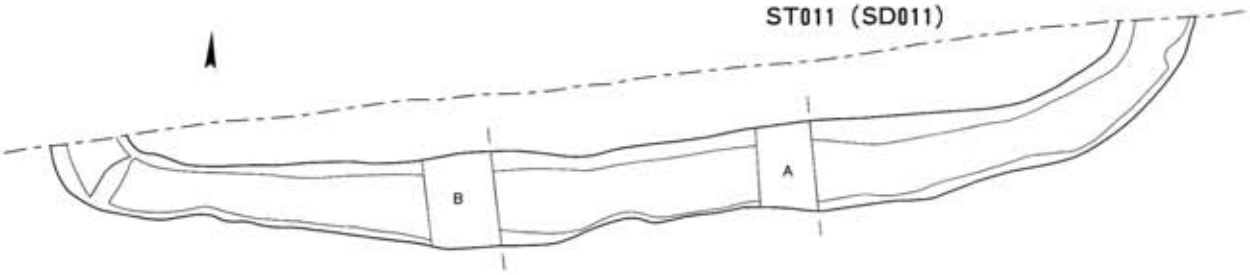
1次調査区の中央部、ST014方形周溝墓の東側に位置する。南側に陸橋を持つと推定される方形周溝墓である。陸橋と周溝の先端部分を検出している。陸橋の間は、約4.2m。東側の周溝（SD020）は、幅1.12～1.56m。西側の周溝は、0.6～0.8m。周溝の形状は対称ではなく、その内部の平面形は、ややいびつな形を呈すると推定される。推定される周溝墓の規模は、周溝の内側で長さ8.8m。

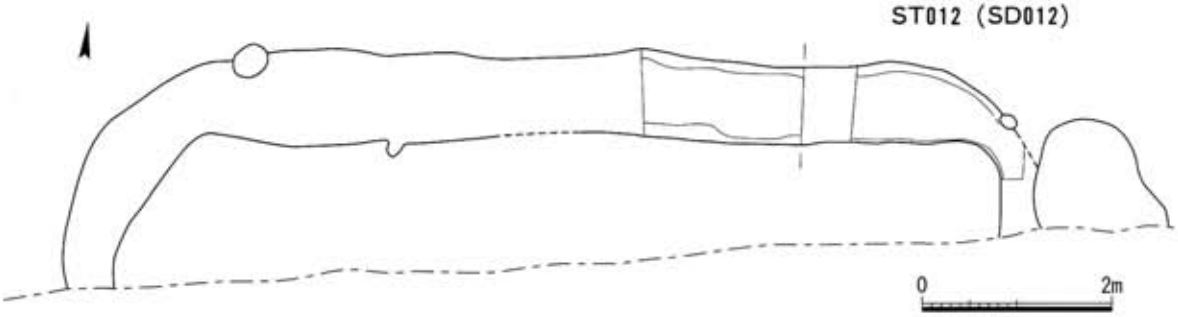
ST050方形周溝墓（第21・27図・旧SD050・051）

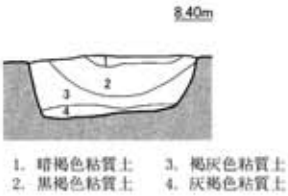
2次調査地点に位置する。全体的な位置では、ST018方形周溝墓の南側に位置する。南側に陸橋部を持つ方形周溝墓である。周溝の屈曲部は、ほぼ直角に曲がり、その内部の平面形は方形を呈すると推定される。西側の周溝（SD051）の規模は1.4～1.6m、検出面からの深さ0.28～0.46m、東側の周溝（SD050）の規模は1.2～1.4mで、検出面からの深さ0.32～0.34m。規模は、周溝の内側（東西方向）で10.2m。今回検出した方形周溝墓の中で、もっとも大きいものである。周溝の埋土は、暗褐色粘質土をベースとしており、自然堆積を示す。埋土からは、古墳時代初頭の土器が多量に出土した。

ST016方形周溝墓（第21・27図・旧SD016）

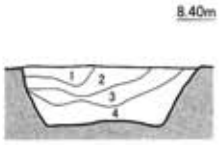
1次調査区の中央部、ST014方形周溝墓の南側に位置する。当初、規模が小さかったため、溝として取り扱っていたが、西側の周溝がST015方形周溝墓の周溝と共有している可能性が認められたことから、方形周溝墓と判断し



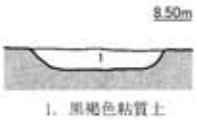




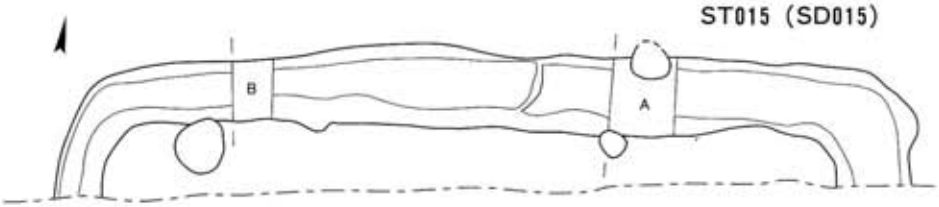
SD011Aベルト断面(1/40)

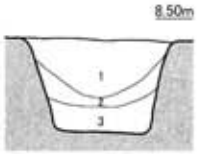


SD011Bベルト断面(1/40)

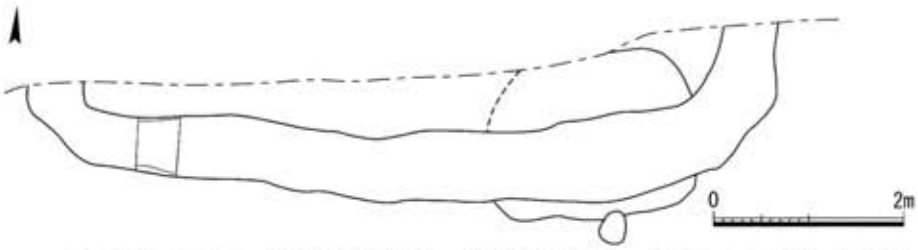


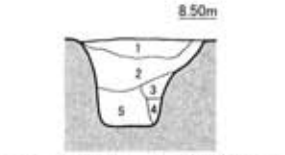
SD012(1/40)





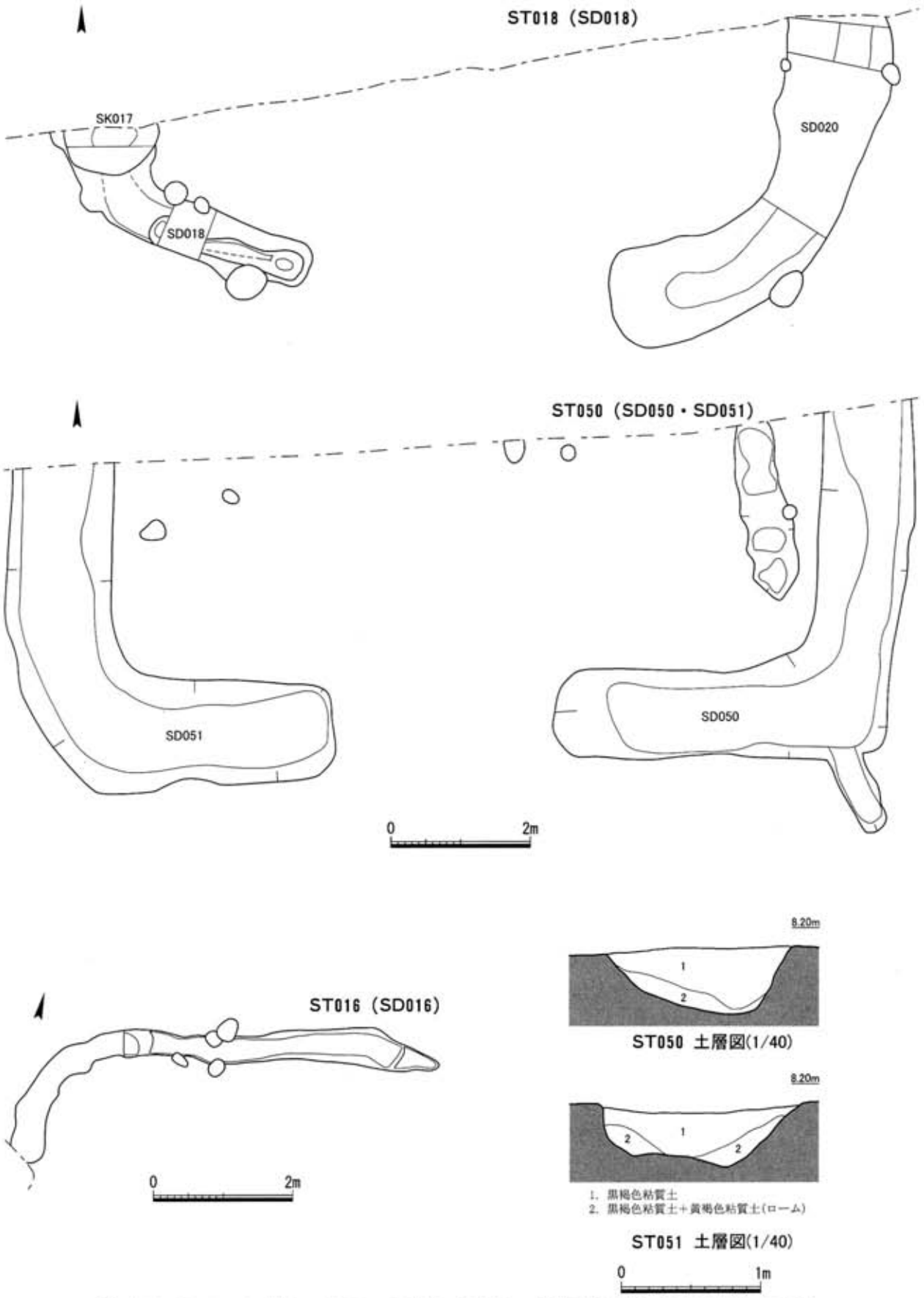
ST015A土層 (1/40)





ST015B土層 (1/40)

第26図　ST011・012溝跡 (1/80)・土層図 (1/40)・ST015・014溝跡 (1/80)・ST015土層図 (1/40)



第27図　ST018・020溝跡・ST050・051溝跡（1/80）・土層図（1/40）・ST016溝跡（1/80）

た。北側の一辺の長さは、5.8m、周溝の幅0.3～0.6m。周溝の埋土は暗褐色粘質土。

(3) 奈良時代～中世の土坑・井戸跡

奈良～中世の土坑・井戸のうち、5基を図示した。

SK005土坑（第28図）

1次調査区の西側に位置するSK005土坑は、SJ004甕棺を切り、SD009溝跡に切られる。平面形は隅丸長方形で、東西方向に主軸を持つ。規模は長さ2.12m、幅1.4m。検出面からの深さ0.2～0.3m。埋土は暗褐色粘質土をベースとしている。埋土中から奈良時代の須恵器・土師器が出土している。

SK006土坑（第28図）

1次調査区の西側に位置するSK006土坑は、SK007土坑の北西に位置し、土坑北側が調査区外へ抜ける。土坑の平面形は、隅丸長方形で、長軸方向の推定の長さは約2.2m（現存長1.5m）、幅1.2m。検出面からの深さ0.34～0.48m。埋土は暗褐色粘質土をベースとしている。埋土からは、奈良時代の須恵器の蓋や高台付の土師器杯等が出土している。

SK007土坑（第28図）

1次調査区の西側に位置するSK007土坑は、SJ032甕棺墓の東側に位置する。南北方向に主軸を持つ土坑で、平面形は隅丸長方形、長軸方向の長さ2.16m、幅1.2～1.6m、検出面からの深さ0.28～0.58m。中央に小穴がある。埋土は自然堆積を示し、奈良時代の蓋杯や杯身等と伴に弥生時代の小型倣製鏡片が出土した。この鏡は、鏡片であるが、穿孔が認められ、破鏡として用いられた可能性がある。

SK023土坑（第28図）

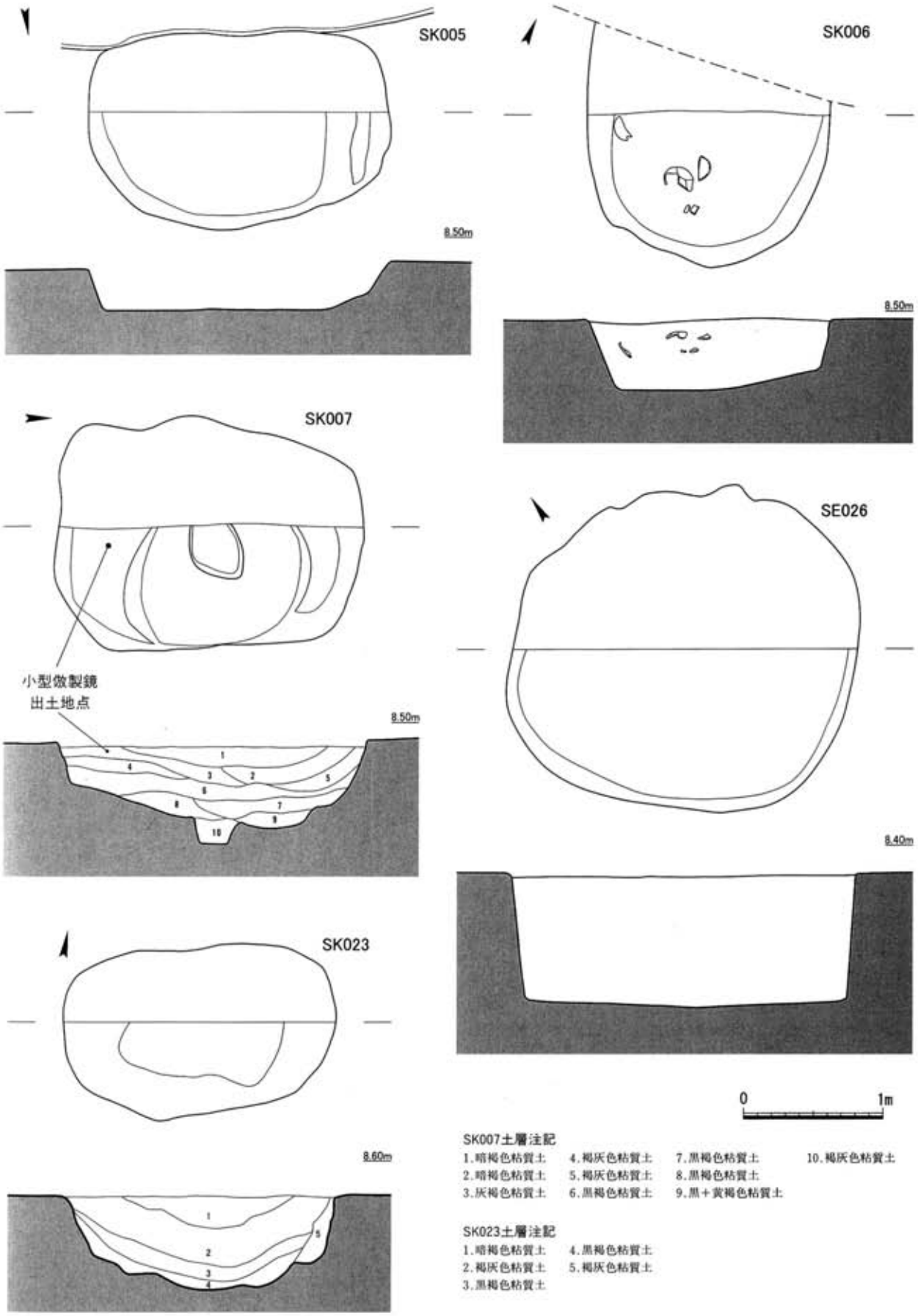
1次調査区の東側に位置するSK023土坑は、平面形が隅丸長方形で、東西方向に主軸を持つ。長軸方向の長さ1.94m、幅1.08～1.2m、検出面からの深さ0.52～0.68m。埋土は自然堆積を示し、暗褐色粘質土をベースとする。埋土からは、奈良時代の須恵器の甕や土師器の甕に混じり、移動式カマドの破片が出土している。

SE026井戸跡（第28図）

1次調査区の東側に位置するSE026井戸跡は、東西方向にやや長い円形をした平安時代の井戸跡である。長軸方向の長さ2.46m、幅2.2m。検出面からの深さ約0.9m。

4　枝町遺跡出土遺物（第29～34図）

98･99は、SJ001甕棺の上甕と下甕。98は口縁部から胴部下半にかけての破片で底部を欠く。口径61.3cm、残存高56.6cm。口縁部は、水平で、内側に突出する。胴部中央付近に断面三角形の突帯が付く。内外面ともナデ調整。99は、完形に復元できる下甕。平底の底部から大きく外反し、立ち上がる体部から、水平で内側に突出する口縁部にいたる。口径69.8cm、器高85.8cm、底径10.8cm。内外面ともナデ調整。100はSJ003甕棺の下甕。口縁部から胴部上半を欠く。底径13.8cm、残存する器高77.2cm。胴部中央には、断面M字形の突帯がつく。内外面ともナデ調整。101・102はSJ002甕棺の上甕と下甕。上甕である101は、口径61.8cm、底径（復元）11.1cm、器高88.2cm。口縁部は水平で、内側に突出する。口縁部からまっすぐおりる胴部は、中央付近ですぼまり底部にいたる。底部は平底か。内外面ともナデ調整。下甕である102は、口径66.9cm、底径11.2cm、器高85.9cm。口縁部は内側へ突出し、口縁上端は水平に近いが、やや丸みを持つ。胴部中央で断面三角形の突帯1条が付く。内外面ともナデ調整。103・104はSJ004甕棺の上甕と下甕。上甕である103は、口径66.6cm、底径11.4cm、器高86.1cm。口縁部はやや下



第28図　SK005・006・007・023土坑・SE026井戸跡（1/40）

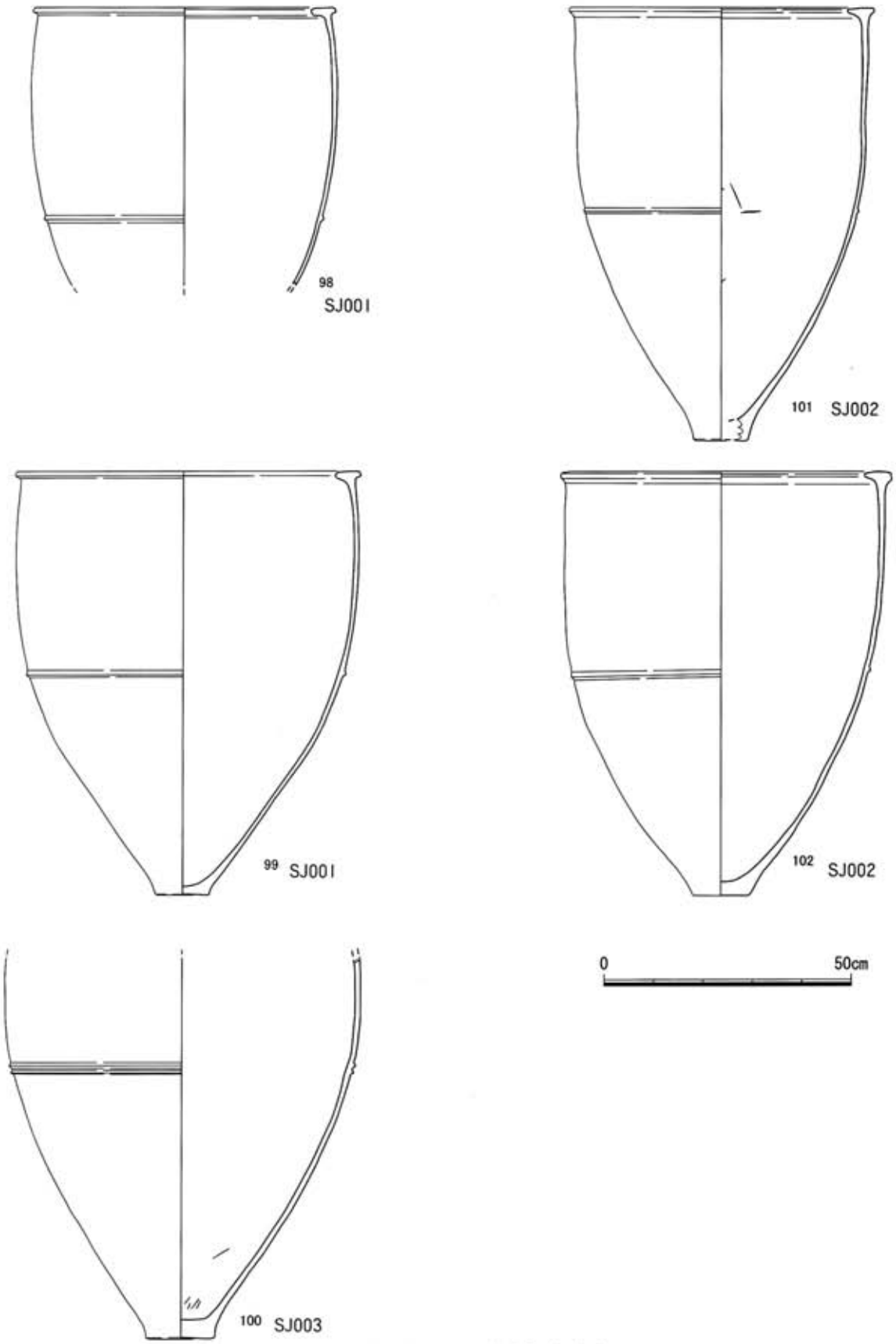
がり気味に内面に突出する。胴部中央に断面三角形の突帯１条が付く。内外面ともナデ調整。下甕である104は、103同様、口縁内面がやや下がり気味に内側に突出する。口縁と体部の接合部は、口縁の中央付近に寄り、「T」字に近い形になる。口径66.8cm、底径10.8cm、器高88.8cm。胴部中央に断面三角形の突帯１条が付く。内外面ともナデ調整。105はSJ031甕棺。底部から胴部にかけての破片で、口縁部を欠く。やや丸みを持つ胴部に平底の底部がつく。底径12.0cm、残存する器高73.5cm。内外面ともナデ調整。106は、SJ032甕棺の下甕。口縁部と胴部の一部のみ残る。口縁部は水平で、内面が内側に突出する。残された胴部には、断面三角形の突帯１条が付く。107・108はSJ038甕棺の上甕と下甕。上甕である107は突帯一条が付く胴部の破片。外面はハケ調整、内面はナデ調整。下甕である108は、口縁端部の一部を欠くものの完形に復元できる甕棺。口径58.6cm、底径12.8cm、器高89.5cm。器形は卵形で、胴部上半が内湾し、口縁部内面先端と接合する。そのため、口縁の断面形態は鋭角的な「逆L字」になる。頸部に断面三角形の突帯一条を巡らす。胴部中位で最大径を持ち、そこにコ字形突帯を貼り付ける。底部はやや上げ底気味。外面は縦方向のハケ調整。内面はナデ調整。109は、SJ040甕棺の下甕。口縁部は肥厚し、わずかに内側に傾く。口径72.7cm、底径11.0cm、器高91.0cm。内外面ともナデ調整。立岩式とみられるSJ038甕棺を除けば、残りの甕棺は、いずれも汲田式の甕棺と推定される。

110～122はSK053土坑出土。110・111は袋状口縁壺。110は口縁部の破片。内傾する口縁と頸部の一部からなる。口径19.4cm、残存高8.4cm。口縁部は内外面ともナデ調整。頸部外面はハケ調整。111は口縁部から胴部上半にかけての破片。内傾する口縁部の内面に平端部を持つ。頸部には断面三角形の突帯を巡らす。外面の調整は主にハケ調整。内面は、ハケ後ナデ調整。112～118は甕。口縁部が残る甕はいずれも「く」の字口縁である。114のような小型の甕から113にみられる大型の甕がある。114と118の底部は平底であることから、いずれの甕も平底で「く」の字口縁を持つ甕であると推定される。119は小型の鉢。口径19.5cm、器高10.0cm。120は鉢。口縁が外反し、「く」の字になる。底部は平底もしくは、やや丸みを持つ可能性がある。121・122は器台。121は器台の上半部、122は同下半部。両者は接合しないが、雰囲気が非常に似ているため、同一個体の可能性がある。SK053土坑は、その出土品から弥生時代後期前半と推定される。

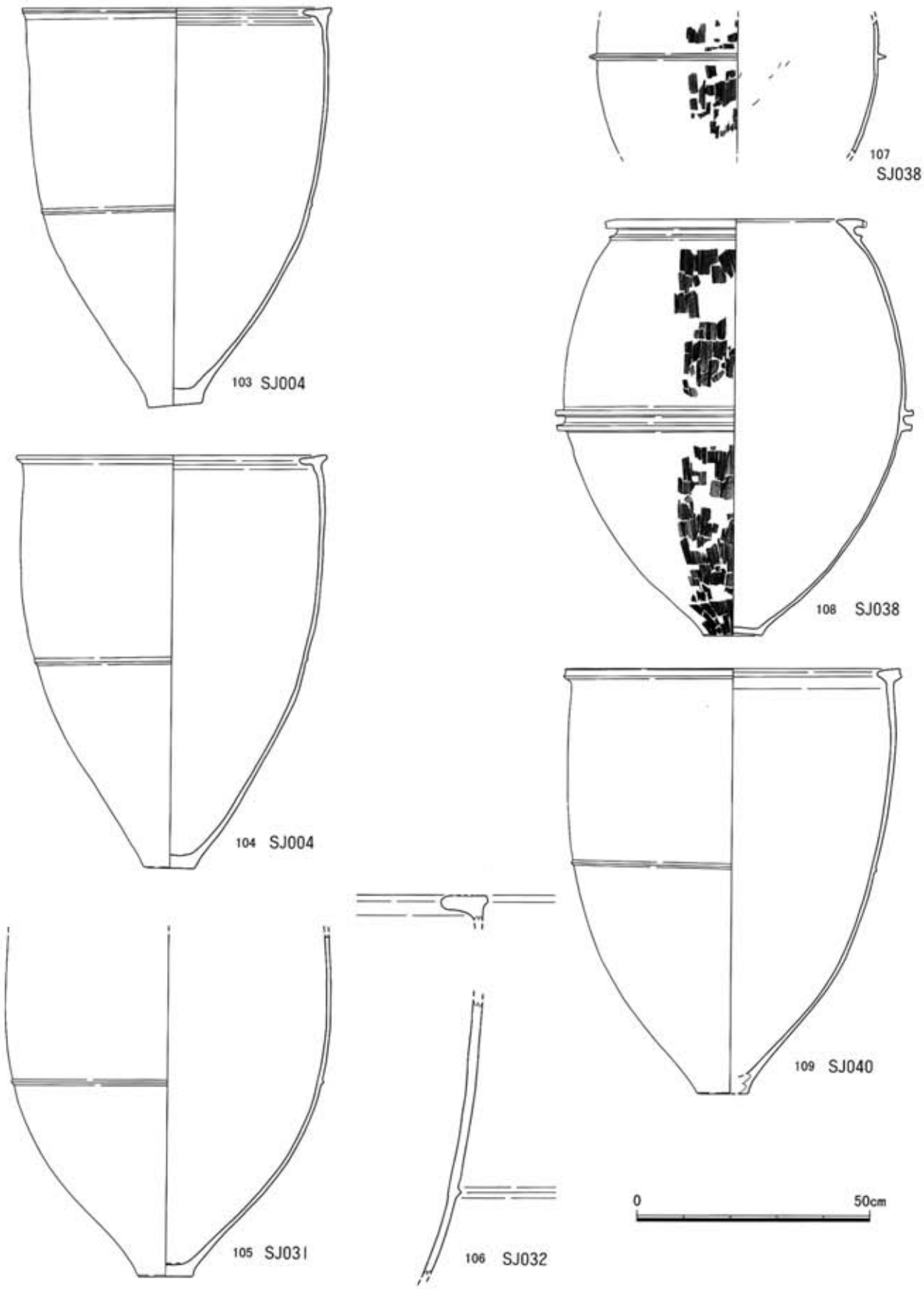
123～134はSD025溝跡出土。123～129は甕。123から128はいずれも球形の胴部に外反する口縁部を持つ甕とみられる。底部は丸底か尖り底で、口縁や体部にタタキの痕跡を残し、外面に一部ハケ調整を施す一群である。内面はケズリを施すが、ハケや粗いナデで調整されるものもある。体部にケズリを持つが、器壁は比較的厚い。129は台付甕である。二次焼成を受けていない為、台付鉢の可能性があるが、ここでは甕とする。砲弾状の体部にやや開き気味の脚が付く。脚は折損している。体部の上半は、まっすぐ立上がり、口縁部にいたる。口縁部には窓が設けられている。130～132は単口縁の壺。132は完形に復元できる壺で、口径18.7cm、底径5.0cm、器高29.3cm。胴部中央付近で最大径を持つ球形の体部にボタン状に突出した底部が付く。胴部から続く頸部は短く立上がり、大きく外反する口縁部が続く。外面は主にハケ調整で底部にはタタキの痕跡が残る。このSD025溝跡はその出土土器から古墳時代初頭の頃と推定される。

135・136はST011方形周溝墓周溝出土品。135は球胴の甕で口縁部と底部を欠く。胴部外面はタタキの後、一部ハケ調整が施される。内面はケズリであるが、一部ハケ調整が見られる。136は底部を欠く甕。口径18.3cm、残存高19.0cm。肩の張った胴部に外反する口縁が付く。外面はタタキ後ハケ調整、内面はハケ調整。137～139は、ST050方形周溝墓SD050溝跡出土品。いずれも壺で球形の胴部を持つ。137は頸部がややしまり、肩が張った壺。138は胴部から底部にかけての破片。底部付近は接合痕で剥離する。

140～145はST050方形周溝墓SD051溝跡出土品。140は壺の頸部から胴部にかけての破片。丸みを持つ胴部に短



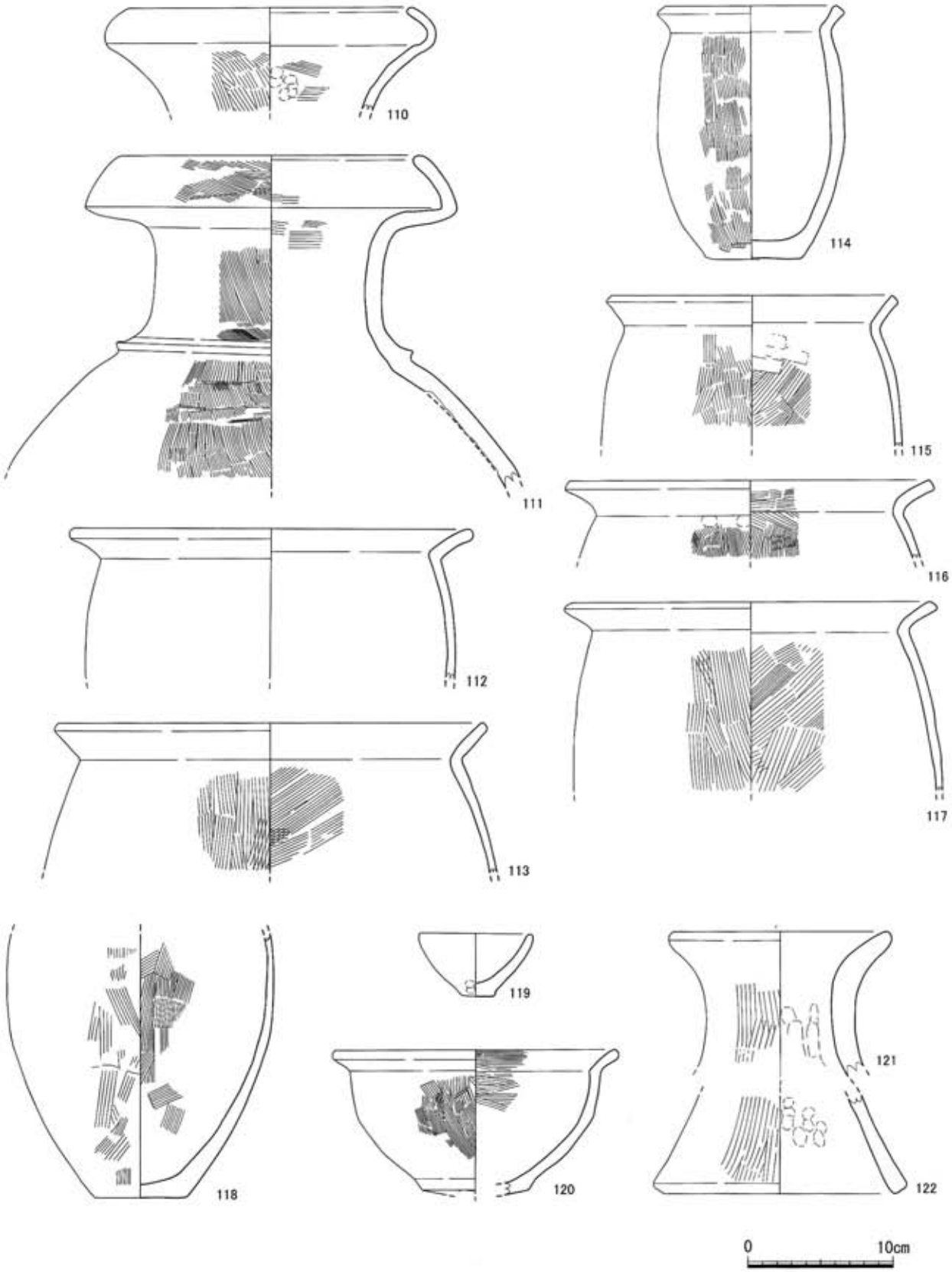
第29図　枝町遺跡出土甕棺①（1/12）



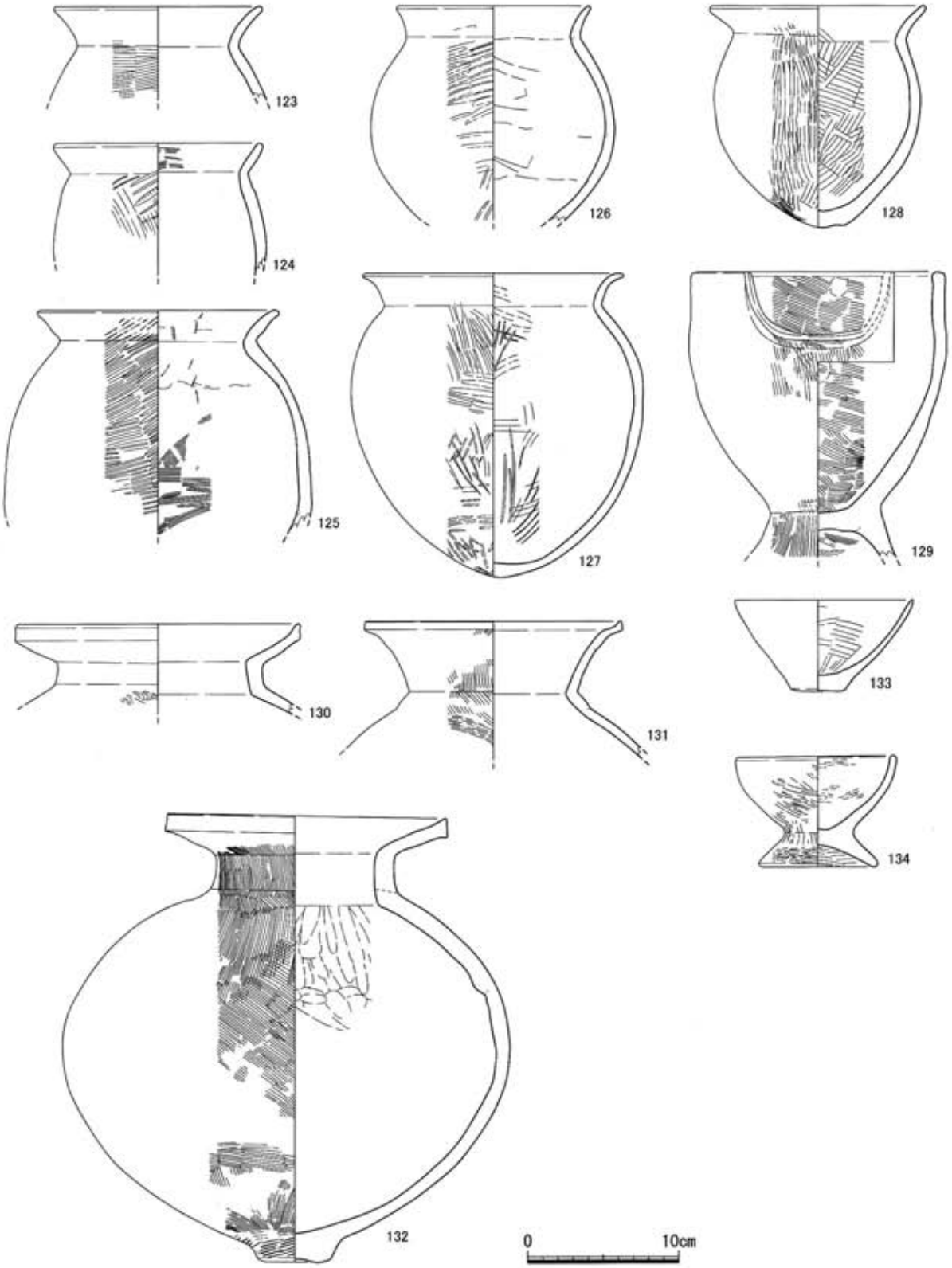
第30図　枝町遺跡出土甕棺②（1/12）

くまっすぐ立ち上がる頸部が付く。胴部外面はハケ調整、内面はケズリ調整。141は球胴の甕の一部。体部は薄く、内面には削りの痕跡が顕著であることから庄内系の甕か。143は、高杯の身部。口径20.5cm、残存高7.3cm。精製された土器で、内外面には細いミガキが施される。144･145は混入と見られる弥生土器。隣接するSK053土坑からの流れ込みか。

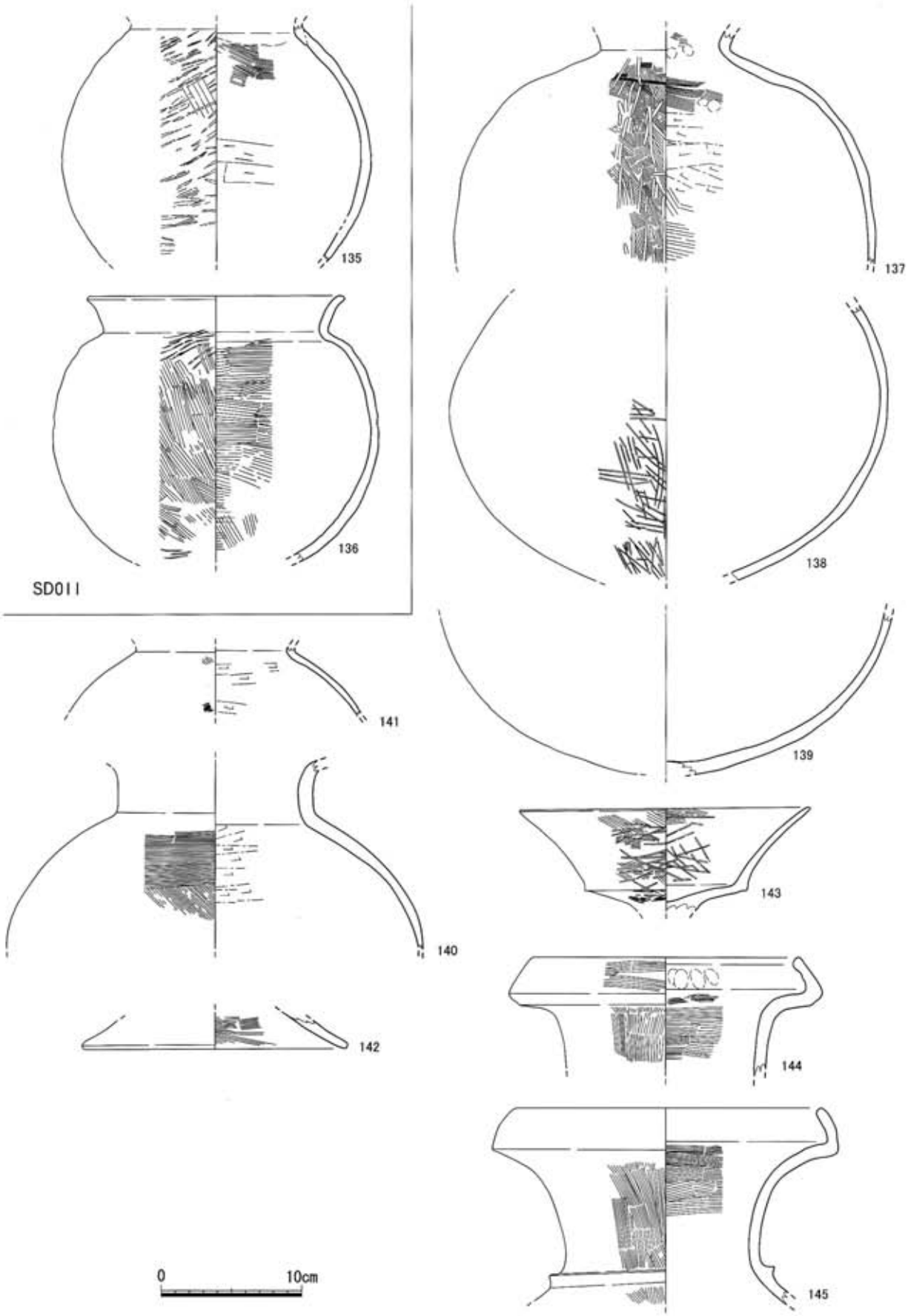
146～148はSK006土坑出土品。146は須恵器の蓋。口径16.5cm。宝珠摘みは剝離する。147は高台を持つ土師器の杯。口径16.6cm、底径12.5cm、器高4.2cm。148は高台を持つ土師器の杯。口径17.6cm、底径10.1cm、器高5.2cm。149～153はSK007土坑出土品。149はボタン状の摘みを有する須恵器の蓋である。口径16.2cm、器高1.9cm。150･151は高台付杯身。152は須恵器杯。口径14.5cm、底径11.3cm、器高3.4cm。153は見込みの深い須恵器鉢。底部付近にケズリ調整がみられる。口径21.4cm、底径11.5cm、器高5.8cm。154～158はSE027井戸跡出土品。154～156は土師器杯。156は底部に板状圧痕を有する。157は、高台付の土師器杯。口径15.4cm、底径8.5cm、器高5.8cm。158は土師器鉢。内面にはケズリ痕が顕著である。口径23.5cm、器高6.5cm。159はSK007土坑から出土した弥生時代小型倣製鏡片である。鈕とその周辺部のみ残存する。鈕の外には２条の円圏帯がめぐり、さらに浮き彫りされた内行花文が鋳出されている。内行花文は７つに復元できる。断面はわずかに鏡背面側に反る。鈕の断面は上面がやや平坦ぎみで、鈕孔形態は、高さ２㎜、幅4.5㎜の楕円形である。破断面に研磨の痕跡などは認められないが、半円形で他の部分と錆の状況が明らかに異なる部分があり、ここに孔が穿孔されていた可能性が高い。銅質は大半の弥生時代小型倣製鏡と同様で、淡緑色を呈する。内行花文の特徴から、高倉洋彰氏による分類で、復元径７cm程度の第Ⅱ型a類である可能性が高いと考えられる。



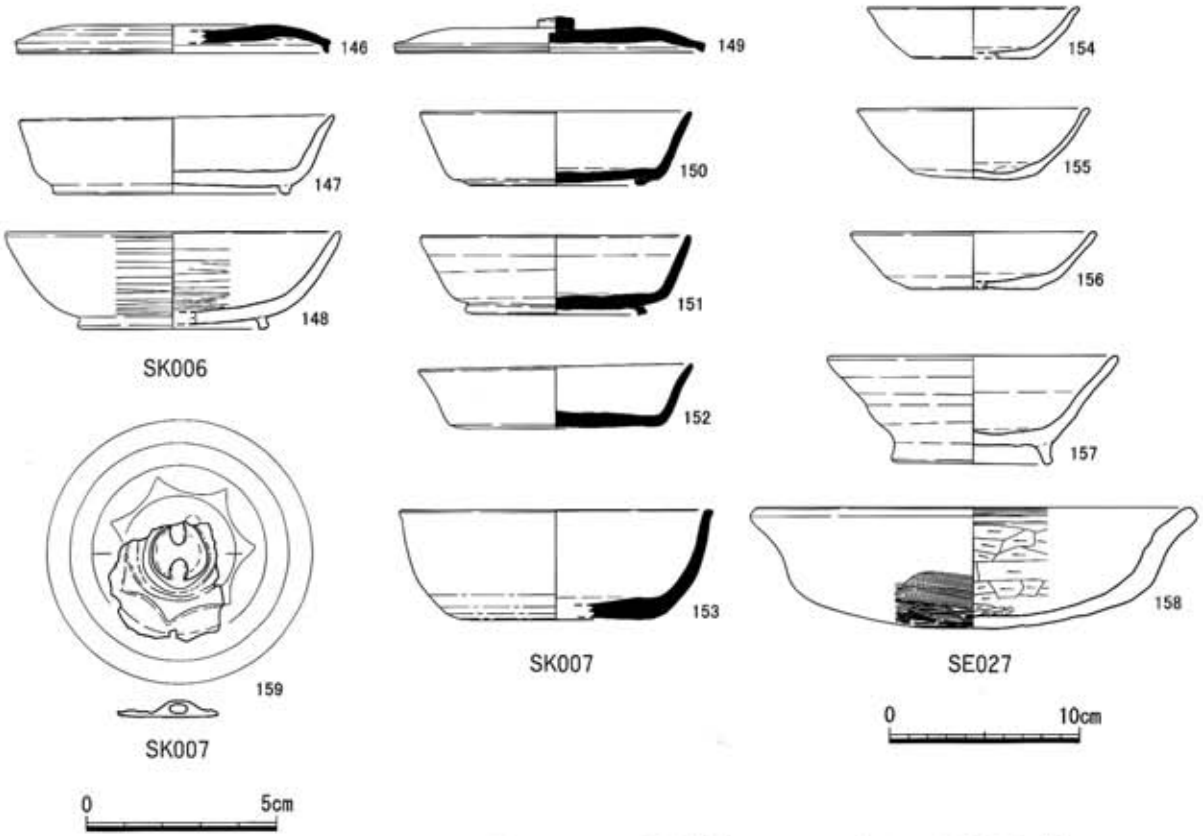
第31図　SK053土坑出土土器（1/4）



第32図　SD025溝跡出土土器（1/4）



第33図　SD011・050・051溝跡出土土器（1/4）



第34図　SK006・007土坑・SE027井戸跡出土土器（1/4）・SK007土坑出土金属器（1/2）

第4章　まとめ

この大曲一の坪地区の調査は、これまで所在が不明であった辛上廃寺の確認を目的として開始した。ところが、調査の開始期に銅鐸が出土したことで、その対応に追われ、調査が長引いた原因のひとつになった。その後に継続した調査では、塔基壇や門跡、金堂と推定される大型掘立柱建物跡等をはじめとする遺構や軒丸瓦等の寺院に関連する出土品を検出し、調査地点が、辛上廃寺の所在地であることが確認できた。また、数次にわたる調査の結果、辛上廃寺の規模も推定することができ、周辺の奈良時代の官衙関連遺跡との比較も可能になりつつある。

枝町遺跡の調査では、弥生時代中期の甕棺墓を中心とする墳墓群が明らかになるとともに、古墳時代初頭の方形周溝墓の存在が確認された。今回の調査で判明した点等について以下にまとめる。

1　辛上廃寺の伽藍配置とその時期

これまでの調査の結果、辛上廃寺の規模は、東西約80ｍ、南北約110ｍの長方形であったと推定し、復元している（第35図）。この辛上廃寺付近は地元の方々から「八反」と呼ばれるが、東西の規模は八反（約87ｍ）に足りない。寺域がもう少し、東に広がる可能性は考えられる。

寺域は二重の区画溝で囲まれている。この区画溝の間には、築地が存在していたと考えられるが、全周していたかどうかは不明である。辛上廃寺には出入口が南、西、東に３ヵ所確認されている。南には掘立柱建物の門があるが、東西の出入口は、溝が途切れているだけで、門に相当する施設はない。東西の出入り口は、SB061掘立柱建物跡の東西に位置しており、この建物を意識して区画溝がつくられた可能性を示す。

現段階では、金堂と推定されるSB061掘立柱建物跡とSB058掘立柱建物跡（南門）と区画溝、僧坊とみられるSB095・096掘立柱建物跡が第１期でつくられたと推定される。SB095掘立柱建物跡と隣接しているSB120掘立柱建物跡も棟の方向を揃えており、同一時期である可能性がある。

これらの施設は瓦葺の建物でなく、瓦が葺かれるのは、塔が建てられた第２期と考えられる。

第２期には、SX049塔基壇がつくられ、瓦葺の塔が建立されたとみられる。また、長大な建物であるSB097掘立柱建物跡が真北に方位をとることから、この塔と同時期に建てられたものと想定している。

問題の残る建物としてSB011掘立柱建物跡がある。この建物は、SB058掘立柱建物跡の北西の位置に建てられている。SB058掘立柱建物跡のように八脚門の形を取るものの、柱の間隔が一定で門とは言い切れない。また、門に付属する溝や柵列が認められない点からも門と認定することに躊躇する。ただ、SB061掘立柱建物跡の前面に位置することを考え合わせると一概に門の可能性を否定することはできない。この建物の解釈については一旦保留することにする。

さて、寺院の時期について、廃寺周辺から出土する瓦は、８世紀後半代を中心とする年代が考えられる。瓦を使用した塔は、第２期の建物群でその造営年代は８世紀後半とみられる。瓦葺の塔に先行する第１期の建物群は８世紀後半以前とみられる。第１期の年代の上限については不明であるが、弥生の埋没谷を埋めた整地層には、７世紀後半代の須恵器が含まれることから、辛上廃寺の建立時期は７世紀末から８世紀前半頃の年代が与えられる。以下まとめると次のように考える。

第１期の建物群（７世紀末から８世紀後半以前）：SB061掘立柱建物跡（金堂）、SB058掘立柱建物跡（南門）、

第35図　辛上廃寺伽藍配置模式図（1/600）

SB095掘立柱建物跡・SB096掘立柱建物跡・SB120掘立柱建物跡（僧坊？）

第２期の建物群（８世紀後半以降）：SX049塔基壇跡（塔）、SB097掘立柱建物跡（僧坊？）

2　辛上廃寺周辺の状況

辛上廃寺周辺では、太宰府と肥前国府とを結ぶ肥前西海道のほか、馬家や郡衙関連と見られる奈良時代の建物群が調査されている。これら官衙関連の建物群と辛上廃寺は有機的に繋がっていると考えられることから、以下、吉野ヶ里遺跡周辺の奈良時代の遺構について概観する。

志波屋四の坪地区は、吉野ヶ里丘陵西側部分の丘陵頂部から斜面地、沖積地部分を含む南北に長い調査区である。調査区の南側で、芯々の距離が９～17ｍで、両側に側溝を持つ官道を延長約200ｍ検出している。官道東側の丘陵部分は、切通しとなり、直線状に延びる。この官道の両側には、大規模な掘立柱建物群がたてられる。その数は、掘立柱建物跡124棟以上である。また、竪穴住居跡７棟以上、土壙46基以上、井戸跡16基も検出している。掘立柱建物跡には、庇を持つ３間×５間や２間×６間のものや布掘りを施す２間×４間の大型の建物跡などがある。また、２間×２間の総柱の建物も数多く認められる。これら建物群は、官道に面した場所で集中して見つかっているほか、丘陵西側斜面に沿って南北方向に配置される。また、丘陵頂部付近にも総柱の建物が認められる。出土遺物も木簡のほか、墨書土器が多数出土している。

志波屋三の坪乙地区は、志波屋四の坪地区と谷を挟んだ西側の独立丘陵上に位置する。掘立柱建物跡13棟が検出されている。この掘立柱建物群は、南北を軸にしてコの字に規則的に配置される特徴を持つ。掘立柱建物跡の中には、庇や棟持柱を持つ建物もあることから、宿泊施設または郡司等の宿舎とみられる「舘」を想定する指摘もある。

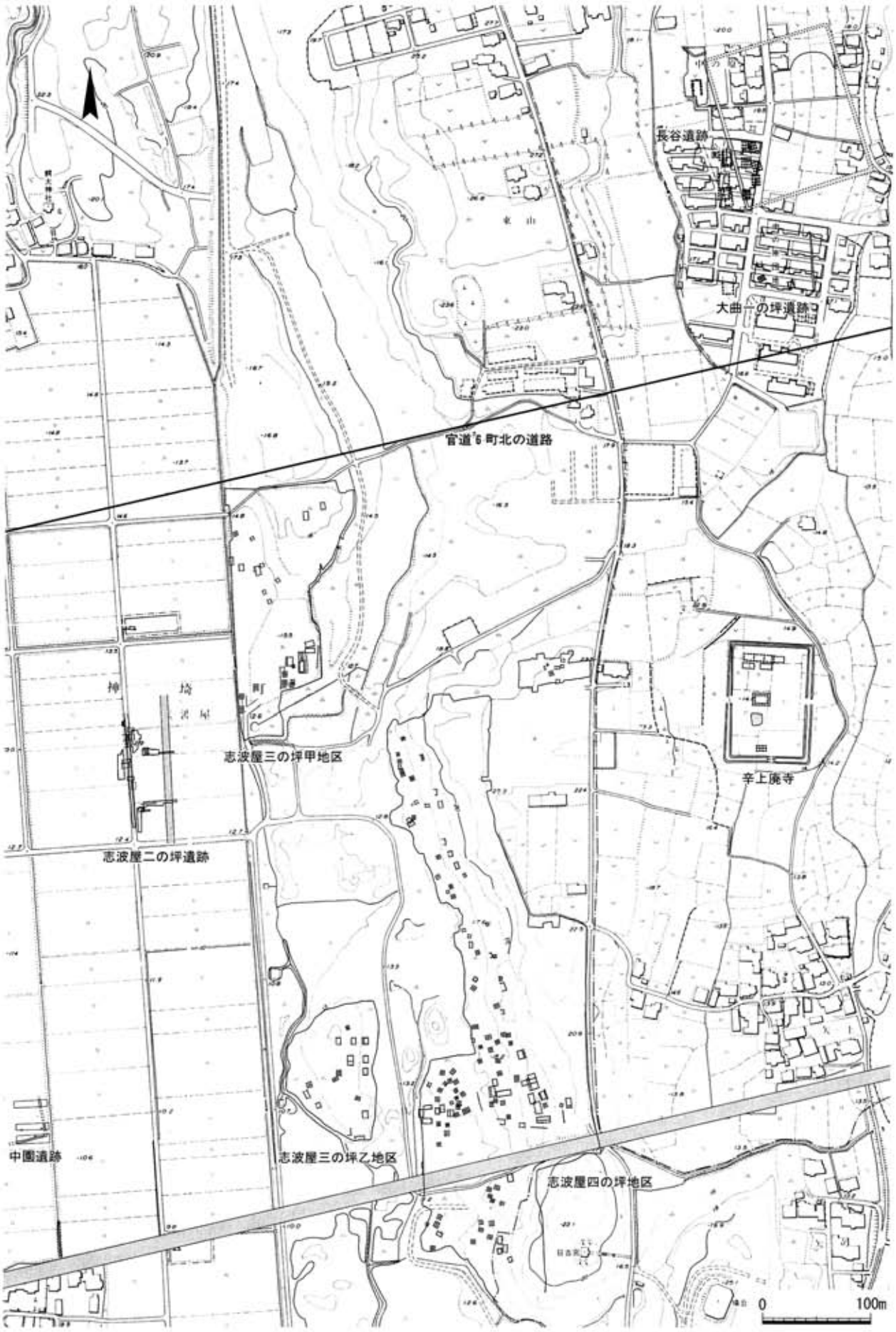
志波屋三の坪甲地区は、志波屋三の坪乙地区の北300ｍに位置し、掘立柱建物跡32棟、土壙約180基、井戸跡９基、柵跡３条等を検出している。地区の南部の一部を埋め立てて整地し、庇を持つ大型の掘立柱建物等を集中的に配置する。建物に沿って柵が建てられており、計画的な建物配置が認められる。井戸や土壙から、墨書土器や木簡が見つかっている。志波屋三の坪地区同様、「舘」の可能性が指摘されている。

志波屋二の坪遺跡は、昭和61年に神埼町教委によって調査され、掘立柱建物跡15棟以上、柵列１条、遺跡の東側を区切る南北方向に延びる区画溝跡１条等を検出している。水路部分という狭い調査ながら、多数の掘立柱建物跡が認められ、墨書土器等も出土していることから、神埼郡衙の中心域と推定されている。

中園遺跡は、馬郡集落の北側と志波屋二の坪地区の間に位置する。水路部分の調査にも係らず、掘立柱建物跡８棟、柵列２条、井戸跡７基、道路状遺構のほか、「厨鉢」と書かれた墨書土器や帯金具が出土している。

大曲一の坪遺跡・長谷遺跡は、辛上廃寺の北約500ｍ地点に位置する。平成６年、旧東脊振村教委により長谷遺跡の一部が調査され、３間×５間の掘立柱建物跡２棟、溝跡３条、掘込地業を持つ遺構等が調査された。その後、平成13年から開始された村営住宅の建替えにより奈良時代を中心とする掘立柱建物跡８棟や建物群を囲む大型の区画溝の一部を検出している。

この中で特に注目されるものとして、区画溝がある。調査では、区画溝の南西部の検出をしている。この区画溝の北側延長部分が、長谷遺跡の掘込地業を持つ遺構に向けて延びている。この掘込地業遺構と考えていた遺構は、区画溝の一部であるとみられ、区画溝の西辺の規模が約144ｍと想定できる。区画溝の内側には、溝と方位を同じくする３間×３間の掘立柱建物跡２棟が並行して建てられていることから、この区画溝とその内部の建物群は奈良時代の正倉に関連する施設と捉えることができる。この区画溝の埋没後にも真北に方位をとる掘立柱建物



第36図　吉野ヶ里遺跡周辺奈良時代官衙関連遺跡位置図（1/5,000）

群が重複し建てられることから、この正倉域が長期間継続して経営されていたと推定される。

この辛上廃寺を含めた吉野ヶ里遺跡周辺の奈良時代建物群の配置図が第36図である。吉野ヶ里丘陵を東西に貫く官道が敷設され、この官道の北側を中心に官衙関連の建物群が配置される。吉野ヶ里丘陵の東には、辛上廃寺が官道から300m北の位置につくられる。さらにその北側には、正倉とみられる区画溝を伴う建物群が配置される。この建物群を区画する溝は、官道の6町（約660m）北を東西方向に延びる道路にほぼ、平行して走る。

吉野ヶ里丘陵西側斜面部から沖積地にかけて掘立柱建物跡が集中する志波屋四の坪地区は、官道に隣接することから馬家と想定されている。谷を挟み、志波屋四の坪地区の西側の低丘陵に位置する志波屋三の坪乙地区とその北側に位置する志波屋三の坪甲地区では、整然とした建物配置が認められることから、舘の可能性が指摘されている。

志波屋二の坪遺跡とその南に位置する中園遺跡では、すでに圃場整備により失われているが、それ以前の地形図に方2町の地割りが認められ、小規模な調査にも係らず、多数の掘立柱建物跡の存在や墨書土器、青銅製帯金具等の出土から、神埼郡衙である可能性が高い地点である。

以上のことから、神埼郡衙周辺は、寺院や馬家、正倉等が集約、経営されていた地区であることが分かる。このような官衙関連施設の存在は、官道の設置とも大きく係ってくるものと想定される。

なお、話は変わるが、吉野ヶ里遺跡周辺では、奈良時代の墳墓についても、様相が明らかになりつつある。吉野ヶ里丘陵の基部に位置する戦場古墳群・戦場ヶ谷遺跡では、8世紀後半代とみられる集石を伴う火葬墓6基が谷筋に沿って発見されている。火葬墓は、短頸壺や鉄鉢形の鉢や高台杯に皿や杯蓋で蓋をしている蔵骨器が集石の中心に据え置かれていた。戦場古墳群6区のSX037火葬墓には、蓋に墨書がみられるものもある。戦場古墳群6区では、火葬墓の傍に土馬や人形を用いた祭祀遺構が確認され、土馬や人形は、火葬墓に対する墓前祭祀を行った際に使用されたものと考えられている。これら火葬墓は、6～7世紀にかけて造営された後期古墳に隣接して作られており、被葬者は祖先の墓を意識していたことが分かる[6]。

3　枝町遺跡の状況

枝町遺跡における弥生時代墳墓は甕棺墓9基であったが、神埼町教委報告分（神埼町文化財報告書第73集2002「馬郡遺跡」）を含めると弥生時代墳墓70基が調査された。すでに失われた甕棺や未調査地点のものを含めると100近い甕棺墓が存在したと推定される。甕棺の形式から弥生時代中期前半から中期後半にかけ造墓されたことになる。ただ、2次にわたる調査地点では、甕棺の造営時期に係る集落関連遺構は検出されていない。このため、この墳墓群の造営主体の集落は、調査地点の北側に位置する現在の馬郡集落内に存在したか、または、隣接地にあって墓域のみをこの地に求めてきたものと思われる。

枝町（馬郡）遺跡の甕棺墓は、集塊状の群を形成するが、部分的に列状となる甕棺も認められる。甕棺の細かな分析は今後に待たなければならないが、隣接する吉野ヶ里遺跡の墳墓群と合わせ考察を行うことで、枝町遺跡周辺の弥生時代の墓地様相も明確にできると思われる。

枝町遺跡では、古墳時代初頭のSD025溝跡と方形周溝墓群が接して発見された。この直線的な溝跡（濠）は、前回調査時にも外来系土器を中心とした土器群が多量に出土し注目されていた。今回、この溝跡がさらに東側に延び、その長さも135mを超えることが判明した。弥生時代の環濠とは異なり、大規模で直線的な濠は県内でこれまで確認されていない。その性格については不明な点が多いが、溝の南に方形周溝墓で構成される墓域がつくられていることから、集落域と墓域を区画する溝である可能性が強い[7]。

今回確認された古墳時代初頭の方形周溝墓6基は、比較的近接して営まれ、うち2基には陸橋部を持つ。枝町遺跡の東側丘陵部に位置する吉野ヶ里遺跡吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区には古墳時代初頭の前方後方墳2基と同時期とみられる方形周溝墓3基が営まれる。ほぼ、同時期に丘陵と低平地部と異なる立地を示す墳墓群がどのような関係にあったのか興味深い。

註

1）七田忠昭1997「神埼町・三田川町吉野ヶ里遺跡」『佐賀県における古代官衙遺跡の調査』佐賀県考古談話会

2）山中章1994「郡衙の構造と機能」『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

3）同上

4）八尋実1997「馬郡・高原遺跡群の調査」『佐賀県における古代官衙遺跡の調査』佐賀県考古談話会

第36図の志波屋二の坪遺跡・中園遺跡の遺構配置図は、上記に記載された遺構図を加筆編集し、再トレースを行なったものを使用。

5）河野竜介1996「長谷遺跡」『佐賀県文化財年報』1　佐賀県文化課

吉野ヶ里町教育委員会2006「大曲一の坪地区現地説明会資料」

河野竜介2005「大曲一の坪遺跡（3区）」『佐賀県文化財年報』10　佐賀県文化課

第36図の長谷・大曲一の坪遺跡の区画溝及び掘立柱建物跡の配置図は、「大曲一の坪地区現地説明会資料」を加筆編集し、再トレースを行なったものを使用。

大曲一の坪遺跡の整理作業は、吉野ヶ里町教育委員会により進められている。今回、大曲一の坪遺跡の区画溝を正倉として扱ったが、今後の整理作業により、その性格や時期が変更になることがあり得る。

6）市川浩文1999『戦場古墳群』佐賀県文化財調査報告書第140集

7）平成4年度に神埼町教育委員会により実施された中園遺跡の発掘調査（Bd－01～03区）で、古墳時代前期の竪穴住居跡7棟が検出されており、現在の馬郡集落及びその北側の水田地帯には、古墳時代前期の集落が広がっているとみられる。

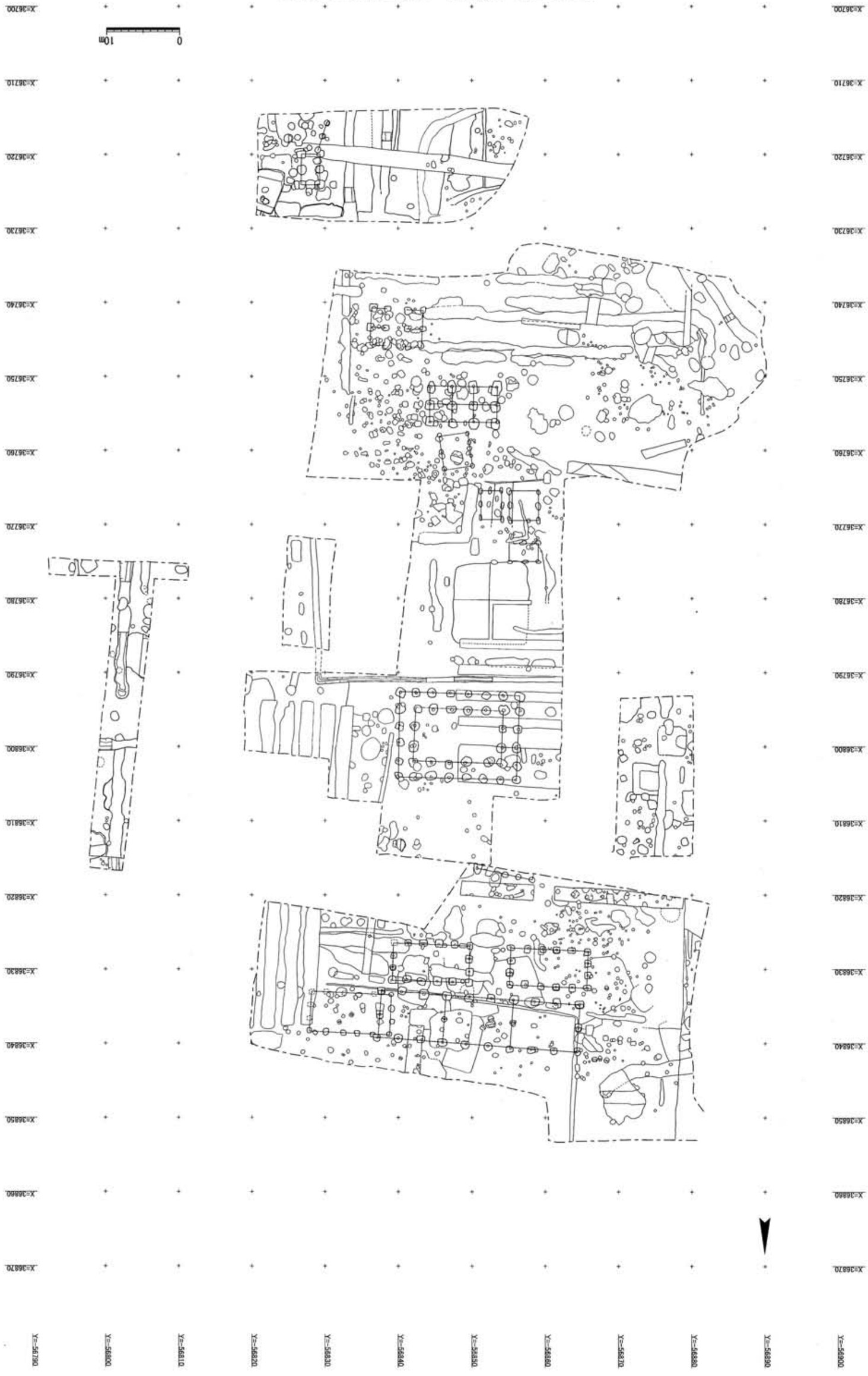
第２表　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区・枝町遺跡遺物観察表

挿図番号	器種	種別	出土遺構	法量(cm) 口径 / 長さ	器高 / 幅	底径 / 厚	色　調	技法・調整の特徴
15-1	壺	弥生土器	SK004土坑	－	(4.5)	－	淡褐色	櫛描重弧文あり
15-2	蓋	須恵器	SK004土坑	17.7	2.8	－	灰色	
15-3	皿	須恵器	SD007溝跡	18.5	2.8	－	灰色	
15-4	短頸壺	須恵器	SD009溝跡	－	(2.2)	－	灰色	
15-5	高杯	須恵器	SD009溝跡	－	(6.2)	7.6	灰色	
15-6	椀	須恵器	SD010溝跡	－	(1.5)	11.2	灰色	
15-7	杯	土師器	SD010溝跡	13.2	3.3	7.1	内外面　淡褐色	底部に板状圧痕あり
15-8	甕	須恵器	SD010溝跡	－	(9.4)	－	灰色	
15-9	鍋	土師器	SK014土坑	31.0	(11.1)	－	茶褐色	
15-10	蓋	須恵器	SK017土坑	13.8	1.4	－	灰色	
15-11	甕	土師器	SK017土坑	17.2	(6.7)	－	明黄褐色	
15-12	杯	土師器	SK025土坑	10.9	2.5	7.5	にぶい黄橙色	底部に板状圧痕あり
15-13	甑	須恵器	SK025土坑	12.0	13.5		灰赤色	赤焼き
15-14	甑	須恵器	SK025土坑	－	(13.8)	－	灰色	
15-15	羽釜	土師器	SK025土坑	－	(13.8)	－	内外面　にぶい黄橙色	
15-16	羽釜	土師器	SK025土坑	16.1	(17.0)	－	淡明褐色	胴上部にスタンプあり
15-17	鍋	土師器	SK025土坑	31.6	(14.3)	－	茶褐色	スス付着
15-18	蓋	須恵器	SX049塔基壇跡	14.5	(1.5)	－	灰色	
15-19	蓋	須恵器	SX049塔基壇跡	14.0	(1.8)	－	灰色	
15-20	甕	土師器	SX049塔基壇跡	17.7	(11.4)	－		
15-21	横瓶	須恵器	SX049塔基壇跡	－	(15.1)	－	灰色	
15-22	甕	土師器	SD062溝跡	39.1	(5.7)	－	明褐色	
16-23	蓋	須恵器	SD066溝跡	14.3	2.1	－	灰色	
16-24	蓋	須恵器	SD066溝跡	19.0	3.5	－	灰白色	
16-25	杯	土師器	SD066溝跡	9.0	3.9	5.1	橙色	
16-26	杯	須恵器	SD066溝跡	14.8	4.0	9.8	灰色	
16-27	皿	須恵器	SD066溝跡	23.6	4.8	20.2	灰色	
16-28	鉢	須恵器	SD066溝跡	24.6	10.8	－	灰色	
16-29	鉢	須恵器	SD066溝跡	20.6	12.5	－	灰黄色	
16-30	鉢	須恵器	SD066溝跡	21.1	(13.2)	－	灰色	
16-31	蓋	須恵器	SD067溝跡	14.6	3.4	－	灰色	
16-32	蓋	須恵器	SD067溝跡	14.8	1.6	－	灰色	
16-33	蓋	須恵器	SD067溝跡	14.2	(2.4)	－	灰色	
16-34	杯	土師器	SD067溝跡	13.7	3.1	10.4	明赤褐色	
16-35	杯	須恵器	SD067溝跡	15.5	3.8	11.2	灰色	
16-36	蓋	須恵器	SH080竪穴住居跡	13.6	(3.9)	－	灰色	
16-37	杯	須恵器	SH080竪穴住居跡	12.1	3.7	－	灰白色	
16-38	杯	須恵器	SH080竪穴住居跡	10.2	3.6		灰色	
16-39	杯	須恵器	SH080竪穴住居跡	11.6	3.6		青灰色	
16-40	蓋	須恵器	SB097掘立柱建物跡	14.7	(2.0)	－	灰色	
16-41	杯	土師器	SB097掘立柱建物跡	13.6	3.2	10.3	明赤褐色	
16-42	杯	土師器	SB097掘立柱建物跡	14.1	2.9	10.0	橙色	
16-43	蓋	須恵器	SH110竪穴住居跡	14.6	(3.2)	－	灰色	
16-44	高杯	須恵器	SH110竪穴住居跡	11.8	(4.8)	－	灰色	
16-45	甕	弥生土器	SH073竪穴住居跡	31.2	(9.2)	－	明赤褐色	
16-46	甕	弥生土器	SH073竪穴住居跡	31.2	(6.0)	－	明赤褐色	
16-47	甕	弥生土器	SH073竪穴住居跡	29.0	(11.9)	－	明赤褐色	
16-48	蓋	須恵器	SB096掘立柱建物跡	12.8	(3.7)	－	灰褐色	
16-49	鉢	土師器	SB096掘立柱建物跡	19.8	(3.6)	－	にぶい黄橙色	
16-50	甕	須恵器	SB096掘立柱建物跡	－	(9.3)	－	灰色	
17-51	杯	土師器	SX098土坑	12.5	3.9	7.1	にぶい黄橙色	
17-52	杯	土師器	SX098土坑	12.6	3.5	7.5	にぶい橙色	底部に板状圧痕あり
17-53	杯	土師器	SX098土坑	13.9	3.8	7.3	橙色	底部に板状圧痕あり
17-54	杯	土師器	SX098土坑	15.4	7.0	8.5	橙色	
17-55	杯	黒色土器	SX098土坑	15.0	7.3	8.1	内　黒色　外　橙色	
17-56	杯	土師器	SK102土坑	11.4	3.5	7.0	明赤褐色	底部に板状圧痕あり
17-57	杯	土師器	SK102土坑	13.5	3.2	7.4	にぶい橙色	
17-58	蓋	須恵器	SK102土坑	14.9	(1.1)	－	灰色	
17-59	蓋	土師器	SK102土坑	23.0	(3.9)	－	橙色	

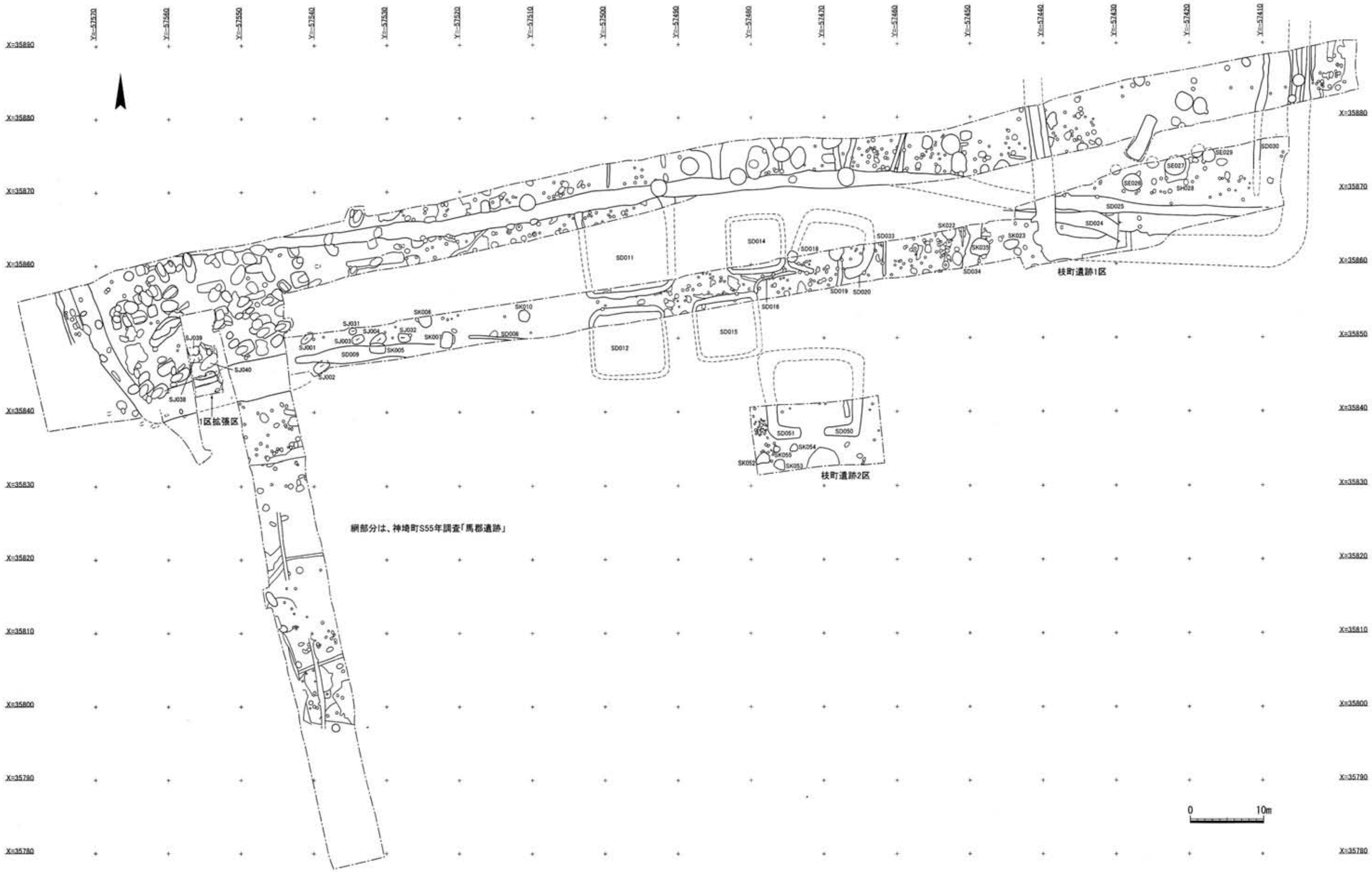
挿図番号	器種	種別	出土遺構	法量(cm)			色　　調	技法・調整の特徴
				口径	器高	底径		
				長さ	幅	厚		
17-60	杯	土師器	SD105溝跡	11.1	2.6	7.2	橙色	底部に板状圧痕あり
17-61	杯	土師器	SD105溝跡	11.7	3.1	7.1	橙色	
17-62	杯	土師器	SD105溝跡	12.7	3.6	7.5	橙色	底部に板状圧痕あり
17-63	杯	土師器	SD105溝跡	13.2	3.5	7.9	にぶい黄橙色	
17-64	杯	土師器	SD105溝跡	12.9	3.4	7.7	橙色	
17-65	杯	土師器	SD105溝跡	11.9	3.6	6.7	橙色	底部に板状圧痕あり
17-66	杯	土師器	SD105溝跡	12.6	3.2	7.0	橙色	底部に板状圧痕あり
17-67	杯	土師器	SD105溝跡	12.6	3.9	6.7	橙色	底部に板状圧痕あり
17-68	杯	土師器	SD105溝跡	12.9	3.6	6.9	橙色	底部に板状圧痕あり
17-69	杯	土師器	SD105溝跡	12.9	3.4	7.6	橙色	底部に板状圧痕あり
17-70	杯	土師器	SD105溝跡	13.2	3.3	8.0	橙色	底部に板状圧痕あり
17-71	杯	土師器	SD105溝跡	12.7	3.4	7.5	橙色	底部に板状圧痕あり
17-72	杯	土師器	SD105溝跡	13.0	3.4	7.3	橙色	
17-73	杯	土師器	SD105溝跡	12.9	3.8	6.9	浅黄橙色	底部に板状圧痕あり
17-74	杯	土師器	SD105溝跡	13.6	3.7	7.4	橙色	
17-75	杯	土師器	SD105溝跡	14.4	5.7	7.4	橙色	
17-76	壺	須恵器	SH108竪穴住居跡	4.8	5.5	－	灰白色	
17-77	鉢	弥生土器	SH107竪穴住居跡	16.0	(7.0)	－	浅黄橙色	
17-78	甕	弥生土器	SH107竪穴住居跡	11.2	(14.5)	－	にぶい橙色	
17-79	壺	弥生土器	SH107竪穴住居跡	22.6	34.0	－	褐色	
17-80	壺	弥生土器	SH114竪穴住居跡	11.8	11.9	－	浅黄橙色	
17-81	鉢	弥生土器	SH114竪穴住居跡	17.0	5.9	－	橙色	
17-82	壺	土師器	SK099土坑	15.5	23.7	12.2	橙色	
18-83	軒丸瓦	瓦	SD052溝跡	18.5	－	－		
18-84	軒丸瓦	瓦	SD007溝跡	18.0	－	－		
18-85	軒丸瓦	瓦	SD008溝跡	19.0	－	－		
18-86	軒丸瓦	瓦	SD007溝跡	20.6	－			
18-87	軒丸瓦	瓦	検出面	－	－			
18-88	軒丸瓦	瓦	検出面	－	－			
18-89	軒平瓦	瓦	検出面	(17.8)	4.8	－		
18-90	平瓦	瓦	SD007溝跡	(36.7)	29.8	－		
18-91	平瓦	瓦	SD007溝跡	(21.7)	(20.0)	－		
18-92	平瓦	瓦	SD036溝跡	43.5	29.1	－		
18-93	平瓦	瓦	SD036溝跡	(16.6)	(20.6)	－		
18-94	平瓦	瓦	SD036溝跡	(12.6)	29.2	－		
19-95	平瓦	瓦	SD062溝跡	(28.8)	(25.0)	－		
19-96	平瓦	瓦	SD062溝跡	(32.8)	(25.0)	－		
19-97	平瓦	瓦	SX051土坑	(24.5)	(17.5)	－		
29-98	甕棺	弥生土器	SJ001甕棺上甕	61.3	(56.6)	－	明黄褐色	
29-99	甕棺	弥生土器	SJ001甕棺下甕	69.8	85.8	10.8	淡褐色	
29-100	甕棺	弥生土器	SJ003甕棺下甕	－	(77.2)	13.8	明黄褐色	
29-101	甕棺	弥生土器	SJ002甕棺上甕	61.8	88.2	11.1	淡褐色	
29-102	甕棺	弥生土器	SJ002甕棺下甕	66.9	85.9	11.2	褐色	
30-103	甕棺	弥生土器	SJ004甕棺上甕	66.6	86.1	11.4	明黄褐色	
30-104	甕棺	弥生土器	SJ004甕棺下甕	66.8	88.8	10.8	明黄褐色	
30-105	甕棺	弥生土器	SJ031甕棺	－	(73.5)	12.0	淡褐色	
30-106	甕棺	弥生土器	SJ032甕棺下甕	－	－	－		
30-107	甕棺	弥生土器	SJ038甕棺上甕	－	(29.0)	－	明黄褐色	
30-108	甕棺	弥生土器	SJ038甕棺下甕	58.6	89.5	12.8	明黄褐色	
30-109	甕棺	弥生土器	SJ040甕棺	72.7	91.0	11.0	明黄褐色	
31-110	壺	弥生土器	SK053土坑	19.4	(8.4)	－	外面　明黄褐色	口縁部　ナデ　頸部　ハケ
31-111	壺	弥生土器	SK053土坑	25.4	(23.0)	－	外面　淡褐色	外面　ハケ　口縁内面　ナデ
31-112	甕	弥生土器	SK053土坑	27.6	(10.3)	－	内外面　明黄褐色	
31-113	甕	弥生土器	SK053土坑	29.6	(10.3)	－	外面　褐色　内面　淡褐色	口縁部　ナデ　胴部内外面　ハケ
31-114	甕	弥生土器	SK053土坑	12.8	17.5	6.6	外面　褐色	胴部外面　ハケ　内面　ナデ
31-115	甕	弥生土器	SK053土坑	25.4	(12.9)	－	内外面　淡褐色	口縁部　ナデ　胴部内外面　ハケ
31-116	甕	弥生土器	SK053土坑	25.3	(5.3)	－		
31-117	甕	弥生土器	SK053土坑	25.4	(12.9)	－	内外面　淡褐色	胴部内外面　ハケ
31-118	甕	弥生土器	SK053土坑	－	(18.2)	6.4	内外面　淡褐色	胴部内外面　ハケ

挿図番号	器種	種別	出土遺構	法量(cm)			色　調	技法・調整の特徴
				口径	器高	底径		
				長さ	幅	厚		
31-119	鉢	弥生土器	SK053土坑	7.7	4.3	4.3	外面　暗褐色	内外面　ナデ
31-120	鉢	弥生土器	SK053土坑	19.5	(10.0)	－	内外面　褐色	胴部内外面　ハケ
31-121	器台	弥生土器	SK053土坑	15.2	(10.0)	－	外面　明黄褐色	外面　ハケ
31-122	器台	弥生土器	SK053土坑	－	(6.8)	17.4	外面　明黄褐色	外面　ハケ
32-123	甕	土師器	SD025溝跡	13.8	(6.3)	－	外面　にぶい橙色	胴部外面　ハケ
32-124	甕	土師器	SD025溝跡	13.9	(8.8)	－	外面　にぶい橙色	胴部外面　タタキ後一部ハケ
32-125	甕	土師器	SD025溝跡	16.0	(14.9)	－	外面　赤褐色	胴部外面　タタキ　胴部内面　ナデ/ハケ
32-126	甕	土師器	SD025溝跡	12.8	(14.3)	－	内外面　にぶい橙色	胴部外面　タタキ一部ナデ
32-127	甕	土師器	SD025溝跡	17.3	20.2	－	外面　橙色	胴部外面　タタキ一部強いナデ
32-128	甕	土師器	SD025溝跡	14.3	14.8	－	内外面　赤色	被熱　胴部内外面　ハケ
32-129	甕	土師器	SD025溝跡	16.6	(19.0)	－	内外面　にぶい橙色	口縁部に窓有
32-130	壺	土師器	SD025溝跡	18.9	(6.0)	－	内外面　明赤褐色	胴部の一部にミガキ
32-131	壺	土師器	SD025溝跡	17.0	(9.1)	－	内外面　橙色	外面　ハケ後ナデ
32-132	壺	土師器	SD025溝跡	18.7	29.3	5.0	内外面　にぶい橙色	口縁部外面　ナデ　胴部外面　ハケ 底部外面　タタキ　胴部内面　ナデ
32-133	鉢	土師器	SD025溝跡	11.8	6.0	3.6	内外面　浅黄橙色	外面　ナデ　内面　ハケ
32-134	低脚杯	土師器	SD025溝跡	10.7	7.4	7.9	内外面　明赤褐色	杯部内外面　ミガキ
33-135	甕	土師器	SD011溝跡	－	(17.0)	－	内外面　褐灰色	胴部外面　タタキ　一部ハケ目残る 内面　ヘラケズリ
33-136	甕	土師器	SD011溝跡	18.3	(19.0)	－	内外面　褐灰色	胴部外面 タタキ後ハケ 内面 ハケ
33-137	壺	土師器	SD051溝跡	－	(16.6)	－	淡褐色	胴部外面　ハケ　胴部内面　ケズリ/ハケ
33-138	壺	土師器	SD051溝跡	－	(20.3)	－		
33-139	壺	土師器	SD051溝跡	－	(11.3)	－	淡褐色	
33-140	壺	土師器	SD050溝跡	－	(13.5)	－	外面　淡褐色	胴部外面　ハケ　胴部内面　ケズリ
33-141	甕	土師器	SD050溝跡	－	(4.8)	－		胴部外面　ハケ　胴部内面　ケズリ
33-142	高杯	土師器	SD050溝跡	－	－	18.8	外面　淡褐色	内面　ハケ
33-143	高杯	土師器	SD051溝跡	20.5	(7.3)	－	明黄褐色	口縁部内外面　ハケ後ミガキ
33-144	壺	弥生土器	SD051溝跡	19.6	(8.4)	－	淡褐色	口縁部外面　ハケ後ナデ
33-145	壺	弥生土器	SD051溝跡	21.4	(14.0)	－	淡褐色	口縁部外面　ヨコナデ　頸部内外面　ハケ
34-146	蓋	須恵器	SK006土坑	16.5	(1.5)	－	黄灰色	内外面　ナデ
34-147	杯	土師器	SK006土坑	16.6	4.2	12.5	にぶい橙褐色	内外面　ナデ
34-148	杯	土師器	SK006土坑	17.6	5.2	10.1	橙色	
34-149	蓋	須恵器	SK007土坑	16.2	1.9	-	黄灰色	内外面　ナデ
34-150	杯	須恵器	SK007土坑	14.3	3.9	9.2	灰白色	内外面　ナデ
34-151	杯	須恵器	SK007土坑	14.3	4.2	9.6	灰色	内外面　ナデ
34-152	杯	須恵器	SK007土坑	14.5	3.4	11.3	灰色	内外面　ナデ
34-153	杯	須恵器	SK007土坑	16.6	5.8	11.5	灰色	外面　ナデ　下部にケズリ　内面　ナデ
34-154	杯	土師器	SE027井戸跡	11.2	2.7	6.6	橙色	内外面　ナデ
34-155	杯	土師器	SE027井戸跡	12.2	3.8	7.0	にぶい橙色	内外面　ナデ
34-156	杯	土師器	SE027井戸跡	13.0	3.0	7.2	浅黄橙色	底部板状圧痕
34-157	杯	土師器	SE027井戸跡	15.4	5.8	8.5	にぶい黄橙色	内外面　ナデ
34-158	鉢	土師器	SE027井戸跡	23.5	6.5	－	にぶい橙色	内面　ケズリ

※法量（　）は残存値。色調は区別のないかぎり外面の色調を示す。



第37図　吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区遺構配置図（1/500）



第38図　枝町遺跡遺構配置図（1/500）

写 真 図 版

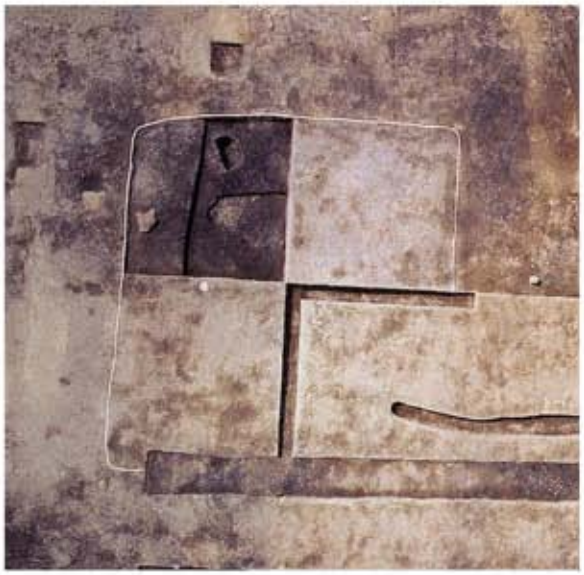
大曲一の坪地区全景（南上空から）

大曲一の坪地区全景（東上空から）

大曲一の坪地区366区全景（上空から）

366区　SB095・096・097掘立柱建物跡全景（上空から）

大曲一の坪地区348区全景（上空から）



SX049塔基壇跡全景（上空から）

大曲一の坪地区349区全景（上空から）

SB058掘立柱建物跡全景（上空から）

SB061掘立柱建物跡全景（北上空から）

SB011掘立柱建物跡全景（上空から）

SB011掘立柱建物跡P-1半裁状況（東から）

SX049塔基壇跡南側土層断面（東から）

SD007溝跡瓦出土状況（南から）

SD036・009溝跡土層断面（北西から）

SD062溝跡瓦出土状況（南から）

SK013土坑瓦出土状況（南から）

SK004土坑検出状況（南から）

SK014土坑半裁状況（南から）

SK017土坑半裁状況（南から）

SK020土坑半裁状況（南から）

SK025土坑土器出土状況（東から）

SK031土坑半裁状況（南から）

大曲一の坪地区348区全景（南から）

SD066溝跡全景（南から）

SD066溝跡遺物出土状況（南東から）

SD066溝跡土層断面（北から）

大曲一の坪地区352区全景（南から）

大曲一の坪地区353区全景（南から）

SH085竪穴住居跡・SD086溝跡検出状況（北から）

SH084竪穴住居跡検出状況（東から）

SD105溝跡土器出土状況（東から）

SK098土坑土器出土状況

SK099土坑土器出土状況（南から）

SK102土坑検出状況（西から）

枝町遺跡全景（東から）

枝町遺跡Ⅰ区東側全景（上空から）

枝町遺跡全景（上空から）

枝町遺跡Ⅰ区中央部全景（上空から）

枝町遺跡Ⅰ区西側全景（上空から）

SJ001甕棺出土状況（北から）

SJ002甕棺出土状況（北西から）

SJ003・031甕棺出土状況（北から）

SJ004甕棺出土状況（南から）

SJ032甕棺出土状況（北から）

SK006土坑半裁状況（南から）

SK007土坑土器出土状況（東から）

SE027井戸跡検出状況（北から）

SD025溝跡土器出土状況（西から）

ST011・012方形周溝墓全景（西から）

SD019溝跡検出状況（南から）

ST018方形周溝墓（SD020溝跡）検出状況（南から）

ST016方形周溝墓検出状況（南西から）

ST014方形周溝墓検出状況（西から）

ST050方形周溝墓全景（南から）

ST050方形周溝墓全景（東から）

SK053土坑土器出土状況（北から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	よしのがりいせきおおまがりいちのつぼちく・えだまちいせき
書名	吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区・枝町遺跡
副書名	県立吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第172集
編著者名	細川金也
編集機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840-8570　佐賀県佐賀市城内一丁目1-59
発行年月日	平成19（2007）年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査対象面積	調査原因
よしのがりいせき 吉野ヶ里遺跡 おおまがりいちつぼちく 大曲一の坪地区	さがけんかんざきぐん 佐賀県神埼郡 よしのがりちょう 吉野ヶ里町 おおまがり 大曲	413132	－	33° 20′ 04″	130° 23′ 12″	20000517 ～ 20040309	5,000 ㎡	県立吉野ヶ里歴史公園建設、または公園設計資料を得るため
えだまちいせき 枝町遺跡	さがけんかんざきし 佐賀県神埼市 かんざきまちつる 神埼町鶴	413216	－	33° 19′ 31″	130° 22′ 49″	19990201 ～ 19990331	1,000 ㎡	
						19991027 ～ 19991124	150 ㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉野ヶ里遺跡 大曲一の坪地区	集落跡・墓地	弥生時代、古墳、奈良、中世	甕棺墓、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、塔基壇、土坑	銅鐸、弥生土器、須恵器、土師器、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦	銅鐸埋納坑 辛上廃寺伽藍配置
枝町遺跡	集落跡・墓地	弥生時代・中世	甕棺墓、条濠、方形周溝墓、土坑、井戸、溝跡	甕棺、弥生土器、土師器、須恵器、弥生時代小型倣製鏡	古墳時代初頭の方形周溝墓群と区画溝

佐賀県文化財調査報告書第172集
県立吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書

吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区・枝町遺跡

発　行　日　平成19年３月30日

編集・発行　佐賀県教育委員会
佐賀市城内一丁目1-59

印　　刷　大同印刷株式会社
佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20

再生紙を使用しています